
アルス × マグス

キダイ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

アルス×マグス

【Nコード】

N1720W

【作者名】

キダイ

【あらすじ】

——ここは『術』と言う魔法に似た文化が科学の代わりに発達した世界——

旅人の少年ユアンは、『中央都市』と呼ばれる都市に向かって旅を続けていた。しかしその道中、諸事情によって食料を全てなくしてしまい餓死寸前の状態まで追い込まれてしまう。そんな彼を救ったのは、まだ年端も行かない幼い少女だった。その恩を返すためユアンは少女の旅に同行する羽目になったのだが、どうやら彼女は人には言えない事情を抱えているようで……。これは様々なキャラク

ター、様々な『術』、そしてユアン＝バロウズと言う一人の少年の人生を描いた、王道バトルファンタジーです！ ギャグ・ほのぼの・恋愛5割、バトル&シリアス5割ぐらいでやっていけたらいいなと思っています。

二つの世界

この惑星には二つの世界がある。

『アルス宗教を消した世界』と、『マグス科学をなくした世界』。

この二つの世界は大昔、戦争をした。大きな、とても大きな戦争を。

そして、その果てに行きついたのは、世界の分断。

東経140度、西経40度の位置に築かれた人知を超える一枚の壁によって。

長く高く分厚く強固で、惑星を縦に横断し、決して越える事はない壁によって。

二度と戦争を起こさぬよう神が作ったとされるそれを、人々はこう呼んだ。

『アプソリュート絶対者による不滅の天壁』と……。

この物語はそんな二つの世界の内、
『科学^{マクス}をなくした世界』での
お話です。

二つの世界（後書き）

かなり大雑把な厨二病丸出しの世界観の説明です。
続き読んでくれたら嬉しいです。

ちなみに今のところ本編ではこの設定は全く使いません＞＜
飽くまでそういう世界観だと理解してもらえればそれだけで十分
です。

1 ゴーレム

とある荒野に遺跡群があった。

大昔はどこかの国の都だったらしく、結構立派なギリシア建築に似た壁・柱・石段などが広範囲に並んでいる。昼間なら神秘的に見えるだろうが、真夜中だと少し不気味に感じられるところだった。

そんな（おそらく）神聖な場所であろう遺跡の中で、

「うぎゃアあああああああああああああああああああああ
あああっ！！」

情けない声を上げながら慌しく走り回っている少年が一人。

「なんでこっちに来るんだーっ！」

絶叫している少年の名前はユアン＝バロウズ。

歳は十六。髪と瞳は黒。背丈は歳相応。

服装は裾が膝下まである黒色のショートパンツに赤色のＴ＝シャツ。
ッ。

その上からロングコートを羽織っていて、右手首には銀色のチェーンに吊るされた日本刀の柄だけストラップ。

そんな思春期丸出しな格好をしているどこにでも居そうな少年は、旅人だ。

そして彼は今全力で走っていた。

理由は簡単。

追われているからだ。

全長五メートルを越す、岩で創られたゴーレムに。

それは周りにある遺跡の残骸を固めて無理やり肢体の形にしたようなものだった。しかし頭は無く、左右の大きさはバラバラで右腕が左腕の三倍は太くて長い。バランスが取れているのが不思議なくらいだ。

そんな歪なゴーレムが一步前に踏み出すたびに、地面が大きく揺さぶられる。

（どうしてこいつは俺を追いかけてくるんだーっ！）

とか心の中で言っているユアンだが、実はその理由は分かっていた。

それは、

ゴーレムの上でダイナミックに用を足したからだ。

全く持つてくだらない理由^{わけ}である。

端から見たらただの露出魔^{へんたい}だ。

最初は突然の尿意から起きた、ただの好奇心だった。

遺跡の外は一八〇度地平線しか見えないし真夜中だし自分以外誰もいないし静かだし月が輝いてるし星が綺麗だし、だから『高い所ですしたいなー』と思ったのだ。

そして見つけたのが、頭のない巨大な石像だった。

その石像はその場で堂々と立っていたのではなく、何故か膝立ちだった。それでも高さは相当なものだったので、彼は迷わず石像に登っていきその上で豪快に排泄物を放出した。

壮大な景色。しなやかな風。

もの凄く清々しかった。

心の中の楔くさびから解き放たれた気分だった。

そんな天からの幸せは、しかし長くは続かなかった。

突然、足元が揺れた。

それが、石像が立ち上がったものだとして理解した時には、既に手遅れ。

神聖な場所をその場の好奇心で汚した少年に神の鉄鎚を下すべく、『ゴーレム』は始動した。

そんなバカで哀れでヘンタイな少年を、遠くから眺めている者がいた。

十四・五歳ぐらいの娘だ。

背丈は同年代の女の子よりは少々低め。

上は薄茶色のブレザーで、下は赤と黒のチェックが入ったプリーツスカート。

ピンク色の短髪の上からは、魔女が被っていそうなつばの広い三角帽子に、紫色のローブ。

容姿はとても端麗で、いたずら好きそうな顔立ちをしているが、学校では絶対にモテているだろうと言い切れるほど。

そんな娘は、遺跡にある高さ五メートル程の柱の上に腰を掛けていた。

そして彼女は優しい音色で小さく笑う。

「あんなアホな事する人、初めてみた」

1 ゴーレム（後書き）

まだまだ拙い文章の上、ヘンタイ混ざっていますが続き読んでくれたら嬉しいです。

2 稲妻

この世には科学技術は存在しない。

代わりに『術』と言う魔法に似た力が存在する。

炎や風を熾したり、水や土を出現させたり、光や音を放ったり。そんな事が物や機械なしで出来るのだ。

そして人は誰しも体内に『元力^{マグナ}』と言うエネルギーを持っている。その総量は人によって差はあり、修行などをして増える事はないが、この世界の人間は『元力^{マグナ}』を使い『術』を発動させるのだ。

ゴーレムもそんな『術』の一種で今回の場合はトラップ式ゴーレムと言い、何らかの条件が満たされると自動的に発動し条件にあった標的を叩き潰す、主に建造物の護衛に使われるものだ。ゴーレムを動かすためのエネルギーは、基本的にゴーレム本体——主に胴体の中心部に貯められている。

（だからエネルギーである元力^{マグナ}が切れるまで、逃げ回っていれば良い訳なんだが……）

「いったい、いつになったら止まるんだよおおおおおおお
！」

絶叫するユアンの後を、ゴーレムは乾いた大地を容赦なく踏み潰しながら追いかけて来る。

（ちくしょう、俺の力だけじゃあいつは止められないっ）

ゴーレムが地面を踏み締める度に起こる地震に似た振動に、毎回足を掬われそうになる。

（そう言えば攻撃すれば元力^{マグナ}を減らす事ができるって聞いた事があるな）

そんな事を思い出しユアンは走りながら後ろを振り向く。
すると、ゴーレムが己の巨大な右腕を、拳を握って振り上げていた。

「やば、い——ッ！」

だが、気付いた時には遅かった。
ゴーレムは釘を打ち付けるように、標的を叩き潰すためその岩塊を振り下ろす。

瞬間、

轟ッ！！　　と言う振動に大地が、音に大気が震えた。

ところが、それは右腕が振り下ろされたものではない。

ゴーレムの右腕が、左からの不意な攻撃により破壊されたものだった。上腕部分が砕け散り、残った前腕部分が回転しながら飛んでいく。

再び揺れが両足に伝わった。視界の隅に濛々と込み上げている粉塵が映り込む。吹っ飛んでいった前腕部が遺跡内のどこかに落下したのだろう。

「は……?」

思わず立ち止まっていたユアンには、意味が分からなかった。彼にはゴーレムの腕が突然吹き飛んだように見えたのだ。

しかし、ゴーレムはその程度では止まらない。右が消えたのなら次は左で、と言うように腕を振り上げ再び標的を圧殺するべく動き出す。

呆然としていたユアンだったが、そこへ声が聞こえてきた。

「その面白い人、ぼーっとしてたら死んじゃうよ」

そんな声を聞いたと思ったら、

一体いつ現れたのか、その女の子は目の前に立っていた。

ユアンに背を向け、ゴーレムの真正面に。

女の子は紫色のローブを羽織り、つばの広い三角帽子を被っていた。

そして右手には一・五メートルほどの杖を握っていた。先端がUF0キヤッチャーのアームのような形状をした、三つの爪が付いている。そのため杖と言うより槍に近い。

「さて、ゴーレム^{きみ}には止まってもらおうよ」

そう言っ杖の先端に付いている三つの爪をゴーレムに向けた女の子は、

「術式^{ようせい}の発動^{さんきてく}」

そのまま陽気に唄い出す。

「精霊の書の契約に基づく」
わたしはあなた のけいやくしゃ

とても綺麗な音色に、ユアンは思わず聞きいつていた。
対しゴーレムは左肘を引き、今度こそ標的を潰すために狙いを定める。

「元力の形成、座標の固定」
わたしのちからと ひきかえに

と、そこである変化に気付いた。
杖の先端に付いている三つの爪の中心。その中で、何かが煌いたのだ。

最初のうちは断続的で不安定なものだったが、

「光と音を超越した現象」
おおきなおとひかりをちょうだい

次第に大きくなっていき、それを見ていたユアンが何らかの『術』だと判断した時には、

「トルトニス」
とるとにす

女の子は既に詠唱を終えており、ゴーレムは左拳を前に突き出し、それは起こった。

ドゴンッ！ と、耳をつんざくような轟音と、視界を覆うような閃光を纏った白い稲妻が、三つの爪の中から発射された。

ほぼ同時に発射されたゴーレムの拳を消し飛ばし、そのまま肢体の中心に突き刺さる。

それは天から降る落雷そのものだった。

あまりの光量にユアンは目を瞑っていたが、またすぐに瞼を開く。

「……嘘だろ」

そして、第一声は再びの絶句だった。

簡潔に言おう。

ゴーレムの胴体に直径二メートル以上ある風穴が空いていた。

一瞬動きを止めていたゴーレムだが、全身に亀裂が走りガラガラと崩れ去る。

崩れる音が悲鳴のように聞こえたのは気のせいか。

大量の遺跡の残骸に地面が震える。灰色の粉塵が視界を覆う。

（……止まった？）

灰色のカーテンが視界を仕切っているせいで確信はできないが、十中八九ゴーレムは壊れているだろう。

（何だかよくわかんねーけど、助かった）

ようやく安堵の息を出したユアンだが、そこで再び女の子の声が聞こえた。

「あーもうこれうつとーしいっ！」

投げやりの声が届くと同時に、前方から不自然な風が吹いた。それは粉塵を攫って行きユアンの視界を解き放つ。

目の前に現れたのは魔女のような女の子。

彼女はユアンに視線を向けると、のん気な声で言葉を発する。

「やつほー♪ 大丈夫だったあ？」

3 堕ちてゆく

真つ暗な遺跡の中を歩いている人影が二つあった。

「あのゴーレム、体が風化してたから簡単に穴開いたね」

「あんたの術の威力がすごかったただけだと思うけど」

「えーそんな事ないよー」

ユアンは魔女のような格好をした女の子と、なぜか一緒に歩いていた。と言うか彼女が勝手に付いて来ているのだ。

「でも君、もうちょっと周り警戒した方がいいよ。誰かが色々見るかもしれないし」

その言葉にユアンは、ドキッと肩を大きく震わせた。

「もしかして……、見てた？ 俺の――」

豪快な滝を、とまでは流石に言えなかった。彼は口に溜まった唾を飲み込み、彼女の返答を待つ。しばらく考え込んでいた女の子は人差し指で自分の頬を触って、

「さあ？」

とか言いつつも顔はとても面白そうに笑っている。

彼女は確実に見ていた。態度から見てそう確信したユアンは、どうしようもなく死にたくなった。名前も知らない女の子に自分のア

レを見られていたのだから、当然と言えばそうなのだが。

「それよりさ、君はどこに向かつてるの？」

そんな彼の心境などお構いなしに、女の子は普通に話し掛けてくる。

この娘かなりの大物だな、と思いつつ、

「どこって、荷物が置いてある場所だけど」

目的地を簡潔かつ曖昧に言った。と言うかあまり言葉を交わしたくないのだ。恥ずかしいから。

「それってあの煙が上がってるところらへんなの？」

向かっている方向から察したのか、女の子は小さく細い指で遺跡の中から上がっている煙を差す。ユアンもそれを確認して、

「ん？ まあそうだけど……、って煙？」

思わず足を止めてしまった。

「？ どーしたの？」

突然立ち止まったユアンに女の子は首を傾げているが、彼は気にも止めていない。

どうして煙が上がっているのか。すぐには分からなかったが、今までの事を全て思い返してみても、心当たりを見つけた。

「確かあっちの方向って……」

ゴーレムの右腕が吹っ飛んでったような。

そう思った瞬間。

ユアンの頭の中に最悪な状況が思い浮かんできた。

それは。

自分の荷物が上から降って来たであろうゴーレムの残骸に、押し潰されているのではないかと。

あれは煙ではなく、ゴーレムの右腕が落下した際に起こった粉塵なのではないかと。

気付いたら彼は走り出していた。

女の子を一人置いて。全力で走っていた。

そして案の定、彼の視界には最悪な光景が映っていた。

「嘘だろ、俺の荷物が……」

そこには元々、小さな神殿が建っていた。小屋ぐらいの大きさだ。四本の柱が正方形の石段の角に立っていて、屋根も崩れていなかった。おそらく、この遺跡群の中で唯一崩れずに建っていた神殿だったのだろう。

だが、今はもう粉塵が立ち込める瓦礫の山に成り果てていた。神殿に置いてあったユアンの旅の荷物を埋めて。

「そんな、俺はこれからどうすればいいんだ……」

バッグは二つあった。一つは旅の着替えなどが入っていて、もう一つは食料が入っていた。

しかし、それらはもうない。

旅に必要な物資は全て瓦礫の下だ。

試合に負けたプロボクサーみたく、地面に膝を付いたユアン。そんな心を碎かれた少年に、後ろから慌てて追って来た魔女のような格好をした女の子が、

「うわーこれはひどい。なーに？ 君の荷物この下にあつたの？
ついてないねー。まあ死ななかつただけマシじゃない？」

と、他人事自分には関係ありません感丸出しな事を言ってきたので、ユアンは思わず、

「マシじゃねーよっ！！」

ツツコンでいた。

「このままじゃ確実に死ぬよ餓死するよ食料ないんだぞんな状態でこんな荒野の真ん中で生きていける訳ねーだろどーすんだよこのままじゃ誰にも見送られずに天に召されるよ天使が迎えに来ちゃうよ何でいつもいつも俺はこうなんだー！！っ！！」

遺跡にユアンの悲痛な叫び声が響き渡ったが、隣にいる女の子は全く変わらぬお気楽態度で、

「天使いいじゃん。きっと幸せになれるよ。あの世で」

「そんな幸せまだいらなから幸せになるならこの世でなりたいからっ！！」

「大丈夫。天国に行く時はあたしがちゃんと見送ってあげるから安心してっ」

「見送ってんじゃねーよ助けるよっ！」

「その後には、つばなお墓立ててあげるからね♪」

[illegible]

的確なツツ コミの後に頭を抱えて絶叫するユアン。
始まって早々終わりそんな気がしてならない。

「まあまあそんな落ち込まないで、きつと何とかなるさ」

キラキラ笑顔で親指を立てている女の子は、相変わらず他人事丸出しなまま。その親指押し折るぞクソアマとか心の奥底で思っていると、

「ほら、あそこに無事なバツグもあるっぽいし」

⌈
⋮
?
⌋

そんな何気なく言つた彼女の言葉に、ユアンは頭を上げていた。女の子が見ている先を追つてみると、そこには肩に背負うタイプの大きなバッグが転がっている。

「あれは……」

間違ひなく自分のものだった。

これは飽くまで推測に過ぎないが、上空からゴーレムの右腕が降って来て神殿を押し潰した際に起こった衝撃波によって、運良くあのバグだけ飛ばされたのだろう。

経緯は何にせよ、その事実^にユアンは泣きそうになった。
絶望の中からの、ほんの僅かな天の救い^{わす}に。

「これで何とかなるでしょ？」

「……ああ」

あれさえあれば旅は続けられる。たとえ食料が入っている方のバツグじゃなくても、きつと何とか――、

「ならねーよっ――！」

食料がなければ餓死エンドは変わらない。天からの救いは本当に僅かだった。

再び頭を抱えて唸っているユアンだったが、そこで不意に気配を感じた。

（……？）

誰かに見られているような感じがして、彼は頭を上げようとする。だがその前に、

背中を裂くような殺気が襲った。

「――ッ！」

先程までの能天気な絶望気分が弾け飛ぶ。
ユアンは反射的に後ろを振り返っていた。

しかしそこにあるのは暗闇に沈む遺跡だけ。変わったところはない。

（何だ、今の……）

尋常な殺気ではなかった。もしかしたら今の一瞬で自分は死んでいたかもしれない。そんな風に思わせられるほどの悪寒を感じた。

（気のせい……、じゃねーよな）

あれほどの気配が思い違いだったとは考え難い。現に体中から気持ちの悪い汗がじつとりと纏わりついている。

当初、この遺跡には自分以外誰もいないと思っていた。こんな滅んだ都に住んでいる者などいる訳がないと思っていた。

だが自分以外に人はいた。

隣に立っている女の子が正にそれだ。

他にも人がいるかもしれない。ここに住んでいる人とかがいるかもしれない。もっと得たいの知れない何かがいるかもしれない。

（何にしても……）

ここは危険だ。

彼はそう直感した。

急いで遺跡から出ようと思い、バッグを取りに行こうと一歩前に出たユアンだったが、

「——」
「ごめんね」

不意に後ろからそんな声が聞こえてきた。悲しそうな、辛そうな音色で。

それが魔女のような格好をした女の子のものだと判断したユアンは、彼女に視線を向けようとして、背後から強烈な突風が吹きつけてきた。髪が靡き、衣服に引かれて体が揺れる。そして気が付くと、

ユアン「バロウズは上空を舞っていた。

「……は？」

三六〇度見渡す限りの星空の中、間拔けた声が口から漏れる。空中で数秒、無重力状態が続いていた彼の体が地上からの重力に引かれ出すのと、

彼の表情がじわじわと青白くなっていくのは比例していた。

「なっとなっ、なんじゃこりゃあああああああああああああああああああっ!？」

ついでに本日五度目の絶叫が迸り、そうしてユアンは、上空一〇〇メートル地点から地上へ落下していった。

1 空腹

ユアン「バロウズは生きていた。

上空一〇〇メートル地点から落下しといてどうして生きているのか。

それは本人にも分からない。体はどこにも怪我をした部分はなく、相変わらずの健康体だ。

ただ、気が付いたら遺跡の外側に倒れていて、夜が明け陽が昇っていた。

「まったく、何であいつはいきなり俺をふっ飛ばしたんだ？」

そんな疑問も、一週間経てば案外どうでもよくなってしまうもの。

現在時刻はお昼過ぎ。

荒れた大地に容赦なく降り注ぐ太陽の光の下、彼は転がっていた長い木の枝を杖のように地面に突きながら、覚束ない足取りで歩いていた。

「……くそ、もう季節的には秋の中間ぐらいだって言うのに、なんでここ一週間に限って真夏日が続くんだよっ」

ユアンは一度立ち止まって、ギラギラと照り付ける無慈悲な太陽を睨みつける。だがそんな事をしたところで太陽の野郎が日差しを和らげてくれる訳もなく、光を直接見たせいで視界が眩んで倒れかける。

「ちくしょう。バッグの隣にお供え物みたいに置いてあった食料と

水は四日前に底を尽き、照り付ける太陽のせいで体力はどんどん奪われて、夜は寝たいのに腹が減りすぎて眠れない。金はあるからどこかで飯を食いたいんだけど、辺りに町の気配はなし。

まあ当たり前って言ったら当たり前なんだがな。予定じゃ後三日ぐらいは歩かなくちゃいけないはずだし……。ふっふふ、ここまで来ると笑えてくる。まさに不の輪廻だな」

笑っている場合ではないと分かっているが、こんなどうにもならない現実を突きつけられて正常でいる方が難しい。

ユアンは再び歩き出したが体は不安定に左右に揺れている。歩くスピードはハイハイする赤ちゃんより遅い。

視界が歪む。目の前の風景が霞んで見えてくる。

頭がくらくらする。いつ意識が跳んでもおかしくない極限の状態だ。

汗はもう出ない。そんな水分は既に体の中には存在しない。

「……これから俺、どーなるんだろ？」

ほとんど停止しかけている脳みそで、ユアンは軽く自分の未来を想像してみた。

まず最初に日射病と言う言葉が浮かび、次に脱水症状と言う症状名が浮遊する。トドメに熱中症と言うとんでもない病名が頭の中を支配して、

「……これは、マジでシャレになんねーぞ」

乾いた喉から出たのは霞んだ絶望の言葉。歩く力を無くしたユアンは乾いた地面に膝をつき、そのまま焼ける大地にうつ伏せで倒れこむ。ジユワ、と肉が焼けるような音がしたけどきつと幻聴だろう。

幻聴だと信じたい。

カラン、と木の杖が地面に転がり落ちる音が耳に届くのを最後に、視界の全てが暗闇に支配される。

そうして、不幸な旅人ユアンは荒れた大地の真ん中で動かなくな
った。

2 出会い

額に冷たい感覚が伝わってきた。

「……うつ」

鈍い痛みが頭の中を走り抜ける。そのせいで思わずうめいてしまった。

嫌な寝起きだ、と思いながらユアンは重く閉ざされた瞼をゆつくり開くと、視界に入ってきたのは『黒』だった。ただしその『黒』は完全なる『黒』ではなく、所々小さな光が輝いている『黒』だった。

そう、例えるなら星空。

「……」

素直に綺麗だと思った。光の数は少ないが、それでも綺麗だと思った。そんな事を考えられるぐらいに思考が回復したユアンはそこでようやくある事に気付く。

「……何で俺、こんなところで寝てんだ？　つーか何で俺生きてんだ？」

普通なら荒野の真ん中で干からびていたはずだ。別に死にたかった訳ではないが、そうなっていなければ不自然だった。

額には湿ったタオルが置かれていて、明らかに誰かに看病されていた感丸出しだ。

すると、

「そんなの私が助けたからに決まってるんだよ」

突然、そんな風に女の子の声が聞こえた。音源を辿って首を右に振ると、そこには小さな少女が地面に女の子座りをしていた。

「おはよう。って言っても、もう夜なんだけどね」

ひまわりのように微笑む少女。

夜だと言うのにその笑顔は妙に輝いているように見えた。

髪の色はブラウンで長くもなく短くもないセミロングヘア。白く柔らかな肌に、毛先が外側に若干ウェーブがかっているのが印象的な娘だった。

歳は十二・三歳ぐらいで背丈も歳相応かそれ以下。まだ幼さが残っている顔つきだが、将来はきっと美人になるだろうと思うほど整っている。

服装はひらひらした白いマキシワンピースの上に、前を開けたまま丈の長いベージュのナチュラルコートを着ている。彼女の隣には黒いツイード帽子と荷台の付いた大きなスニーカーが置いてあった。

服やブーツには所々汚れが目立っているが破れたり、穴が開いていたりはいしていない。どうやらかなり上等な物のようだ。

「でもびっくりしたよ。こんなところに人が倒れてるなんて。最初見たときはもう死んじゃってると思っちゃって穴の中に埋めてあげようとしたんだけど、土かぶせてる途中で体が動いたときはかなり

焦ったね。危うく生き埋めにしちゃうところだったし」

てへへっ、と笑いながらとんでもない事を言い出す少女にユアンはぎよっとした。

（だから俺の体はこんなにも砂だらけなのか）

ま、でもぎよっとしたり服が汚れるだけで済んで良かったなー、とポジティブな方に考え直すと、

「つーか何で俺を助けてくれたんだ？」

「何でって、人を助けるのに理由なんているの？」

「いや、別になくてもいいんだけどさ」

ユアンは曖昧な表情で言う。

「でもあえて理由を付けるなら、話し相手がほしかったんだよ。一人で旅するのって結構寂しいでしょ？」

まるでユアンもそう思っているのだろぅと決め付けるような言い方だった。

（話し相手がほしかった、か）

その気持ちは分からない事もなかった。

実際ユアンは一週間前に魔女っ娘見たいな女の子に出会って以来、誰とも会話していなかった。途中で誰とも合わなかったからだ。そもそもこんなところで人に会うほうが珍しい。

となると、この会話は一週間ぶりと言う事になる。

会話が出来ないと言うものは結構精神にくるものだ。

普段おしゃべりな人に一週間誰とも喋らずに過ごしてみても、
言っても一〇〇パーセントそれは達成されないだろう。それはもうその人にとって拷問に近い行為なのだから。

例えあまり喋らない人でも、一言も喋らずに過ごすのは不可能と言っていていいだろう。

ただ、誰かと喋りたいからと言ってやたらめったら他人に話し掛けるのも頂けない。

世界にはたくさんの人たちがいる。

一〇〇人いれば一〇〇通りの人格がある。

誰とも何ら隔たり無く会話が出来る人もいれば、その逆で人見知りな人もいる。もっと大げさに言うと、道行く人が皆悪人でないように、皆善人とも限らないのだ。

詰まるところ何が言いたいのかというと、こんな荒れた大地の真ん中でぶっ倒れている得体のしれない人間を助けるなんて馬鹿かお前？ という事だ。もしかしたらそいつは何処かの刑務所から脱獄した死刑囚かもしれない。助けようと近づいた途端、ナイフで脅してきて身包みを全て剥がされるかもしれない。もしくは、最悪殺される事もあるだろう。

さすがにそんな事はないだろう、いくら何でもネガティブ思考すぎるだろう、と思う奴もいるかもしれないが、実際ユアンは以前これと似たような目を経験済みだ。

だから彼は経験上、彼女に言う。

「お前なあ、そんな理由で無暗に他人を助けると、そのうち大変な目に遭うかもしんねーぞ」

「別に無暗に助けている訳じゃないよ。ちゃんとその人の顔を見て、良い人が悪い人かを見分けてるしね」

「それを『無暗』って言うんだよ。外見だけで人間見てんじやねーぞ」

「大丈夫だよ。私の人を見る目は確かだし。貴方だって別に悪い人じゃないでしょ？」

小首を傾げて尋ねる少女にユアンは一瞬たじろぐが、すぐに気を取り直して、

「さあ？ どうだろうな」

彼は彼女の質問をわざとらしく曖昧な言い方で答えると、また辺りを見渡す。

二人がいるのはやはり荒れた大地の真ん中。しかしすぐ隣に枯れた小さな木が一本植わっている。

「そう言えばどうしてあんな所で倒れてたの？ やっぱり食料が底を尽きたとか？」

「まあそんなところだ」

彼は少女を一切見ずに答える。

「食料の買い溜めしてなかったの？」

「してたさ、もちろん。でも一週間前、俺のちよつとした好奇心のせいで機動しちまったゴーレムに追い掛け回された挙句に、約二週間分の食料が入ったバツクを潰されてちまったんだよ」

「ゴーレムに？　こんな荒野の真ん中で？」

「ああ」

「……」

「なんだよその可哀想なものでも見ているような目は」

「貴方つてもしかして不幸なお人なの？」

「幸運なお人じゃあないだろうな」

「……」

少女は俯いて黙りこんでしまった。ユアンにはどうして少女が黙り込むのか分からなかったが、数秒経ってから彼女は突然顔を上げると、

「そう言えばまだ自己紹介してなかったね」

唐突に話を切り替えてきた。

いきなり何だよ、とユアンが思っている事などお構いなしに、彼女はそのまま話を続ける。

「私の名前はキャロル＝マーキュリー。よろしくね」

「……」

勝手に自己紹介を始めたキャロルと名乗る少女は、『貴方の名前は？』と首を傾げて尋ねてくる。一応は命を救ってくれた恩人なので名乗らない訳にもいかず、ユアンはいかにも面倒臭そうな表情＋素っ気ない態度で言った。

「ユアン」バロウズだ」

と言うか他人に自己紹介をするのが苦手なだけだったりする。

「ユアンね、よろしく」

いきなり呼び捨てかよ、と思ったが口には出さなかった。ユアンは差し出された小さな手を握って握手すると、すぐに手を放して彼女から目を逸らすように再び荒野を見渡す。

「……先はまだ遠いな」

「そうでもないよ」

「あ？」

「あと一日ぐらい歩けば町につけるはずだよ」

あと一日で町に付く？ てっきりまだ三日は掛かると思ってたんだけど、と思ったが彼はこれも口には出さなかった。

「そんな事より貴方お腹空かせているんでしょ？」

「まあそうだけど」

「私の食べ物分けてあげてもいいよ」

「ホントか!？」

思わず大声を出してしまったユアンに、キャロルは無邪気な顔で『いいよ』と言う。

「でもね、その代わりに二つ条件があるの」

「条件……?」

意味ありげな言葉にユアンは何か言い知れぬ予感（悪い方の）を抱くと、キャロルはニコリとかわいく笑って、

「しばらくの間、私の命令ならなんでも聞く、『家来』になってほしいんだ」

3 家来

「思ったより早くついたね」

そう言ったのはキャロルと言う少女。

「はあはあ……、そっそうだな」

膝に手をついて息を荒げながら答えているのはユアンと言う少年。

（そりゃ早くも着くдарつ。全力で走ったんだからな。俺がお前を背負ってっ！）

結局ユアンは彼女の家来になる事なってしまった。

このまま食料に飢えて餓死するのも嫌だったし、彼女から食料を奪って逃げるなんて考えは答えるまでもなく切り捨てた。あと一日で町に付くなら何も食べなくてもなんとかなるかもー、とも思ったが、キャロルが目の前で心底美味しそうに干し肉やら干し魚などを食いやがるせいで、空腹に負けて食料を貰いうけてしまったのが全ての原因。

そして何よりの原因は、キャロルが出した条件を甘くみてしまった事。

（『家来になつてほしい』と言っても相手は所詮子どもだ。そんなにキツイ要求はしてこないだろう）

当時のユアンはそう考えた。

そして案の定と言うべきか、予想どおり彼女は子どもらしく、唐突な思いつきで、

「じゃあ町までわたしをおんぶしながら走ってね」

それから約十五時間、途中三回ほど休憩を挟みながら、彼はキャロル（と自分と彼女の荷物）を背負い走り続けた。そうして二人はようやく町を見つける事ができたのだ。

「走ってる最中、感覚が訳わかんなかった。もう一步も動ける気しねー」

「なに弱音吐いてるの？ まだ泊まる宿も見つけてないんだから、休むのはその後だよ」

「ん？ ちょっと待て。今のお前の言い方だと、まだ俺ら一緒に行動するみたいじゃないか」

「？ わたしここでお別れなんて言っただけ？」

「……」

マジかよ、とユアンは絶句せざるを得なかった。

（これ以上こいつと一緒にいたら身がもたねーぞっ）

「って顔してるね」

キャロルのいきなりの言葉に、心臓の鼓動が一瞬大きくなった。そんなユアンを見て彼女は小さく笑うと、

「大丈夫。もうあんな要求はしないから」

状況にもよるけど、と付け足すと、彼女は『行こ』と陽気な声でユアンを先導する。

「……」

一人先に歩き出したキャロルの背中を見ながら、ユアンは思う。
気のせいかな、さっき一瞬だけ彼女の表情が暗くなったような気がした、と。

『リーヴァリー』

町の入り口にそう書いてある看板が立ててあったから、おそらくそれがこの町の名前だろう。

町のほとんどはレンガ造りの建物で、二階から三階建ての家が多く並んでいる。地面は平らな石が敷き詰められている石畳の路面で、見た目はとてもおしゃやかな感じだった。しかしまだ太陽も沈みきっていないのに、町の外を歩いている人が極端に少ない、かなり静かな町だった。

「なんだか寂しそうな町だね。人が全然歩いてないよ」

少し小声で言うキャロルに対し、ユアンはつまらなそうに、

「世界にはたくさんの町がある。大きな町や綺麗な町があるように小さな町や汚い町もある。だから活気がある町があればその逆で気を無くした町もあるもんなんだよ」

「それ誰の受け売り？」

「誰のでもねーよ」

それは長い間旅をしているユアンだから言える事だった。旅の途中、近くの町に立ち寄る事なんてごく普通の事。立ち寄らなければ旅に必要な物資を調達できないからだ。

「私はまだ旅に出てから日が浅いからそう言うのはちょっと分からないかな。私の生まれた町はとても賑やかだったから」

彼女の声は何故かとても小さく、弱弱しかった。そんな彼女を尻目に見ているユアンは唐突にこんな事を尋ねた。

「そう言えば、なんでお前みたいな子どもが一人で旅なんかしてんだ？」

思えばどうして最初に尋ねなかったのか、不思議なほど単純な質問だった。だが、

「それは……」

彼女は言葉を詰まらせた。何かいけない事を聞いてしまったのか？ とユアンは思っ、なんとかフォローを入れようとする。

「別に追及するつもりはねーから。言いたくなったらまた言ってくれ」

数秒の沈黙の後、『うん』と小さく頷く少女を見て、ユアンは背中に背負っているバックを背負い直す。

そのまま二人は町の中央通だろう、広い石畳の道を並んで歩いていく。

そして二人は宿を見つけるまで、一言も言葉を交わさなかった。

4 宿探し

片側三車線の道路並に広い石畳の道に、両脇から挟むように建ち並ぶレンガの建物。

その内の一つに、『HOTEL』と大きく書かれた看板が立ててある建物があった。その建物は四階建てで、他の建物と比べると幅はあまりない。

そんなホテルの前で大小二つの人影が立ち尽くしていた。

「何やってるの？ 早く入ろうよ」

キャロルは、いつまでたっても突っ立ったままでホテルの中に入ろうとしないユアンの腕を引っ張って、引き入れようとしている。だがユアンはそこから動こうとしない。いつまでたっても看板を見上げたままだった。

（……このホテルは、果たして本当に『ただのホテル』なのだろうか）

ユアンの頭から知恵熱が噴出す。彼は頭をフル回転させてある事を考えているのだ。

そのある事を説明するには少し昔話をしなければならぬ。

それはまだ彼が彼の『師匠』と旅をしていた時の話。

その日、ユアンは師匠に命令されて、旅の途中で立ち寄った町で宿を探していた。

町は深夜十一時過ぎだというのに祭のように活気に溢れていて、とても光輝いていた。

彼は周りをキョロキョロしながら歩いていると、ふと、木造の建物だが古びた感じはなく、ピンク色に輝く装飾が施されている二階建ての建物が視界に入った。その建物の二階には『HOTEL』と書かれた看板が掛かっている。

「まずはここだな」

そう言つと彼は迷わず入っていく。

店の中は薄暗かったが、とても洒落たところだった。客も多く（主に男女の二人組み）結構繁盛しているようだ。

「ここなら師匠も納得するだろ」

うんうん、と相槌を打つ無知な純情少年ユアン。

彼の師匠は汚い宿やホテルは極端に嫌う性格なので、値が張っていても綺麗などところを見つけないと半殺しにされかねないのだ。

ユアンは部屋の予約を取るために受付まで行くと、従業員のおねーさんに突然年齢を聞かれた。

予約を取る際に年齢を聞かれる事はたまにある。そしてそう言うところは大概『未成年の方は予約を取れません』とか何とか言い出すから、その時は迷わず『俺は二〇歳です』と言い張れ、と師匠に教えられていた。

ユアンは師匠の言うとおり『俺は二〇歳だー！』と大声で叫ぶと、従業員のおねーさんは『うふふ元気な子ね』と笑った。どうやら信じてくれた(?)ようで、今度は何名様かを尋ねてきた。ここは普通に自分を含めて二名だと言ったユアンは、そのまま部屋の番号を教えてもらい鍵を受け取った。

外で師匠を待つこと一〇分。

遅い何してやがったんだバカヤロー！ と言ったら地面に埋められた。師匠は優しくないので頭まで埋められた。地面の中で大声で謝ると掘り出してくれたが、一発顔を思い切り殴られ一〇メートル以上吹き飛ばされた。

これからはなめた口を聞くのはやめよう、と心に誓いながらユアンは師匠を予約したホテルまで案内する。

ここで先に説明しなくてはならない事が一つある。

それはユアンの師匠が女で、しかもかなりの美人だという事だ。

見た目は二〇代前半で背は一七〇センチ以上と女性にしては高く、さらに肌は白く体は出る所は出ていて、締まる所はきっちり締まっているナイスバディ。化粧をしなくても十分美人な顔立ちだと言うのに、さらにその美しさを際立たせるために施されたプロ顔負けのメイクと、黄金のように輝く金髪のロングヘアで道行く男心を一発ドキュン！

服装も服装で当時の彼女は、足首まであるオレンジ色のゆつたりとしたスカート――なのだが腰から下へ、チャイナドレスのように切断されているせいで、歩く度に隙間から真つ白な生足がこんにちとはさようならを繰り返している。そして上は豊満な胸に巻いてある布が一枚と、背中の中間までしかない上着を羽織っている。前は開きっぱなしで、おへそと胸の谷間が丸出しと言っ派手すぎるセンスだった。

結局のところ、ユアンの師匠は容姿も服装も人並み外れているのだ。

まあ外見がそんなんだから回りに注目されがちで、時々馬鹿な男どもがナンパしてくる。

そいつらは言うまでもなく師匠に半殺しにされるか、一生男として生きられない体にされている。意外にガードはダイヤモンドより固かった。

話を元に戻して、二人は目的のホテルの前までやってくると同時にそこで立ち止まる。師匠はゆつくりとした動作で看板を見上げ、数秒何も喋らなかった。

しばらく経って再びゆつくりとした動作で視線を下げ、そのままユアンに視線を向ける。彼は何の気なしに師匠と視線を合わせた途

端、ゾツと全身に寒気が走った。

笑顔。

師匠の顔には完璧な笑顔があつた。

ユアンは知っていた。師匠このひとが完璧な笑顔を作る時、それは大きな災いの前触れだと言う事を。そして、

ダンッ！！ と彼女は地面をしつかり踏み締めて、右の拳を岩石のように硬く握り締めると、

「このセクハラ野郎が！ どっからどう見てもラブホじゃねーかあああああああああああああああああああああああああああッ！」

絶叫と共に硬く握り締められた拳が、

ドンッ！！ と鈍い音を立ててユアンの顔面にめり込んだ。

足の裏が地面から離れると同時に空中で体を回転させながら飛んでいく。そのまま五〇メートル以上飛んでいったユアンは、地面に大の字になりながら気絶した。

これが最初の失敗であり、『セクハラ野郎』と言うあだ名がついた記念すべき（？）日でもある。

それから『これが最初』と言う事はもちろん二回、三回と同じような事を繰り返し、その度に殴り飛ばされていた。ついでに最大飛

距離は一一メートル。腕力だけで五〇キロ近い人間の体をそこまで飛ばすなんて、自分の師匠ながらつくづく怪物だなと思ってしまふ。

まあそんな事が過去にあったユアンは、普通のホテルと普通じゃないホテルを間違えないように、宿選びはかなり慎重なのだ（普通は間違えないのだが）。

しかも今回は特に注意をしなければならない。なぜなら今現在、彼の腕を引っ張りながらホテルの中へ一緒に入ろうとしているのは、見た目十二・三歳の女の子だ。もしこの『HOTEL』が『LOVE』の付いているホテルだったらどうする？ どうかどう見ても幼い女の子を連れ込んでやましい事をしようとしているただの変態だ。

だからここは慎重にいかねばならない。
自分の名譽のためにも。

（どこかに、このホテルは普通のホテルだと証明するものはないのか……！）

ユアンはもの凄い形相で建物の隅々まで目を配らせる。そんな彼を見てキャロルは怪訝な顔をしながら尋ねてきた。

「ねえ、さっきから何ジロジロしてるの？ 病氣なの？」

「ちげーよ、これは確認だ。このホテルが普通のホテルかどうか確認してんだよっ」

「言ってる意味がいまいち分かんないんだけど」

「いーから子どもは黙ってる。これは大人の問題だ」

「むっ、なにかなその言い方。大人の問題って貴方もまだ子どもじやん」

「お前よりは大人だよ」

会話中もホテルの正面を凝視しているユアンに対し、キャロルはさらに強く彼の腕を引っ張る。するとその努力が実ったかのようにユアンの体がゆっくりと前に進み出す。

（軽く見渡した感じじゃ普通のホテルのようだな）

でもまだ気は抜けない、とホテルの中に入った途端に部屋の中に隈無く視線を向ける。

内装は質素でこれと言って目立つものは何もない。元々部屋が狭いのが無駄に長いソファを置いてあるせいで余計狭く感じる。すると受付らしき足の高い机の向こうに、六〇歳過ぎの白髪が目立つおじいさんが座っていた。おそらくこのホテルのオーナーだろう。

「いらっしやい。部屋なら空いとるよ」

とてもゆっくりとした口調だった。

はあ、とユアンは周りに向けている視線を緩めて気の抜けた返事をした。そしてしばらく時計のチクタク音だけが場を支配すると、おじいさんは机の引き出しから部屋の鍵を取り出した。

「三階の三〇二号室が空いとるから、そこを使ってくれ」

口調もゆっくりなら動作もゆっくりらしく、映画をスローで見ているかのような動作でおじいさんはユアンに部屋の鍵を……、投げつける！ もの凄いスピードで！

「え？」

いきなりプロ野球のピッチャーが投げる球並のスピードで飛んできた鍵に、ユアンは反応できず、そのまま鳩尾にクリーンヒット。あまりの衝撃に床の上でのたうち回っていると、

「おいおい、情けないのー最近の若いもんは」

「……いきなり何すんだよっ！ こんな不意打ち食らわせやがって」

「不意打ち？ どこがじゃ。わしは真正面から投げたじゃろう。フツーに」

「どこがフツーだ！ 明らかに異常だろ今のは！ それに俺たちまだここに泊まるなんて言っていないだけどっ！」

「言っただけでもどうせ泊まるんだろ？ お前さんらは。それにその鍵を受け取った以上、お前さんらがこのホテルに泊まる事は決めたのじゃ。異論は認めん。ついでに言うところの宿はお前さんたちのような奴のためにあるのだからな。分かったらさっさと部屋へ行って来い」

「……なんだよそれ」

思わずうめいてしまったユアン。

「言ってもどうしようもないよ。今日はもうここに泊まる」

今まで黙っていたキャラルの言葉にユアンは一瞬黙るが、やがて『そうだな』と呟くと鳩尾を押さえながら立ち上がり、三階に続く階段に向かう。

「まったく、何者だ？ あのじいさん」

ユアンは肩越しに後ろを振り向いて、もう一度おじいさんに視線を向ける。

「……」

だが、やはり普通の年寄りにしか見えなかった。
二人は狭くて急な階段を登っていき、三階にある三〇二号室の前で立ち止まる。

「ここだな」

「うん」

確認するようにひと言ずつ言葉を交わしたユアンとキャラル。
そして鍵を開けてドアノブに手を掛けたユアンはここに来て、ふとある事と思う。

(……この部屋って、二人部屋だよな？)

4 宿探し（後書き）

ほんのちよつとだけユアンの過去を出してみました。まったくもつてくだらない話ですけど……w

5 予感

時計のチクタク音が響く小さなホテルの小さなロビーで、六〇歳ぐらいの白髪が目立つおじいさんが受付の前で新聞を広げて座っていた。

だが彼の視線は新聞の文字にはいつていない。新聞を端に見て、ホテルの玄関のさらに向こう側、太陽が消えて完全に闇へ沈んだ石畳の道を眺めている。

「全く、なかなか面白い客が来たものだ。まあちと物足りない感があったが」

おじいさんの口調は先ほどのゆっくりしたものではなかった。どこか鋭さを感じさせられる。

「でも、今はそんな事などどうでもいいか」

誰もいないはずの真っ暗な石畳の道。しかし彼はそこに強い視線を注ぎ込んでいる。

「大勢でぞろぞろと、ここは団体客は受け付けておらんのだから」

まるで何かを威嚇するように。

「……今夜は荒れるかもしれないな」

暗闇の向こう。そこに蠢くのは複数の影。

「もつとも、荒らすのはわしなんだがな」

不吉な言葉を放ったおじいさんは、椅子から消えた。

6 寝る所

「……まじかよ」

ユアン「バロウズの勘は妙なところで良く当たる。

彼は目の前の光景に絶句していた。彼の視線の先にあるのはあるホテルの一室。

そう。

『一人用』の普通の部屋だ。

「やっぱり、予想どおり狭い部屋だね」

そんな風に言ってくるキャロルを置いて、ユアンは思考をフル回転させる。

（どういづつもりだあのじじい！）

借りた部屋は一人用。本当に寝るだけの部屋らしく風呂やトイレなどは一切ない。あるのは一人用のベッドと小さな本棚、両開きの窓に彼より少し高いクローゼット、それと部屋の隅にある洗面台だけだった。

次いでその部屋を借りたのは二人組みの客。十五・六歳の少年と十二・三歳の少女。

このホテルはどうやら普通のホテルのようだ。しかし旅の途中でたまたま出会った少女と、（自分で言うのもなんだが）どこの馬の

骨とも分らない男が、同じ部屋で寝泊りするのはさすがにヤバイだろ、とユアンの健全な心がそう訴えている。

「……なあ、ちょっと聞いていいか？」

「なに？」

「俺たちここに泊まるんだよな」

「ん？ここに泊まるからここにいるんでしょ？なにいきなり訳の分からないこと言い出してるの？貴方、やっぱり病気なの？」

「いや病気じゃないけどさ。お前、この状況で何か思わないわけ？」

「なにかなんて曖昧な言い方じゃ分かんないけど」

言い難い事だからわざと曖昧にしてんだよそんなに察しろ、とユアンが心の中で毒づいてみると、不意にキャロルが、あつと何かを思いついたような表情をする。

「もしかして貴方、今夜どこで寝ようか迷ってるの？」

何かひっかかる言い方だったが意味的には間違っていないかったの
で、ユアンは軽く頷いて、

「ベッドは一つしかないし、勝手に他の部屋で寝ようにも鍵がないから入れないし。さすがに一緒に寝るってのは色々まずいから、つまり俺が言いたいのは……」

「どっちかが床で寝なきゃいけないってことでしょ？」

二人はしばらく黙り込む。ユアンは部屋の床を眺めていた。毎日掃除はしてあるようだが、もともと古いホテルらしく色々な染みや汚れやらがこべり付いている。ここは男であるユアンが率先して床を選ぶべきなのだろうが、やはりそれはできれば遠慮したい。誰だって硬い地面よりふわふわなベッドの方が良いに決まっている。

「こーなったら下のじいさんに頼んで部屋を代えてもらうしかないさそうだな」

ユアンの意見に同意するように、キャロルは一回だけコクリと頷く。

先に結論を言っておこう。

結局、二人用の部屋に代えてもらう事はできなかった。

別に断られた訳ではない。ホテルのオーナーであるおじいさんが何処にもいなかったのだ。だがそんな事では諦められなかった二人は、受付の引き出しからこっそり鍵を入れ替えようとも考えたが、どの引き出しも鍵が掛かっていて開けられず、ぶっ壊してやるうかと思つたユアンだったが『さすがにそれはダメだよ』とキャロルに注意されたため、仕方なく部屋に戻ることにした。

「……」

「……」

部屋の壁の片隅に掛けられている、丸い時計のチクタク音が響き渡っている。

なぜか二人は沈黙していた。両思いの男女が気まずさのあまり喋れないような空気だ。

あの後、これと言って何かが起こつた訳でもない。部屋に荷物を置いてそのまま二人とも背中を向け、ベッドを挟むように腰を掛けた。ただそれだけだった。

そんな沈黙が数秒続くと、ついに耐え切れなくなったユアンは、

「そつそろそつ夕飯でも食いに行くか？」

なぜか緊張しながら尋ねると、キャロルは『うん』と返事をした。

7 一筋の光

静寂が支配する夜の大通りに、一筋の光があった。
その光は剣のように鋭く、強靱だった。

一筋の光は動き回っていた。それこそ目で追うには速すぎるスピードで。数秒、その場に光の残像が残るほどに。闇の中に蠢く複数の黒い影を切り裂きながら。

赤い液体が宙を舞う。混乱しているような低い悲鳴が聞こえる。

次々と地面に沈んでいく影と、その場から一刻も早く逃げ出そうとしている影と、光に対抗しようとする影が入り乱れる。

しかしそれを遠くから見たら、虐殺の現場でも眺めているような一方的な光景だった。

虐殺を行っているのは一筋の光。虐殺に遭っているのは複数の黒い影。

それはまるで光と影の戦いだった。

いや、光による影への一方的な制裁、と言った方が正しいかもしれない。

一筋の光は一つの影を切り裂くと、また新たな影を追って動き出す。

すると一筋の光に対抗していた影の一つが、赤い炎を叩きつけようとする。

轟ッ！！ と荒々しく燃え盛る赤い炎は、しかし決して光には届

かない。なぜなら炎を出している付け根から斜めに切り落とされ、代わりに絶叫と赤い液体が溢れ出していたからだ。

影を切った光は、また新たな影に狙われる。

巨大なハンマーのような鈍器が一筋の光の上に襲い掛かった。だが光は動じない。その巨大なハンマーを影ごと両断すると、その後ろに銀色に輝く槍と剣を構えていた二つの影の間に一瞬で移動し、横に一線する。

飛沫が舞い、影は倒れて動かない。

徐々に減っていく影。一筋の光は影を切り裂く度に黒く染まり、一回振るって汚れを落とす。

悲鳴、絶叫、怒号に轟音。そして無言がその場の支配権を奪い取る。

両断し両断され、無言に怒号し悲鳴する。

そしていつしか影は消えていた。全滅したのか、どこかに逃げていったのか。一筋の光は標的を失ったことによって動きを止める。

再び静寂が夜の大通りを支配する。

一筋の光は夜空を見上げているように見えた。だが次の瞬間には光は消えていた。

そこに残っているのは、無残に切り捨てられた大小さまざまな影の残骸だけだった。

7 一筋の光（後書き）

台詞がないですね、はい。しかも短いしぶっちゃけこれだけじゃ全くわからないと思いますが伏線なんでこれも。

8 食事

今夜は星空がきれいだ。

片側三車線の道路並の幅を持つ町の中央通には、道を照らす街灯などはない。だが星や月、建物の中から漏れ出す光のおかげで割と明るかったりする。

やはり外出している町民はいなかった。建物の中から人の声は聞こえるが、誰も外を歩いていないせいで、どこか寂しさを感じる。

「やっぱり昼間に比べたら夜は冷えるね。もうちょっと厚着してこればよかったかも」

「別にすぐ店に入るんだし、その必要はないだろ」

「もー男は全然わかってない。冷えは女の敵なんだからね」

「なんだよそれ。どつかの方便か？」

「女の常識だよ」

辺りが静かなせいで二人の声は結構響いていた。

その時、地面から爆弾でも爆発したような振動が足に伝わってきた。

「？」

だがそれはすぐに収まり、また夜の中央通は静寂に支配されていく。微かに眉をひそめるユアンだったが、

「なんかやつぱりおかしいよ、この町。まだ寝るには早いのに、みんな家の中に閉じこもっちゃって」

キャロルがどこか不安そうな声でそんな事を言うから、あまり深くは考えなかった。

確かに彼女の言うとおり、まだ寝入るには早すぎる時間帯だ。日が落ちてからまだ一時間ちょっとしか経っていないのだから。

「いろいろあるんだろ。町の事情つてのがさ」

星空を見上げながらユアンはつまらなそうに答える。

二人は並んで静かな夜の町を歩いていく。

そして夕方、町に入ってきた時とは反対側の町の出入り口付近まで行ったところで、一つの喫茶店を見つける。

新築なのかそこは他の建物よりも外装がきれいだった。

店の前には『Coffee Shop』と書かれた小さな看板が置いてある。その喫茶店は、カーテンの隙間から他の建物よりも強い光が漏れていて、複数の人の声が聞こえているのを考えると、どうやら数人客がいるらしい。

「この店は、他とは違って賑やかそうだな」

言ってユアン達は店の前までやってくる。

カランカラン、と扉を開けたら空っぽな音が聞こえた。一瞬店の中にいる店員や客が話を止めて扉に視線を向けるが、すぐにまた喋りだす。

店内は縦長で左側に長テーブルと一人用の椅子がずらりと並んでいて、その前が注文受付用のカウンターらしい。右側には四人から六人掛けのボックス席が五つほど並んでいる。

中にいる客は皆ゴツイ体つきの男ばかりで、一人でいる者からボックス席に四、五人固まっている者達もいる。煙草を吸っている人がいる辺り、どうやら禁煙ではないようだ。白い煙が店の中を漂っていて、未成年者にはあまりよろしくない環境だった。それに客は全員酒を飲んでいるようで喫茶店と言うよりは酒屋かバーに近い。

二人はかなり浮いていた。

だからと言ってまた他の店を探すのも面倒なので、ユアンはキャロルを先導しながらカウンターまで行くと、二人同時に一人用の椅子に腰をかける。するとカウンターに立っていた三〇代後半の筋肉質な男が、こちらに近づいてきて話し掛けてきた。おそらく店の従業員だろう。

「いらっしやい。注文は何にする？」

「えーっと、注文表みたいなのってありますか？ あつたらそれ貸してください。その中から選びますんで」

「おう。だつたらちよつと待ってな」

そう言うつと筋肉質な従業員はカウンターの引き出しから、A4サイズの薄っぺらな本を取り出し長テーブルの上に置く。ユアンはそれを受け取るとキャロルとの間に本を開けて置いて、注文する品を選び出す。

「メニューは普通の喫茶店と変わらないなー。お前注文決まったか？」

そんな事を言いながらユアンはキャロルの方に視線を向ける。すると彼女は、

「ぜんぶ」

と、一言。

思わずユアンはため息をついた。

「お前なあ、全部って金はあるのかよ。つーかそれ以前に食いきれないだろ普通に考えて」

「わたしのお腹をふつうだと思ってる貴方、近い将来きつと痛い目みるよ」

「何で俺が痛い目みるんだよ」

「さー？　なんでだろうね」

「……」

思わせぶりの事を言うキャロルに対し、ユアンは怪訝な表情になる。

「なら貴方はなにを頼むの？」

「俺はまあカレーかな。最近食いたいなーって思ってたし。それとマカロニサラダとかもいいな」

「そっか、じゃあわたしもカルボナーラでいいや。あとステーキも」

「……わたしもってお前、何一つ俺と被ってねーじゃねーか」

そんなようなやり取りの末、二人はそれぞれ筋肉質な従業員に注文する。

それから五分間、テーブルの隅に置いてあったオセロで雑談をし

ながら遊んでいると、注文した品が一斉に長テーブルの上に並べられた。一品一品の量は普通と比べてやや多い、一・五人前ぐらいあるのだが今の彼らには関係ない。

実はユアンは一日前にキャロルから干し肉と干し魚をそれぞれ一切れずつ貰って以来、何も口にしていない。『二切れからは奴隷にレベルアップさせるから』と笑顔で言われたからだ。キャロルはキャロルで見た目に似合わず大食いらしく、自分より大きい豚の丸焼きぐらいなら三分で完食しまうらしい。

二人は一緒に『いただきます』と声を出して料理を一口、二口と食べていく。

そして食べ始めてから五分ちよつと経つた時には、二人は既に全ての料理を食べ終えていた。

「いやー久しぶりに腹いっぱい食つたなー」

「私はまだちよつと物足りないかも」

「お前あれだけ食つてまだ足りないのかよ」

彼女はこの五分ちよつとの間でカルボナーラは三回、ステーキは二回ほどおかわりしていた。しかもそれだけではなく、マヨネーズと塩こしょうで味付けされたジャガイモのサラダと、白米を三回も注文していた。

一体その小さな体のどこにそんなに入るんだ？ と疑問を持たずにはいられないユアンは、

「注文するのはいいけど、お前金はあるのか？」

今まで食べたものだけでも四〇〇〇ユード（四〇〇〇円と同じ）は越しているだろう。

旅人は大概お金をあまり持っていない。

ユアンにとつても今夜は結構痛い出費だ。それが四〇〇〇ユード（くどいようだが四〇〇〇円と同じ）まで来ると痛いじゃ済まない。旅に必要な物資が買えなくなってしまふからだ。

そんな事にも関わらずキャロルは無邪気な表情で、

「なに言っているの？ お金は貴方が全部払うんだよ？」

「……はい？」

聞き間違いだと思った。そう思ったからユアンは聞き返したのだ。しかし、

「だから貴方がわたしの分まで払うんだよ。貴方はわたしの家来なんだから、このぐらい当たり前でしょ？ それにわたしは貴方の『命』の恩人でもあるんだよ？」

「……」

聞き間違えではなかった。彼女は全てお前が払えと言ってきている。

「前々から思ってたけどお前……、Sだろ」

「？ Sってなに？」

こいつ素でSなのかよ将来本当に家来作って女王様とか言わせそう、と思ったが言葉にはださない。怒らせそうだから。

それに彼女が自分の命の恩人だと言うのは事実だし、期間限定だとしても今は彼女の家来だと言う事も前と同じで事実だ。彼はあまりにも大きな借りを彼女に作ってしまった。重すぎるぞ命の恩人。

「わかった。お前の飯代は俺が払うから、お願いだからこれ以上食わないでくれ」

ユアンは思わず頼みこんだ。これ以上何かを注文されたら財布の中が氷河期に突入してしまう。そんな事になったらもう旅なんてで

きなくなってしまう。だからユアンは懇願した。

「むうー」

そんな彼の言葉に、キャロルは頬を膨らませて不機嫌そうな表情になりながらも、一回ため息をつくど、

「しょうがないなー。今夜はこのぐらいにしないとあげるよ」

今夜は、と言う単語が気になったが、今は深く詮索しないでおこ
うと思った。

代金を払うためポケットから財布を取り出したユアンは、お金を
筋肉質な従業員に渡しながらある事を尋ねる。

「なあ、なんでこの町は夜誰も外を歩いていないんだ？」

それは町に入ってから抱いていた疑問だった。キャロルもずっと
その事が気になっていたようだから、ここらでその理由を聞いてお
こうと思ったのだ。

まだ寝入るには早すぎる時間帯。

日が落ちてから一時間ちよつとしか経っていないのにも関わらず、
町の住人は誰一人外を歩いていない。それにはおそらく理由がある。
どうしても知らなければならぬと言う訳ではない。しかし、何と
なく知りたいと思った。

キャロルはユアンの言葉に興味を持ったのか、視線を彼に向けて
いる。質問された筋肉質な従業員は『ああ、それはな』と最初に言
って、

「この町にある古い一つの言い伝えが原因なんだよ」

「言い伝え？」

「そいつを話すと少しばかり長くなる。それでもいいか？」

ユアンは首を縦に振った。どうせ部屋に戻っても後は寝るだけ。暇つぶしにはちょうどいいと思ったからだ。

それじゃあ話すぞ、と筋肉質な従業員は最初に区切って、

「それは今から五〇〇年以上も前の話だ――」

8 食事（後書き）

ちなみにキャロルは食べても太らない体質です。

9 言伝え

この町には昔、『フォルティマグス最強の術師』と呼ばれる男が住んでいた。

その男は人や動物を無償で助けるために術を使い、本人もそれを生き甲斐としていた。町の住人は男に感謝し、皆友人のように接していた。

だがある日、男が愛していた一人の女性が不治の病に罹ってしまった。医者には余命一週間と先刻され、女性本人はもちろん、女性の家族、そして『フォルティマグス最強の術師』である男も嘆き悲しんだ。

男は女性の家族を励ますのと同時に、自分自身も励ますように『必ず彼女を助けてみせます』と約束した。女性の家族は男の言葉を信じた。男は今まで約束を破った事がなかったから。男には今まで助けられなかった者などいなかったから。

それからと言うもの男は時が経つのも忘れ、様々な医学書を読み、治癒の術式を学び、病を治すために死に物狂いで学んでいた。

そしてついに病を治す術式を完成させた男は、すぐさま走って女性の家に向かったそうだ。

走って走って走って走って……。

女性の家に着いた男は笑顔でその扉を開けた。

これで彼女を助けられる。これでみんな幸せだ。そう思いながら。

しかし、女性の家には誰もいなかった。女性本人も。その家族も。家具すらも無くなっていた。

あれから既に一ヶ月が経っていた。

対して女性の余命は一週間。

間に合わなかったのだ。

男はこのとき初めて約束を破ってしまった。

男はこのとき初めて誰かを助けられなかった。

その後、男は町に戻っていた。町の住人は男を見た途端、冷たい視線を向けてきた。

失望した、と。

町の住人はそう目で語りかけていた。

男は走った。走って走って走って走って……。

ただ只管に走った。全てを忘れようとするように。辛い現実から逃げ出そうとするように。

男の顔には絶望だけが濃く刻まれていた。

約束を破ってしまったことに対する絶望。町の住人に失望されたことに対する絶望。

そしてなにより、大切な人を失ったことに対する絶望。

男は生きる意味を無くし、気力を無くし、全てを無くした。

彼はもう、前には進めなかった。

気がついたら、男の手には一冊の本があった。

『アルスⅡノトリア』

死者を復活させる事ができると言われる奇跡の書。

だが同時に『闇の書』と言われる禁書でもあった。中に目を通した者は例外なく闇の底に落ちていき、絶対的な悪に染まる。

しかし、男は迷わなかった。もう一度彼女に会えるならどんな事でもすると。どんな物にも頼ると。どこまでも落ちていくと――。

そうして男は『魔ジン』になった。

世界を破滅させるため、世界を闇に沈めるため、無慈悲な神を殺すため、

当初の目的を忘れた男は暴走し、荒れ狂う。

10 裏話

「わたしその話なら知ってるよ」

キャロルは唐突にそう言った。

「たしかそれって『大戦記』の裏話でしょ？」

「おお、嬢ちゃん物知りだな。その通りだよ。この話は世界的にも有名な『大戦記』の裏話。いや、その『大戦記』ができる前からある話だから前話になるのか？」

『大戦記』とは約四〇〇年前と約一〇〇年前に起こった二つの大きな戦争の物語だ。この話は全て実話らしく、約一〇〇年前に起こった戦争の戦場には、その時の傷跡がまだ生々しく残っているらしい。そんな事を思い出しながらユアンは筋肉質な従業員に金を渡たすと、

「それでなんでその話が、この町の住人が外出しない理由になるんだ？」

「それはこれから話すんだよ」

言いながら筋肉質な従業員はユアンから受け取った金を引き出しにしまつて、

「『魔ジン』になった男は善意を無くし、悪意に染まった。簡単に言うると善人から悪人になつちまつたんだよ。それから言うもの、男は悪の限りを尽くした。人殺しなんて日常茶飯事。盗みや破壊活

動と言った『人が嫌がること』を徹底的にやっていったらしい」

「誰も止めなかったのかよ。そいつの暴走」

「止めたかっただろうさ。でも元々化け物みたいに強い奴だったらしくて、力じゃ誰もそいつの暴走を止められなかったって話だ。だが、そんな男にも一つ弱点があった」

「弱点？」

「男は夜にしか動けないんだ。だからこの町の住人は、夜は外を歩かない。『魔ジン』に殺されちゃうからな」

そんなような言い伝えはよく耳にする。夜は人食い狼が出るから子どもを外に出してはいけない、みたいな。この町もそれと同じ。住人は言い伝えを律儀に護っているのだ。

「と言う事は……あれ？　もしかしてこの町って『魔ジン』が生まれた町なの？」

「まあそうなるな」

まじかよ、とユアンは呟いた。

『魔ジン』それは悪の象徴。この世の闇を支配する魔王。『魔ジン』が復活する度に必ず大きな戦争が巻き起こると言われている、戦いの火種。全世界の敵。そして世界最強の術者。

この町は意外にとんでもない町なんじゃ……、とユアンは心の中で思っていると、服の袖を隣に座っているキャロルに引っ張られた。

「ねえ、もう帰ろうよ。わたし今日なんだか疲れちゃってはやく寝たいんだー」

ふわぁー、と彼女は大きな欠伸をしながら言う。さっきまで筋肉質な従業員の話に夢中で食いついていたのに、彼女はいつの間にか興味をなくしていた。

そう言うところは子どもっぽいなー、と彼は思いながら、

「そうだな。おっさん、色々話聞かせてくれてありがとう」

「おう。また何か聞きたいことがあったらここに来な」

ああ、と軽く返事をした後、ユアンとキャロルは椅子から降りて店の出口まで歩いていく。

(『魔ジン』ねえ。まあ俺には一生縁のない話だけだな)

そう思いながら店の扉に手を掛けた、
そのとき――。

11 影三つ

片側三車線の道路並に広い町の中央通を走る人影が三つ。影の大きさは全てバラバラで、右から大中小となっている。

三つの影は何かから逃げるように必死に走っていた。

「くそッ！ なんなんだよあいつは！」

ずっと走っていたせい、しゃがれた声で言ったのは左側の一番背が低い男だ。

「……『奴』の仲間なのかもしれない。この町、『教会』があるし。もしそうだったら僕らに勝ち目なんてないよー」

野太い声でネガティブな事をのろのろ言ったのが右側にいる、一番体が大きい男。

「あーもう、うぜーなてめえはいちいちよお！ んなネガティブな事ばっか言ってるでねーでちょっとは何か考えやがれデカ物が！ ついでに言っと『奴』は的確じゃねーな。『奴ら』だ」

「……そんな事言われたってー。僕頭悪いしさー。デリックは何か良い方法ある？」

「残念ながら思いつかないな。あんな化け物とまともに戦える方法なんて」

言ったのはデリックと言う二人の真ん中を走っている男。彼は眼鏡を掛け直しながら、

「大体方法があればとづくに使っているさ。でも見ただろお前達も、あの『光』の動き。あれは普通じゃない。どう見ても『騎士』並かそれ以上の実力だよ」

「なんだよ『騎士』並つて。んなもん相手にできるかよ。つーかなんでそんな奴がこんな町にいるんだよ」

「それはさっきバップが言ったように『奴ら』の仲間か、それともこの町を守る兵士か。どちらにしても俺たちの敵だつて事には変わらないけどな」

「……それよりもどうする？ このまま帰っても僕達殺されちゃうと思うけど。先輩に」

「……」

体が一番大きなバップと言う男の言葉に、他の二人は思わず黙り込む。

「……そう言えばもうすぐ『奴ら』がいる喫茶店に着くんだけど」

「喫茶店？ どういうこつた？」

一番背の低い男——アルデが聞き返すと、

「……ほら、町の出入り口の近くにある喫茶店。あそこから『奴ら』の臭いがする」

言つてバップは、数十メートル先にある一つの喫茶店を指差す。

「あそこに『奴ら』がいるのか」

真ん中を走っているデリックが足を止めると同時に、他の二人もその場に立ち止まる。三人は喫茶店を凝視していると、一番背の低いアルデが口を開く。

「標的である『奴ら』は目と鼻の先。バップの鼻は確かだからあそこにいるのは間違いねーんだろうけど。このままつつこんでぶっ殺しに行くつてもありじゃねーの？」

「……僕はアルデの意見に賛成だなあ。あんな化け物とやり合うよりは『奴ら』を狙った方が断然ましだよ。それに任務が成功すれば先輩も許してくれるだろうし」

「確かにそうだな。それじゃあこのまま任務を果たしに行きますか」

三人は歩いて喫茶店の前まで行くと、一番体が大きいバップが作戦を話し出す。

実はバップはこの三人の中では一番頭が良かったりする。自分では頭が悪いと言っているが。

「……じゃあ僕が店の壁を扉ごとぶっ壊すから、その隙にデリックの『スコープ』で標的を殺るって事で」

「おいおいそれじゃあ俺の出番がねーじゃねーか」

「……アルデは後方であの化け物が来ないか監視してて」

「バップてめえ俺に喧嘩売ってんのか、ああ?! 俺は今暴れて」

「んだよ、むちゃくちゃ暴れてーんだよ！」

「暴れたいならあの化け物と一緒に暴れてればいいだろ」

「デリックてめえもふざけんなよ。あんなのと暴れられる訳ねーだろ。暴れる前に殺されるわ」

「お前もお前で結構ネガティブだよな」

デリックが溜め息まじりで言っていると、隣に立っていた大男のバップがどこから出したのか、長さ二メートルもある巨大なハンマーを肩に担いでいた。

「……二人とも、遊んでいる暇はないよ。死にたくなかったらさっさと殺そう」

突然バップの言葉が今までとは別人のように鋭くなった。彼は戦闘になると口調が極端に変わるのだ。それを聞いた他二人の表情にも緊張が走る。バップは一〇〇キロ以上もある巨大なハンマーを軽々と持ち上げ、振り被ると、

「……でも、少しはぶっ殺しがいい相手だったらいいな」

それが合図のように、巨大なハンマーが喫茶店の壁を横薙ぎにする。

12 襲撃

「……」

ユアンはドアノブに手を掛けて、感じた。直感した。

この扉を開けてはならないと。一刻も早くこの扉から距離を取らなければならないと。

理由は分からない。ただ自分の生存本能がそう告げている。

彼は横目で隣にあるカーテンの閉まった窓に視線を向ける。見た目はなんの変哲もないただの窓だ。しかし今重要なのはそこではない。そのわずかな隙間から妙な影が見えていた。

夜の闇に蠢く影。

そして、

「——ッ！」

何かを確認する前に、ユアンはキャロルに飛びかかっていた。

えっ？ と気の抜けた声が聞こえたが彼は無視して、倒れる彼女の体の下に自分の左腕を回してクッション変わりにする。疼痛な痛みが腕に伝わったがそんなものに気を取られている暇はなかった。なぜなら、

轟ッ！！ と爆音と共に、喫茶店の扉が周りの壁ごと横に薙ぎ払われたからだ。

強い風が店の中に吹き付けた。レンガ造りの壁の細かな残骸が、キャロルに覆いかぶさっているユアンの背中を叩く。幸い大きな塊

は降ってこなかったが、だからと言って全く痛くない訳ではない。

客は粉塵が舞っている店の入り口を呆然と眺めていて、筋肉質な従業員は今にも泡を吹いて昏倒しそうな表情だった。おそらく皆、目の前で何が起こったのか理解が追いついていないのだろう。

かく言うユアンも同じだった。何かが起こると予感ほできて、起こる何かまでは予想できない。つまり彼も一体何が起こったのか、なぜ店の入り口が破壊されたのか、分からなかった。

（いったい、何が……）

困惑するユアンだったが、ふと入り口付近に舞っている粉塵の中に大きな人影が現れた。高さ二メートル程もある巨大な影が。

「……標的見えるか、デリック」

「ああ、しっかり見えている。あとはこいつで頭を撃ちぬくだけだ」

ゆっくりとした口調の野太い声と、しっかりした滑舌のハスキーボイス。二人の男の声が倒れているユアンの耳に届いた瞬間、カチャツと言う金属と金属がぶつかるような音が聞こえた。

（……？ あの音、金属か？ それに撃ちぬくって……）

大きな人影の後ろから新たな人影が現れる。先ほど男の声は二つ聞こえてきた。おそらくその内のもう片方なのだろう。その影はほっそりとしていて、身長もユアンと対して変わらない。ただ、その影は腕を挙げてこちらに何かを向けていた。

（金属で撃ちぬくって言ったらつまり……、あれしかねーじゃねー

かッ！)

ギリッ！！ と奥歯を噛み締めたユアンはすぐさま起き上がり、床を削るような勢いでキャロルの小さな体を抱えて左のボックス席に駆け込んだ。

三回の銃声が鳴った。最前まで二人が倒れていた床に直径一センチ程の風穴が複数開く。銃声はそれだけでは止まない。ユアンの背中を追いかけるながら段々と近づいてくる。

(くそっ！ 何で俺が狙われてんだっ！)

舌打ちして彼はテーブルを縦に蹴り上げると、その影に身を隠す。そんなに長い距離を走った訳ではないのに、息が長距離走をした時のように荒い。拳銃で背中を狙われると言うあまりにも巨大なプレッシャーで、精神的に息切れ状態なのだ。

(何なんだよあいつらは！ いきなり現れて、いきなり物騒なもんぶっ放してきてっ！)

ユアンは考えながら息を整えていると、弾丸が盾にしているテーブルを貫通し頭を掠めていく。彼はそれに冷や汗をかきながら、

「このテーブルも長くはもたねーな。キャロル、お前は体勢を低くしてここで隠れてろ！ その間にあのクソ野郎どもを黙らせやる！」

「黙らせやるって、どうやって！」

キャロルはユアンの膝の上で叫ぶ。ユアンは彼女を床に降ろすと左手で縦に立てられているテーブルの上を掴んで、

「は？　んなもん決まってるだろ。『力』で、だよ」

そう言っているとユアンは空いている右の掌を力強く握って、開く。

（……この『力』を使うのはかなり久しぶりだな。でも、やっと『アレ』を試せる機会ができたんだし、ここはポジティブに考えるべきだな）

思っているとユアンは開いた右の掌を地面に向ける。

そしてその現象は起こった。

突如、彼の掌にドーナツ状で掌に余る程の大きさの、厚さ〇・一ミリほどの高速で回転している透明な空気の塊が形成された。周りにある空気がユアンの『力』によって渦を巻き、圧縮され、形を成して、武器になっていく。

「……」

一方、キャロルはそれを見て黙り込んだ。

彼女には分からなかったのだ。ユアンの掌で起こっている現象が、それは『術』ではなかった。全く『元力』^{マグナ}を感じられないそれは、逆に得たいの知れないものに対する気持ち悪ささえも感じさせられる。

「準備完了っつと」

そんな彼女の怯えた視線に全く気付かずに、ユアンは曲げていた膝を一気に伸ばし、ばねのように飛び上がると左手を軸にして、縦に立てられているテーブルを乗り越える。途中、数発の弾丸が彼の体を掠めたが無視して、後ろに引いていた高速で回転しているドー

ナツの薄い空気の塊を、腕を振るって粉塵に映っている人影に向かって放つ。

風を切り裂きながら手裏剣のように飛んで行く、高速で回転する薄い空気の固まりは、粉塵を吹き飛ばしながら二つの影、特にほっそりとした体の影に向かっていく。

（まずはあの銃を使う奴からだッ！）

だが、ユアンが放った空気の手裏剣は突然軌道を変えて、その隣にいた大きな人影に突っこんでいった。

粉塵の向こうで、何かが舞った。

「……ぐっ！」

同時に痛みを堪えるような男の悲鳴も聞こえた。

テーブルを乗り越えたユアンは着地の衝撃を吸収するために膝を曲げてしゃがみこむ。彼は目の前で鬱陶しく舞っていた粉塵の一部が払われたのを確認して、目の前を凝視する。

（あれ？　なんか軌道逸れちまったなー。コントロールミスったか？　まあ一ヶ月も『力』使ってなかったら嫌でもそうなるか）

空気の手裏剣が軌道を変えたせいで、粉塵が払われた位置も狙いより大きく外れた。

濃く舞っていた粉塵の中から見えてきたのは身長一九〇センチもある、フード付きの黒いローブを着た力士みたいな大男だった。大男の右肩には二メートルを越える黒い巨大なハンマーが担がれていたが、反対側の左腕の側面からは赤い血液が衣服の裂け目から染み出していた。そのせいか大男は片膝を地面につき、じっとこちらを睨

んでいる。

（あいつは近接戦闘型か。なら近づかなければいいだけだ。問題はもう一人の男……）

考えながらユアンは両の掌に、再びドーナツ状の高速回転する空気の手里剣を生み出す。

その間、約五秒強。

決して短いとはいえない時間。いや戦闘においては長すぎる言ってもいいだろう。だが、大男の方とはとかく銃を持っているであろう影も、立ったまま何も仕掛けてこなかった。

（なめられなもんだな。不意をつく必要がないってか。ふざけやがつてッ！）

腰を落とした状態でユアンは両足に力を込める。そして一瞬の沈黙の後、敵は動き出す。

四回銃声が聞こえた。カーテンのように舞っている粉塵を貫いて、四発の弾丸が標的の体をぶち抜くために突き進む。

だが弾丸は標的には当たらない。ユアンが曲げていた膝をばねのように使い勢い良く前へ踏み出した事によって、何もなくなつた空間に弾丸が通り抜けていく。

（粉塵のおかげで弾丸の軌道がよくわかる。俺の動体視力を合わせればこのぐらい簡単に避けられるんだよ！）

そして前に出た勢いを利用するように、左の掌で高速回転する透明な空気の手裏剣を、弾丸を放つた影に向かって放つ。

（今度は逸れねえ絶対にッ！）

斬ッ！！ と空気を裂く音が透明な手裏剣の尾を引いて影に迫っていく。だが、その影は少し身を屈めただけでそれを軽々とかわし、同時にまた銃弾を放ってくる。

（なっ、あの野郎、俺と同じことをッ）

ユアンの手裏剣は飛ばすとき、周りの空気を押しのける性質がある。そのため肉眼では捉え難い透明な攻撃でも、粉塵の中を突き進めば弾丸が迫って来るよりも簡単に軌道を読めてしまうのだ。

（俺の攻撃は弾丸よりもデカイし遅い。そーいうのがいろいろ重なっちまったんだなくそったれがッ）

「チッ！」

思わず舌打ちしたユアンに複数の弾丸が襲い掛かる。今はそれら全てをギリギリのタイミングで全てかわしているが、そんな奇跡に近い芸当が長く続くわけがなく。

（このままじゃ蜂の巣にされちまう！ 早く何とかしねーと）

ユアンの体に所々弾丸が掠めていく。

喫茶店の中は狭い。少し走っただけで破壊された店の入り口から外に出られてしまう。

（ここはいったん外へ脱出だ！）

入り口の粉塵を裂いて転がるように外へ出たユアンは、すぐさま

体勢を立て直し片膝を付いた状態で顔を上げる。だが、彼の前には巨大なハンマーを持った大男が立ち塞がっていた。

ズンツ、と言う振動が足に伝わった。目の前にいる身長一九〇センチの大男が一步前に出たのだ。

「……邪魔をするならここでお前を殺す。死にたくなかったら早めに立ち去ることを進めるが」

「はッ、それはこっちの台詞だ。人がせつかくいい気分で飯食い終わったって言うのによお、それを台無しにしやがって。何しに来たかは知らねーが、怪我したくなかったらこの喫茶店からさっさと失せやがれ！」

つつてももう怪我しちまってるか、そう付け足したユアンと大男が睨み合う。両者の眼差しには殺気しか籠っていない。

「……ふん。どうやら死にたいらしいな」

「お決まりの台詞を堂々といいやがって。聞いているこっちが恥ずかしいっつーの」

「……減らず口を言いやがる。まあそんな風に言えるのも今のうちだけだろっけどな」

なに？ とユアンは眉をひそめて、動きが止まった。

「な——」

彼は見たのだ。大男の後ろにいるもう一人の眼鏡をかけた男（粉塵の外に出たから人影の姿が分かるようになった）。そいつが片手

に銃身の長い銀色の回転式拳銃リボルバーを握りながら、キャロルの隠れている縦に立てられたテーブルに向かっている事に。

（……ちよつと待て、あの男。一体何に向かつてやがるんだ？ そ
もそもこいつらは一体何が狙いなんだ？）

嫌な予感がある。ユアンはそう感じた。大男はそんな彼の表情を
見ると口元を歪ませて、

「……お前は何も知らないようだな。僕達の事も、あの子どものも
も」

「な、に……？」

ユアンの頬に冷たい汗が流れる。眼鏡をかけている男はテーブル
の前で足を止めた。そしてゆっくりと、回転式拳銃リボルバーの銃口をテー
ブルに向ける。

（――）

大体は想像がつく。が、だからこそ認めたくない。
認められる訳がない。

焦りの色が表情にまで出てきているユアンを見て、大男はニヤリ
と笑う。そしてゆっくりとした口調で、言葉を放つ。

「……僕達は、お前と一緒にいたあの子どもを殺しにきたんだよ」

聞いた時には既に弾丸は放たれていた。

二発、三発、弾丸がテーブルの真ん中に突き刺さり、そのまま貫いていく。

悲鳴は、ない。

いや、聞く前にユアンの体は動いていた。

「うっうおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお！！」

店の中だけではなく、外にまで響き渡る声量で絶叫し、

ドンッ！ と地面を蹴り上げて、爆発的なスピードで眼鏡を掛けた男の下へ駆けていく。だがそれを遮るように黒い巨大なハンマーを両手で振り上げた大男が立ち塞がる。血が溢れ出ているのにも関わらず左腕をも使って。しっかりと両足で自分の体を支えて。その姿はまるで餅でもつくかのようだった。そう、人間と言う肉を叩き潰すかのように。

そして大男は告げる。

「……さあかかって来い。叩き潰してやるよ」

12 襲撃（後書き）

バトルです！

表現とかいろいろ下手ですけど楽しんでいってくれたら幸いです。

13 第一ラウンド（前書き）

敵目線です。主人公目線ではないです。気をつけてください。

13 第一ラウンド

「邪魔をするなああああああ!!」

「……ふん」

絶叫しながら突っこんで来る少年に対し、大男は鼻で嘲るように笑うだけ。

「……そんなにあの子どもが大切だったか」

大男に、余裕の表情は消えない。

（この様子だともう何も考えていないだろう。ただ怒りのままに突っ込んで来るだけ）

なら、殺すのは簡単だ。

大男は知っている。経験上、怒り丸出しで突っこんでくる奴は、大抵何も考えていない事を。力任せに押してくるだけと言う事を。

（でも、僕に力で勝てる奴はいない）

視線と視線が一度だけ交差し、そして振り上げられたハンマーは少年の頭上に振り下ろされた。

ズドンッ！ と地震のような振動が地面を揺らす。

一〇〇キロの重量と大男の腕力、それと（おそらく）破壊の術式も合わさった一撃必殺の大鎚。棒の先端に取り付けられた円柱状の大きな金属塊は石畳の地面に半分以上めり込んでいた。それだけでどれだけの力が加わったのか想像できる。地面に突き刺さったハン

マーを中心に、四方八方石畳が砕けていく。

その下に人間がいたなら、その人間は形も残っていないだろう。そして一瞬前まで、そこには一人の少年がいた。

だが、そのハンマーの下には少年の体の残骸は何処にも存在しなかった。直撃していれば血液が辺りに飛び散っているはずなのに、その一滴すらも飛んでいない。

「……なに？」

大男は周りを見渡し、そして気付いた。少年が地面に食い込んだハンマーの前、ほんの数センチのところでは跳んでいる事に。つまり、ハンマーが頭上に振り下ろされる直前に、彼は足を止めて後ろに下がり、地面に伝わる振動を回避するために跳んだのだ。

（バカなッ！）

それは、怒りで冷静さを失った人間にはとてもできない行動だった。

大男は考える。なぜ、冷静さを失ったはずの相手があんな計算された行動を取れたのか。

（この男、もしかして……）

そして、ある事を思いついた。

（僕を……、ハメたのかッ?!）

もし、最初の絶叫そのものが演技だったら？ もし、少年が守るべき標的が隠れているテーブルを撃たれ、怒りを覚え絶叫し、怒り

のままに突っ込んで行くように見せかけていたとしたら……。

(……あり得ない。そんな、馬鹿な事がッ)

だが、そんな根も葉もない仮説を確信にする事が起こった。

ニヤリ、と。

大男の目の前にいる少年が、笑っていた。

まるで、うまくいった、と語っているかのように。

「——ッ！」

少年はそのままハンマーの上に飛び乗ると、大男の顔面目掛けて右掌に渦巻く空気の凶器で切りかかる。それを回避しようと大男は長いグリップから手を放し、後ろに下がろうとした。しかし大男にはパワーはあってもスピードはない。対してユアンは跳んでいるにも関わらず、風を使いさらに迫るスピードを上げて、

斬ッ！！　と大男の顔面を横一線に切り裂いた。

赤い鮮血が横に散った。

「ガッがあああああああああああああああああああああああああああああああ！！」

絶叫しながら大男の体は後ろに倒れ、その振動が地面を揺らす。ユアンはそのまま倒れている男の頭のすぐ上に着地する。大男は両手で顔面を覆いながら地面の上をのた打ち回っていた。手の隙間から今も赤い液体が溢れ出している。

最初の勝負は結した。

少年は殺意の籠った視線を眼鏡の男に向けて、奥歯を砕く勢いで
噛み締める。

そして第二ラウンドが開始した。

14 第二ラウンド（前書き）

また敵目線です。

14 第二ラウンド

風を切る音と男のものがき苦しむ声が響く。

「バップ！」

叫んだのはデリックと言う眼鏡を掛けた男。

（くそっ、バップの野郎、あっさりやられやがって）

デリックは地面にしゃがみこんでいるユアンを背中越しに睨み付け、また睨み付けられている。

（しかしこいつもえぐい事をするな。一思いに殺してしまえばいいものを）

ユアンに顔面を引き裂かれたバップと言う大男は、重傷を負っているもののまだ死んではいなかった。それを甘さと言う者もいれば生き地獄を味合わせている惨い奴と思う者もいる。デリックは明らかに後者だ。彼なら迷わず敵にトドメを刺すだろう。

数秒交差する殺気の籠った鋭い視線。

そしてデリックは無言のまま左手で左側にあるショルダーから、新たな回転式拳銃リボルバーを取り出し、振り返ってユアンにその二つの銃口を突きつける。

そのわずかな時間に、ユアンも左掌にドーナツ状に回転する空気の手裏剣を作り出し、地面に手はつかないものの、身を低くしてクラウチングスタートに似た体勢を取る。

両者の距離は一〇メートル強。十五歳ぐらいの少年なら三步か四歩ぐらいでゼロにできる。だが二人とも飛び道具の使い手だ。一〇メートルなんて距離は距離の内に入らない。

短い沈黙のあと、先に動いたのはユアンだった。

再び爆発的な勢いで突っこんで行くユアンに対し、デリックはただ銃の引き金を引くだけ。

しかし、

デリックの拳銃から銃弾が放たれる事はなかった。それより先に、ユアンの手裏剣が彼の右肩を切り裂いたからだ。

「——なッ！」

鮮血が空気の手裏剣の軌道を反って肩から飛び出す。

(……ばっかな、いたい……いつの間につ……！)

「そっぴや言つてなかつたが」

ユアンの冷めた声がデリックの耳に入ってくる。彼の左手には未だに透明な手裏剣は回っている。

「俺のこの武器は——」

だが、右手には何もなかった。

「別に腕を振るわなくても飛ぶんだよ」

デリックはバランスを崩し後ろに倒れかけるが、ギリギリのところで踏ん張ると体勢を立て直すために後ろに下がる。

（こいつ、思った以上に動きが速い。武器が透明で見難い事もあるだろうが、それにしても予想以上にやる相手だと言う事には変わらないか）

自分の呼吸が荒い事にデリックは歯噛みする。そしてユアンの左手に視線を向けた。

と、この時、彼はある違和感を持った。

（あいつの左手にある空気のカッター。なんか厚くないか？ 威力を強めたのか。それとも他に何か意味があるのか）

だが深く考えなかった。

二人の距離は五メートル強。不意打ちに近い攻撃を受けたデリックは左手の銃だけ構えなおし弾丸を放ったのと同時に、走ってきているユアンも左手の透明な手裏剣を、腕を横に振って放った。

鉛の弾丸と空気の手裏剣が交差する。

（よし、いける！ 俺が放った弾丸は命中コースだ。対してあいつの放った攻撃は体を軽く逸らせば簡単に回避できる）

デリックの予想は当たった。弾丸はユアンの右肩を貫通し、そのまま彼の体を後ろに倒れさせる。そして相手が放った空気の手裏剣は、デリックが右肩を後ろに引く事で軽々とかわした。

この勢いでさらに弾丸をユアンの体に打ち込めば、確実に形勢が逆転できる。

デリックの勝利は確定いた。

だが、現実は違った。

なぜなら彼の体からは大量の赤い液体が噴出していたから。

「——ッ!？」

一瞬、彼は自分の体に何が起こったのか分からなかった。相手の攻撃は完璧に見切っていたはずだった。かわしたはずだった。しかし彼は今、倒れかけている。汚い地面に引き寄せられるように。

「……」

デリックは無言だった。無言のまま地面に倒れていった。

(……くそつたれがッ)

背中に鈍い衝撃が走ったがそれはすぐに消え、今はもう何も感じられない。体の感覚が麻痺してしまっている事と、思考に集中しているから。

(いったい、どういう事だ？ 俺はいつ攻撃を受けた)

あいての攻撃は今までと変わっていないかったはず。
いや、一つ変わっていたところがある。

(カッターの厚さ……、まさか！)

そうか、とデリックはここで納得した。

(攻撃の二枚重ね。手裏剣の下に予備の手裏剣を重ねて攻撃範囲を広めたな。ちくしょう、姑息なまねをしてくれるッ)

ユアンの放った手裏剣がデリックの横を通り過ぎる直前。手裏剣が二つに分離した。片方は予想通り通りすぎ、分離したもう片方は右腹から右胸にかけて真っ直ぐ切り裂いていった。

早いところ、ユアンはデリックの行動を読んでいたのだ。

（結局俺たちは、潰される運命だったと。この町でくたばる定めだったと。……つまりはそういう事か）

傷の深浅は分らない。最初に受けた傷から血を流し過ぎたせいで意識が朦朧としてきている。視界に映る星空も霞んで見えてきた。

（……ああ。やっぱりあんな『組織』なんかと、関わるんじゃ、なかった――）

デリックの意識は途絶えた。
同時に二回目の勝敗も決した。

15 最終ラウンド

「痛つつ……」

ユアンは右肩を左手で押さえながら、上半身だけ起き上がった。肩から大量の鮮血が溢れ出し、傷口を押さえている左手は赤く染まっている。生暖かい液体が腕を伝って地面に落ちる。

焼けるような痛みに耐えながらユアンは辺りを見渡す。そしてまず視界に入ったのは、三メートルほど先に仰向けで倒れている眼鏡を掛けた男だった。

「倒した……のか？」

ほとんど賭けに近かった。手裏剣に手裏剣を重ねる技は今までやった試しがなかったから。以前からやってみようとは考えていたのだが、なかなか使える機会が訪れなかったのだ。

（分離せずにそのまま合体しちゃうんじゃないかと思ったけど、無事にうまくいってよかったー。これで俺のこの『力』はまだまだいろいろな応用が利くって事が分かったな）

ユアンは新しい技を覚えた！ と言う訳なのだが、まだ安堵はできない。他の敵がどこかに潜んでいる可能性もある上に、彼にはまだやることあるからだ。

テーブルの向こうにいる一人の少女の安否。それを確認しなければ安息なんてとてもじゃないができない。

「……キャロル」

思わず少女の名前を口に出してしまったユアンだったが、

「なあに？」

「うわぁ！」

いきなり隣から甘ったるい女の子の声が聞こえた。それに驚いたユアンはもの凄い速度で振り返ると、すぐ隣に一人の少女が膝立ちをしていた。

「思った以上の反応だったよ。そんなにびっくりした？」

「当たり前だ！ いきなり横から声をかけられたんだからな」

ユアンは少女の姿を見て、内心ほっとしていた。血などを出している様子はなく、何より生きていた事に安心していった。

「本当に黙らせちゃったね」

「なんだよお前。俺の言葉信じてなかったのか？」

「うん」

直球ストレートの即答だった。真っ直ぐすぎる返答と自分の信頼の無さにユアンが落ち込んでいると、

「でも助かったよ。貴方が床に伏せたらそのままの状態で、どこか別のところへ移動しろって言うてくれなかったら、今ごろ私死んでいたよ」

あはは、と笑いながら言うキャロル。

「なんだか今でも信じられないなあ」

「おいおいなんだよそれ。お前も見てたんじゃねーのか？ 俺の活躍を」

「見てたよ。見てただけど何だかね」

なぜか曖昧な言い方しかしないキャロルに、ユアンは怪訝な表情になる。

「貴方って術師としての階級ってどのぐらいなの？」

「あ？ なんだよいきなり」

「いいから答えて」

キャロルが真顔で急かすように聞いてくるもので、ユアンは『見習い術師だけ』と言う。

「……見習い、ね」

「何でそんな事聞くんだよ？」

「なんでって、それは貴方の元力マグナがあまりにも小さいから——」

と、喋っている途中、突然キャロルの口が止まった。そして彼女の瞳は信じられないものでも見ているかのように、怯えていた。驚いていたのではなく、怯えていた。

そんな彼女に首を傾げそうになったユアンだが、彼もすぐ異変に気付いた。

自分のすぐ後ろに何かが立ち上がった。ユアンはそう感じていた。同時に背筋に殺気のような寒いものが走る。

「……」

ゴクリと口に溜まった唾を飲み込み、ゆっくりと後ろを振り向く。そして見た。

今にも巨大なハンマーを、キャロルとユアンの頭上に振り下ろそうとしている大男を。

「な——ッ！」

さっきまでユアンの後ろで倒れていた黒いフード付きのローブを羽織った大男。ユアンが撃破したはずの敵。

大男の体はガクガクと震えていた。まるで雪の中を薄着で歩いているように。それに左腕の側面の布は赤黒く染まり、顔面、より正確に言うとも両方の目からは横一線に赤い鮮血が今もなお、とどまる事無く溢れている。

おそらく視力はもうないだろう。それにとても戦える状態でもない。そんな事は誰が見たって分かりきっていた。だが大男は的確に『敵』の位置を掴み取り、今また襲いかかるうとしている。

（……何だ、こいつは）

驚きよりも、どちらかと言うと恐怖の方が大きかった。腕を裂か

れ、視界を奪われても動いている化け物に。普通なら大量出血で意識が跳んでいるはずなのに、大男は立っている。何も見えないはずなのに、ユアンたちの位置を捕らえられないはずなのに、大男は正確に二人の頭上にハンマーの頭部の狙いを定めている。

「……臭うぞ、臭うぞ！ 『風』と『天使』の臭いが！ 必ず殺してやる。必ず殺してやる！」

急いでこの場から離れようとした。だがすぐには体が動かない。肩の痛みに体力を持っていかれてしまっているようだった。隣にいるキャロルだけでも突き放そうと思ったが、それだけの時間がない。途中、遠くで大きな音がしたような気がしたが、ユアンは気にしている暇がない。

大男の腕に力が入るのが分かった。体の震えを抑えて地面をしつかりと踏み締め直しているのがわかった。

一瞬、大男の全ての動きが止まり、そして巨大なハンマーが振り下ろされる。

男が立ち上がったのを確認してから経った時間は約一〇秒。そして十一秒に達する時には、

ドゴンツ！ と言う鈍い音が響いていた。視界が真っ暗になる。体の中の骨が碎ける音がした。吐血する苦痛の声が聞こえた。

ユアンは死んだと思った。だが同時に死んだと思っている事に違和感を覚えた。

死んだのなら何も思えられないはず。何も考えられないはず。しかし自分は『死んだ』と思い、考えている。

そして彼はようやく気付いた。

視界以外はどれもユアンやキャロルのものではなかった事を。自分が生きている事を。

「……」

ユアンは思わず閉じてしまっていた視界を開いて、辺りを見渡す。相変わらず崩れた喫茶店の入り口前だった。次に視界に入ったのは大男が握っていた巨大なハンマーだった。それは彼のすぐ目の前に落下して、石畳の地面を粉碎していた。そしてその三メートル先で仰向けに倒れている大男と、その大きく出っ張った腹の上で転がっている小柄な男。

いったい何が起こったのか、理解できなかった。

潰されるはずだった自分が生きていて、潰すはずだった大男が吹き飛ばされ昏倒しているこの状況が。

と、その時だった。後ろから足音が聞こえてきたのは。

瞬間的に振り返ったユアンは無駄に広い町の中央通の真ん中に、ある一筋の光を見た。その光は揺れながらこちらに近づいてきている。ゆっくりと、だが確実に。

その光には殺意があった。だがそれはユアンやキャロルに向けられているものではないような気がする。喫茶店の壊れた入り口の中から漏れ出している光の中に、一筋の光は自ら正体を明かすかのように足を踏み入れる。そして、

ユアンたちが泊まる予定のホテルに居た、おじいさんが出てきた。

「……え？」

唖然とするしかなかった。暗い中央通からなぜこのタイミングでホテルのおじいさんが出てくるのか。そしてなぜおじいさんの右手

には真つ白な剣が握られているのか、分からなかったから。

ただ、ここで言える事が一つある。

それはホテルのオーナーであるおじいさんと、人を殺すための長さ一・五メートルほどの刃の狭い白い剣が不自然なほどに合致していると言う事。普通の、平和な世界に生きる人間なら絶対にあり得ない事。つまり、それが意味する事は、

「……敵」

「安心せい。ワシはお前さんらの見方だ」

ユアンは思わずギョツとした。さっきの一言は一人事のつもりだった。隣にいるキャロルにも聞こえるか聞こえないかの音量で言ったつもりだった。にも関わらず、一〇メートル以上離れている剣を持つおじいさんは彼の言葉を聞き取り、なんなく答えた。

普通の人間の聴覚では絶対に出来ない事だ。地獄耳と言う領域を越えている。

困惑するユアンにおじいさんは気付かずに、

「やっぱりこやつらはお前さんらを狙っていたらしいな。先手を打っておいてよかった」

「……先手？」

慎重に聞き返すユアンに対して、おじいさんは気軽い調子で、

「ああ実はな、ついさっきこの中央通じやないほうの大通りで、お前さんらを狙っていた黒いローブを着た人間達を四〇人ほど始末してきたところなんだよ」

「……は？」

話を聞いて、間抜けな声を出してしまった。立て続けに意味の分からない出来事や言葉を言われて思考がついていけなくなっている。肩の痛みも忘れて、ユアンは状況を整理するために一から質問する事に決めた。

「ちょっと待ってくれ。黒いローブの人間を四〇人ほど始末したってどういう事だ？ それってつまりこいつらの仲間って事なのか？」

「まあおそらくそうだろうな。着ているローブが同じだし」

「んであなたは他に四〇人いた黒いローブの人間達を一人で全員始末したって事なのか？」

「ああ」

とんでもない事を簡単に肯定したおじいさん。

（何なんだこの人は。四〇人のローブの人間って事はおそらく全員術者だよな。それを一人で片付けたってのか？ それが本当ならこのじーさん、とんでもねー怪物じゃねーか）

術者ランクは『魔道師』、それが戦闘に特化している『騎士』と言ったところか。

ユアンが頭の中をごちゃごちゃにしながら考えていると、おじいさんは不意に少し尖った口調で、

「まだやる気なのか？」

それは二人に対して言った言葉ではなかった。

「ちくしょう……！」

言ったのは、さっきまで大男の腹の上で転がっていた小柄な男だった。

「何なんだよ。……何なんだよお前は！」

小柄な男が着ている黒いローブには所々切り傷が入っていて、切り口には赤黒い染みが付いていた。呼吸は荒く、立っているのも辛そうに見える。男の両手には刀身が三〇センチ程度の双剣が握られているが、肝心の両腕が力なくだらりと垂れ下がっていてとても戦える様子ではなかった。

しかし男の瞳にはまだ戦意の火は消えておらず、その証拠に覚束ない足取りで一歩前に踏み出した。

「いきなり襲い掛かってきて、仲間のほとんどを切り裂きやがって！ お前のせいで俺達の任務は完璧に失敗だ！ お前のせいで俺達はもう終わりだ！」

男の絶叫が響き渡る。理不尽な暴力に対する悲痛な叫びのようだった。だがおじいさんは進める足を一旦止めて、そして心の底からつまらなそうに、

「お前はそんな事を言える立場なのか？ 四〇人で二人の子どもを襲おうとしていた奴らが。ワシはただお前らに命を狙われている子羊を助けただけだ。どう見ても完全な『悪』はお前らだろうが」

おじいさんは吐き捨てるように言った。その言葉に小柄な男は黙

ってしまった。

「さて、どうするんだ？ 本当にまだやる気ならワシは確実にお前を殺すが……口振りじゃあ死にたくないようだけど？ 死にたいのなら向かってこい。死にたくないのならさっさとここから消えろ。二つに一つだ。さあ、どっちにする？」

「……ちくしょうッ」

小柄な男は奥歯を噛み締め、ゆっくりとした動作で双剣を鞘に納めた。そして後ろに倒れている大男の下へ安定しない足取りで歩いていく。大男に向かって何か喋りかけると、突然さっきまで昏倒していた大男が立ち上がり、眼鏡を掛けた男の方へ向かっていく。

気を失っている眼鏡を掛けた男を担いだ大男と小柄な男は、そのまま何も言わずに暗い町の中央通に消えていった。

完全に気配が消えた事を確認すると、おじいさんは白い剣を黒い鞘に納めてユアンのいる方へ振り返る。

「無傷じゃあないようだが、まあ生きていてよかったよかった」

「あんたは一体何なんだ？」

「ん？ ワシはホテルのオーナーだけど？」

「いや、俺が聞きたいのはそう言う事じゃなくて――」

「まあそう焦るな。話なら後でしてやるから、今はその怪我を何とかせなあかんだろ？」

黒いローブの少年

「……なんだこの有様は」

少年の声が夜道に響き渡る。

そこは『リーヴァリー』と言う町の大通り。暗く、彼以外は誰もいない。

ただ、そこには大量の肉塊ひつが転がっていた。

「こいつら、なんで死んでんだよ」

フードの中から、目の前に広がっている光景を目に少年は啞然としている。

少年は左胸に蒼い薔薇の刺繍が施されている、フード付きの黒いローブを羽織っていた。そしてそれと同じ物を、彼の前で転がっている死体も羽織っている。色は少々、黒と言うより赤に近くなっているが。

「まったく、意味わかんねーよ。ターゲットはガキ一人だろ。一〇分で終わるだろ。なのになんでめーらは殺されてんだよ」

つつても、もう死んでるから誰も答えられねーか、と付け足した少年はボリボリと頭を掻きながら、面倒そうな態度で死体の元へ歩いていく。

この近辺では最近雨は降っていない。ところが水溜りの上を歩いているような足音が聞こえる。歩く度に赤い液体が少年のズボンの裾や、周りの地面を汚していく。

「うわっ、最悪。裾汚れちゃったじゃないか。こいつら無駄に血液流しすぎ」

はぁクリーニングに出すのめんどくせー、と呟いている少年は、一つの死体の前で足を止めた。そこでしばらく悩んでいるような仕草をすると、

「ま、もう汚れてるからいいか」

言っと少年は靴のつま先で死体の頭を蹴飛ばした。当然ながらも死んでいるので反応はない。

「んー、本当に死んでるようだな。じゃあ次はこうなった原因だ」

転がっている死体は全員術師で、術者階級はこれも全員『魔術師』だった。そこら辺の術師なんかよりは実力は上のはずだ。しかし全員殺されている。どれも死因が剣で切り裂かれて死んでいる辺り、どうやら仲間割れで殺し合ったようではなさそうだった。彼らの中で剣を持っているものが二、三人しかいないからだ。

「他の組織の集団に襲われた、って線は薄そうだな」

少年がそう思う根拠、それはその場の状態を見れば分かる。

そこには死体と死臭、赤い液体の水溜り以外、戦闘の形跡がほとんどなかった。唯一地面に、真つ二つに割れたハンマーが突き刺さっているが、それ以外は大きな破壊の跡がないのだ。集団戦になっていたら建物の壁などが破壊されていたり、戦闘範囲が建物の上など様々なところに広がっていたりしてもいいはずなのだが、この戦場にはそう言った跡が全くない。不気味なぐらいに静寂していて、戦闘が行われたのはこの大通りだけのようだった。

「殺され方は全員同じ、そんなもって集団戦の形跡はなし。だとしたら相手はもしかして、個人ひとりなのか？」

だがそれならそれで不自然だった。さっきも言ったように彼らは全員戦闘に特化した魔術師だ。それを四〇人も相手にした上、皆殺しにできる人間なんてそうそういる訳がない。

「武器が転がっている所を見ると、どうやら抗戦しようとしたらしいな」

それでも全員殺されていた。

(……この町にそれだけの術者がいるって事なのか？)

だとしたら、少々厄介だな、と彼は思う。その術者は十中八九、少年の敵だろう。任務中に邪魔されたら色々面倒な事になる。

(ま、そんな時はそんな時だな。死体の処理はキファーフさんの部隊に任せるとして……、ん？)

そこで少年は気付いた。大通りに倒れている彼の元部下たち。

(確か四十五人派遣したはずだけどな)

その人数が足りない事を。

三人いなかった。

死体を粉々に粉砕されたのかもしれないが、それはないと少年は否定した。それは相手の体を粉砕する理由がないからだ。これだけ派手にやっというて三人の体だけ木っ端微塵に破壊するなんて、どう考えてもおかしかった。と言うかそれ以前に人間の体を粉砕する術を使っていたら、もっと大きな破壊跡が残っているはず。だがここにはそんな大きな破損箇所は見つからない。

だとすると、違うところで殺されたか、もしくは……、

「運良く生き延びて、逃げやがったか」

少年が所属する組織、その中でも彼が属する派閥では任務の失敗は絶対に許されない。成功すればそれなりの報酬を受け取ったり階級が昇格したりする事があるが、もし失敗して逃げ帰ってきたら、その者は死を持って責任を負わされる。

「たく、大人しく全員殺されてればよかったのに。余計な仕事が増えちまっただろーが」

ボリボリと頭を掻きながら面倒くさそうに少年は言う。

「あーあー本当に」

だが、彼の表情は笑っていた。心の底から楽しそうに。

「めんどくせーな」

ニヤリと歪んだ笑みが作られる。

そして蒼い薔薇の下に『イツザ「ラージ」』と英語で刺繍を施されている黒いローブを羽織り直すと、少年は裏切り者の制裁に出かけた。

1 一時間後

町は暗闇に包まれていた。

地上からはほとんど光が放たれておらず、丸い月が空高くから照らしているだけ。人の声がほとんど聞こえず、虫の音ねが寂とした荒地から響いてきている。そんな町だが、あるホテルの一室だけ光が漏れていて、声が聞こえた。

「い——ッ」

右肩に激痛が走った。思わず体を跳ね上げると、

「こら！ 動いちゃダメだつて！」

かわいらしい声で怒られてしまった。

今、ユアンはキャロルに傷の手当をしてもらっている最中だった。

「血は止まってるけどあんまり動くとまた噴出しちゃうかもしれないでしょ？」

「大丈夫だつて。俺傷の治りはかなり早いから」

「そんなの全然言い訳になってないよ」

「いや言い訳じゃなくてマジなんだけど……」

「だいたい銃で撃たれてからまだ一時間しか経ってないのに、そんなに早く治る訳がないじゃん。本当ならもっとしっかりした治療を

しなきゃならないんだからね。これは飽くまで応急処置。明日になったら真っ先に病院行かなきゃだから！」

まったくなんでこの町の病院は夜やってないのー？ と若干お母さんみたいになっているキャラルは、割りと元気だった。それを確認したユアンは視線を彼女から窓の外に向けて、ぼんやりと眺め出す。

あれから一時間が経った。

いや。喫茶店の一件からまだ一時間しか経っていなかった。

襲撃者が去った後、ユアン、キャラルそしてホテルのオーナーであるおじいさんの三人は宿に戻る事にした。ユアンの肩の傷を手当する、と言う目的もあるのだが、一番の理由は敵の増援に見つからないよう隠れるためだった。このホテルには術的な結界が張ってあるらしく、その内容は『術者本人が招いた者以外にはここを認知できない』と言う事で、敵はここを見つける事が難しいだろう、との事だ。

（あのじい、最初から俺らをここに泊めるつもりだったのか？ でなきゃ俺らはここを見つけられなかったはずだし）

ホントつくづく得たいの知れないじいだな、と思うユアン。

（まあ、あいつらが何なのか、どうして俺たちが狙われたのか、いろいろわかんねーけど、とりあえずは一安心ってところか）

二人が居るのはホテルの三階、夕方借りた部屋だった。目立つ家具などはなく、ベッドと本棚とクローゼット、それに両開きの窓だけの殺風景な一室だ。二人の荷物は部屋の隅っこに置いてあり、ベ

ツドの上にはおじいさんから借りた包帯と薬品が入った箱、つまり救急箱が開いたまま置いてある。

「はい、これでオッケー」

キャロルは肩に巻いた包帯を軽く縛ると、一発ユアンの背中を叩く。もちろんそんな事をすれば、

「ぐぎ——ッ！」

傷口に響いてしまう訳で、ユアンは床の上をつめきながら転がりまわった。

「何すんだよ！ クソ痛ーぞ今の！」

「ほーら、何が早く治る方だ。まだまだ全然治ってないじゃん」

「そんなに早く治る訳ねーだろ！」

「あれえ？ さっきと言っている事が違うんだけど」

ニヤリ、と意地の悪そうな笑みを浮かべるキャロル。

「お前まさか俺にそれを言わせるために叩いたのか！？」

「まあね」

気楽そうに笑顔で答えるキャロルに本気で殴ってやるつかと考えたユアンだが、先ほどの叩きが思った以上に響いていてうまく立ち上がれない。そんな彼をキャロルは無視して立ち上がると、

「わたしこれからお風呂に入って来るけど、貴方は動いちゃダメだからね。ちゃんとそこで転がってるんだよ」

「随分とけが人の扱いが雑だな」

「わたしは看護師さんじゃないからね」

そう言いうと彼女は自分の鞆から着替えを取り出し、部屋を出て行った。

おそらく彼女は自分がいなくなってもユアンが動かないようにするため、傷口を叩いたのかもしれない。だが、もしそうなのならもうちょっと違うやり方をしてほしかった、と思うユアンだった。

それから五分後。

ユアンはようやく体を起こし、床に座ったままベッドに凭れかける事ができた。

「くそ……。キャロルのヤロウ。何か仕返ししてやらねーと気が済まねーぞ」

そんな事を呟きながら立ち上がったユアンだったが、ふと、彼の体がふらりと揺れた。そしてそのまま後ろのベッドに腰をかける形で座り込む。

「……」

体に力が入らない。筋肉痛のような感覚が体全体を包んでいる。痛みはそれほどないのだが、とにかくだるかった。

「あーあ、やっぱり運動不足だったか」

本人はそう言っているが、実際『運動不足』なんて理由にもならない。

水分&栄養不足で倒れたのが昨日の昼頃。次に合計重量四〇キロ前後の荷物を背負って走ったのが、今日の朝から夕方ぐらいまでの出来事。そしてその後起こった不意の戦闘。

はつきり言って、体が悲鳴を上げない訳がなかった。

ユアンは全てを投げ出すようにベッドに身を預け、両手を軽く広げて天井を眺める。

「……本当に、なさけねーな」

意識がどんどん遠くなる。視界が眩み、何も考えられなくなり、ユアンはそのまま動かなくなった。

2 赤い『陣』

小鳥の囀りが鼓膜をつつく。

目を覚ましたら、優しい陽の光が視界に飛び込んできた。思わず開きかけた両目を閉じてしまうが、すぐにまた開き直す。

「……朝か」

ユアンは首を動かして時計の掛かっている壁に視線を向ける。

時刻は午前一〇時一〇分前後。朝と言えば朝なのだが、起きるにしては遅い時間帯だった。

「少し寝過ぎしちゃったな」

ぼんやりとした思考でそんな事を呟くユアンは、時計から視線を外し部屋の中を軽く見渡す。一人用のホテルの一室。その中には彼以外、誰もいなかった。一人用なのだから一人しかいないのは当たり前かもしれないが、彼の場合は違った。もう一人、彼以外に同じ部屋を借りた者がいる。

「……あいつ、どこ行ったんだ？」

ベッドから上半身を起こして、頭をボリボリ掻きながらユアンは言う。そこで彼は、ふと気付く。昨日の夜の全身筋肉痛みたいな体のだるさは消えていたが、代わりに自分の体が相当『臭う』と言う事に。

「そついや昨日風呂入らずに寝ちまったんだっけか」

ユアンは立ち上がると、部屋の隅に置いてある自分のバッグの中を漁り始める。中から着替えを取り出すと、そのまま部屋を出て行った。

「確か風呂は四階だって言っていたよな」

狭く、一段一段が異様に高い階段を上っていく。四階も三階と建物の構造はほぼ同じだったが、上ってきて早々、目の前に他の部屋とは違う少し大きな扉が目に入ってきた。

「ここが風呂場のような」

そう言いながら扉を開き脱衣所に入っていく。中は思ったより広かった。このホテルの一室ほどの広さはあるだろう。

ユアンは入り口に置いてあった籠を一つ手に取ると、その中に着替えを入れて着ている服を脱ぐ。肩に巻いてある包帯を剥ぎ取るように外すと、タオルを左肩に乗せて風呂場に繋がる扉へ向かう。肩の傷は完全に塞がっており、見た感じ湯に浸かっても大丈夫そうだった。

「さーって何週間ぶりかの風呂だ。存分に綺麗になろー」

おー、と一人で言いながらユアンは木の扉に手を掛け、勢いよく右側にスライドさせる。すると視界が白い湯気に包まれた。

(……?)

おかしいな? とユアンは思った。今は朝の一〇時過ぎで風呂には普通誰も入っていないはず。なのにどうしてこんなにも湯気が充滿しているのか。

（誰かが入ってんのかな？ まあ別にいいか。風呂場は広いし、男
同士なんだからーんの問題もない。……って、あれ？）

そこでユアンは再び思った。

（つーかこの風呂場って……、女湯と男湯、分かれてたっけ？）

その答えはすぐにわかった。なぜなら、

ユアンの視界に、生まれたままの姿でシャワーを浴びている、見
慣れた少女が映っていたからだ。

「……………」

彼はその場で固まった。

少女は両手を上げてブラウンの髪を洗っている最中だった。

柔らかそうな肌に蒸気を纏った水が滴り、ほのかに赤みを帯びた
背中には、髪からシャンプーの泡が落ちてきている。幸い彼女は背
中を向けていたので大事な部分はほとんど見えなかった。しかし女
の子の裸なんて生まれてこのかた見た事がない事もないユアンは、
二の腕の下から覗く小さな膨らみを見て、

（うわー、今まで子どもだと思ってたけど、やっぱり子どもだな。
全然ないよ。それにしても女の子の肌ってほんときれいだよな！。
柔らかかそうで。ってなに俺は普通に鑑賞してんだ！？）

変態な感想を心の中で思っていたユアンは、すぐさま全裸の少女

から視線を外そうとして、ふと気付いた。

少女の背中。細くて小さなその背中に、赤くて丸い『陣』（魔法陣のようなもの）が描かれている事に。

「……？」

思わずユアンは少女の背中（裸）に視線を戻していた。

女の子の背中にはあまりにも似つかないその『陣』は、彼女の背中を埋め尽くしていた。すぐに気付かなかったのは湯気で見難かったからだろう。

そしてユアンは彼女の背中に『陣』が描かれている疑問の他に、もう一つ気掛かりな事があった。それは、

（あの『陣』の形、一度似たようなの見た事がある。けど『あれ』は簡単に手に入るものでも扱えるものじゃねーし。それにあの『陣』、『あれ』と本当に似てるけど何かが違う。無理に強化されてるし、自動制御術式が変に組み込まれてるし……）

リミッターと強制停止術式は付いてるようだけど、と彼は少女の背中から視線を外し、その場で『陣』について考え込もうとしていた。その時だった。

「すごく堂々とした覗きだね」

ゾクリと、冷え切った声が聞こえた。

温かい蒸気が舞っている使用中の風呂場ではあまりに相反する、絶対零度のような感情の籠っていない声が。そしてユアンは外して

いた視線を前へと向ける。視線を向けてしまう。

少女は素っ裸の状態で肩越しに振り返っていた。悲鳴は上げなかった。ただ黙って覗きの現行犯であるユアンを見つめているだけ。対する彼は金縛りにあったかのように固まっていたので、しばらくの間二人の視線が絡み合い、時間が止まった。

「……」

「……」

人間を見ている瞳ではなかった。まるで捌かれた魚の残骸でも見ているかのような、気持ちの悪いモノでも見ているかのような、不の感情が詰まった瞳だった。

その場に、シャワーの音だけが響き渡る。

いったいどれだけの時が経ったのか、分からなかった。一秒が永遠に感じられ、呼吸すら忘れてしまいそうなのに、湿った空気が肌に染み込み、素っ裸の少女に視界を支配されている。

そして、気が付いたらユアンは風呂の扉を左にスライドさせていた。

トン、と扉が完全に閉まると、後ずさりをしながらゆっくりとその場から離れていく。するとシャワーの音が消えた風呂場から、少女の声が聞こえてきた。

少女は一言、

「……ヘンタイ」

そう呟いた。

3 気まずさ

現在時刻十二時三〇分。

大勢の客で賑わう、とある飲食店の一席で、

「……」

ユアンのテンションは地の底まで落ちていた。自分の昼食がご飯と味噌汁だけなのに、キャロルはグラタンやらスパゲッティやらとても豪華だから、と言う訳ではない。

彼のテンションが下がっている理由。

それは、

空気が死んでいたからだ。

周りの客は楽しく雑談をしながら食事しているのに対し、この二人はその間逆な状態だった。

普通、女の子（三・四歳ほど年下だが）との二人きりの食事と言うのは、多少ドキドキしながらも何だかんだ楽しいはずだ。でも、彼女との昼食は苦痛でしかなかった。

まあ、ついさっき裸を見られた相手と気軽に会話しろと言う方が、無理があるかもしれないが。

「……なあキャロル」

ユアンは沈黙に耐えかねて、食べるのを一旦止めて思わず話し掛けていた。だが彼女は、

「今ごはん食べてるから話し掛けないで」

相変わらずの素っ気ない態度。キャロルは視線も向けず、食事のペースも一定なまま、冷たい声を放つだけ。

「いや、だからあれは単なる事故で、決してやましい事は何も考えてなかったからっ!」

「そんなの信じられないもん」

「何で信じられないの? どこから見ても事故じゃん。そして俺は健全な青少年じゃん」

「どこが? どこから見ても腐った覗き魔じゃん。あんなケダモノみたいな目でわたしの裸を見つめてさ」

そんな彼女の言葉を耳にしたのか、ゾクリ、と周りにいる他の客達から痛い視線を向けられる。そんな視線に急かされて、

「違う! いや違わないかもしれないけど違うんだ! あれはただの好奇心で――」

「好奇心!? 好奇心で覗くなんて余計許せない。……初めてだったのに」

「……え?」

「まさかあんな形でなくしちゃうなんて」

「ええ!?!」

「もうお嫁にいけないよっ！」

「えええええ！？」

女の子が言うと破壊力抜群な言葉の猛攻に遭い、ユアンは焦りまくっている。同時に周りからの視線が痛すぎる。視線だけで殺されそうだ。

風呂場での一件、ユアンはキャロルが出た後に一応風呂には入ったものの、更衣室の出入り口ですれ違った彼女のゴミクスでも見るような瞳が眼球に焼きついていて、恐怖のあまりゆっくりと浸かれなかった。

その後、風呂から出たユアンは部屋で待っていたキャロルと一緒に、町の中では大きい方の飲食店で昼食を取る事にした。もちろんその際の移動では彼女は数メートル、ユアンと距離をあけて歩いていた。

とまあこれが今までの経緯。
そして現在に至る訳だが。

(……はあ)

ユアンは頭を下げて、心の中で溜め息を付いた。

正直、部屋で待っていてくれたのは嬉しかった。でも、

(完全に嫌われちゃったかな)

それ以上は喜べない。出来事的に男としては喜べたのかも知れないが、友達(?)としては全く喜べない。

彼はよく女の子に嫌われる。

理由は簡単で、いつもなぜか女の子にとっても失礼な事をしてしまうから。

さっきみたいに裸を見てしまったり、ぶつかった拍子に胸やらお尻やらを触ってしまったり、水を被せて服を透かしてしまったり、などなど。ベタな事ばかりだが、それらは全て女の子に嫌われる行為だ。

（ほんと、何でもいつも俺はこうなんかな）

望んでいないのに、気が付いたらそんな事ばかりだ。他人（主に男共）からすれば羨ましい事この上ないだろうが、ユアンにとってはいいい迷惑な『体質』だった。

ハッピー体質。

それがユアンの体質の名。名付けたのは彼の師匠だった。ついでに言つと彼の体質の被害を最も受けたのは彼の師匠だったりする。

（覗いて殺されかけるのは嫌だけど、急に態度が冷たくなるのはもっと嫌だな……）

すると、前の方から唐突に深いため息が聞こえた。

「わたしは貴方を勘違いしてたみたい」

ユアンが頭を上げて前を見ると、キャロルの透き通ったブラウンの瞳と目が合った。

「最初はクールで頼りがいがありそうで、ちょっとカッコいいなって思ってたんだけど、まさか覗きなんてする変態さんだったなんて」

「だからあれは誤解だって。本当にただの事故なんだって」

若干、涙声になりながらキャロルに懇願するユアン。

「事故、ね。……まあ、そうなんだろうけど」

「信じてくれるのか？」

「一応、貴方には命を助けてもらった恩もあるし、信じてあげないこともないけど。でも、そんな言い訳の前に何かすることが――」

「ごめんなさい！ 本当にごめんなさい！」

「なっ、別に土下座までしなくていいよ。地面におでこ擦り付けなくてもいいからっ」

止めるキャロルを無視して、ユアンは全霊を込めた土下座をする。そしてこの後、彼女に自分の数少ない昼食をあげたりして、彼はどうにか許してもらった。

急に信じてくれた事を不思議には思ったがあまり深くは考えなかった。

結果良ければ全て良し。

確かにその通りだな、と思うユアンだった。

3 気まぐれ「おまけ」(前書き)

3 気まぐれ続きます。

3 気まずさ「おまけ」

食事中の雑談。

キャロルの前にはピラミッド風に盛り付けがされたミートボールと、出来立てのコーンスープが追加されていた。

「ついかさ、キャロルって昨日の夜、風呂入ったんだろ？　なんで朝も入ってたんだよ」

「汗をかいたからだよ」

「昨日そんなに暑かったわけ？」

「……うん。すごく暑かった」

なぜかユアンから視線を反らすキャロル。だが彼は気にせずに、

「そういえばさ、キャロルって昨日どこで寝たんだ？」

「——ッ！」

少女の動きが、止まった。

「？」

さつきから様子がおかしいキャロルにユアンは訝しげな表情になるが、

「もしかして、俺の隣で寝たとか？」

ふざけ半分で言ったのが運の尽き。

突然前から飛んできた熱々のミートボールがユアンの二つの眼球に直撃した。

「ごぶがッ!？」

意味不明な悲鳴を上げてテーブルに突っ伏せるユアン。

そしてこの時、キャロルの顔が真っ赤に染まっていた事を、一時的に視界を奪われていた彼は知る由もなかった。

3 気まずさ「おまけ」(後書き)

ちなみに寝ている時にキャロルが汗をかいた理由は、隣の誰かさんが暑苦しかったから、だそうです。

結局のところ、今回の覗き事件は最初から最後までその誰かさんの自業自得ってことですね。

4 思い〔前編〕

時計の針は十二時五五分を指していた。

「それでこれからどうするの？」

成人男性の約五人分の昼食＋ユアンの昼食を一人で全て食べ終えた大食い少女キャロルが、不意にそんな事を言ってきた。

「そうだな、金はまだあるし、『中央都市』までの食料とかを買いに行こうかなって考えてるけど」

「貴方って『中央都市』に行きたいの？」

『中央都市』とは、世界の半分を支配している東西クロス教と言う宗教組織の首都。

この世界では宗教組織が国家としての役割を果たしている。

「そっぴや言つてなかつたな。俺、ロンドン宗教団に入ろうと思ってるんだ。あそこなら色々珍しい情報とか入ってきそうだし、何より組織の『縛り』が一番緩いんだよ」

ロンドン宗教団。東西クロス教の一派で、術式の研究・解析・創作に発掘、それと対術師戦などに特化した組織。組織としての統一性は他の組織より緩めで、基本的に任務がない時は、所属の術者は自由行動を取れる。

「へー、貴方がねー、ロンドン宗教団にねー」

「おいキャラル。『お前じゃ入るのなんてムリムリ』って目が語りかけてくるんだけど」

「だってロンドン宗教団って『魔術師』以上じゃないと入れないんでしょ？ 貴方自分で『見習い』だって言ってたじゃん。それなのにどうやって入るつもりなの？」

「……」

キャラルの言うとおり、ロンドン宗教団は『魔術師』以上でなければ入れない。過去に『魔法師』ランクで入団した例もあるらしいが、『魔法師』以下の『見習い術師』では常識的に入る事はできないだろう。

そう、『常識的』には。

「まあ一般論だとそうなんだろうが、俺の場合は特別なんだよ」

「特別って、自分で言うとは恥ずかしくない？」

痛いものでも見ているかのような視線を向けてくるキャラルに、『うるせえ黙って聞いてろ』と制するユアン。

「俺はロンドン宗教団のトップに、ある手紙を届けなきゃならねーんだよ」

「？」

キャラルが首を傾げていると、ユアンはコートの懷から一枚の白い封筒を取り出した。

「これ、俺の師匠からの手紙。なんかしんないけど俺の師匠とロンドン宗教団のトップは知り合いみたいで、時々手紙とか出し合ってたんだよ。でも今回の手紙は今までのとは格が違これうかなり重要なものらしくて、『お前が届けてこい』って師匠に言われてるんだよ。まったく人使いの荒い人だぜ」

まあ、とユアンは続けて、

「ロンドン宗教団に入るってのは手紙を届けに行くついでなんだけど、師匠がせっかく紹介状書いてくれたんだから、ついでに入っちゃおうかなーってだけ。『見習い』だから入れないってんなら別に無理して入るつもりはねーんだ」

二枚重ねにしてあったのか、ユアンは白い手紙の後ろからもう一枚同じような手紙をキャロルに見せた。おそらくそれが師匠からの紹介状だろう。

「じゃあロンドン宗教団に入れなかったらどうするの？」

「その時は師匠を探してまた旅に出る予定」

「ふーん」

キャロルはそれ以上何も言ってこなかったから、ユアンは手紙を懐ふしにしまう。

「さて、飯も食ったことだし（俺は全然食ってねーけどな）買い物にでも行くか。お前はどうすんだ？」

「わたしは……、もうちょっとここに居ようかな」

「そっか。じゃあこっからは別行動だ。夕方、ホテルに集合ってことで」

コクリと俯いたままキャロルが頷くと、椅子から立ち上がったユアンは、彼女の隣を通ってそのまま飲食店の出口に向かおうとした。

だが……、

4 思い〔前編〕（後書き）

長いと思ったので二つに分けました。
次はこの二倍の長さだと思っています。

4 思い〔後編〕

「待つて」

立ち去ろうとするユアンだったが、キャロルの呼び止めに足を止める。

振り返ると彼女はユアンに背中を向けたまま、小さな人差し指でさつきまで彼が座っていた椅子を指している。

座れ。まだ行くな。

そう言っているようだった。ユアンは頭を掻きながら席について、反対側の席に視線を向ける。

「何だよ、まだ何かようか？」

「……」

何も言い返してこないキャロルにユアンは首を傾げる。

（……なんか鬱陶氣的にももの凄く重要な話でもしそうな感じだな。もしかしたら自分の事を話す決心でもついたのか？ 俺は今まで気使って聞かなかったけど。まあここはあいつから話出すまで黙っておこ）

ユアンは背筋を伸ばしてキャロルを見据える。

何分経ったのだろう。さっきより周りの音が異様に大きく聞こえてくる。一秒一秒が長く感じる。しかし、彼女はまだ視線を上げない。

(……ん)

外に視線を向けると町には沢山の人たちで賑わっていた。夜と違ってこの町は、昼間は活気があるようだ。しかし、彼女はまだ視線を上げない。

(……んん)

すると、開けてあつた窓の際に小鳥が一羽飛んできた。しかし、彼女はまた視線を上げない。

$$\begin{pmatrix} \vdots \\ h \\ h \\ h \end{pmatrix}$$

愛らしい声を出して、小さく跳ねながら近づいてくる小鳥。窓際からテーブルの上に飛び移った小鳥はそのままユアンの目の前で動きを止めた。しかし、彼女はまた視線を上げない。

(
⋮
ん
ん
ん
ん
っ
!)

しばらくユアンを見上げていた小鳥は、突然羽ばたいて彼の頭の上に乗ってきた。しかし、彼女はまだ視線を上げない。

(
...
hhhhhhh
! !)

そして小鳥はユアンの頭の上に腰を掛け――

「だあ ああああああああああつ！！！」

——ようとしたのだが、突然大声を出したユアンに驚いてどこかへ飛んで行ってしまった。同時に周りの客から再び視線を向けられる。だが彼は気にせずに、

「なんか喋れよお前！
いつまで黙ってんだよ！」

⋮

息を荒げて怒鳴っているユアンに対し、キャロルは静かに視線を

向ける。そしてこのときようやく彼女は声を出した。

「貴方はわたしのこと、なにか聞かないの？」

「は？」

「わたし、貴方になにも言っていないんだよ？ 襲ってきた術師のことか、いろいろ」

キャロルはまた視線を下に向けた。だが、彼女の言葉は続いている、
て、

「貴方はわたしのせいで怪我をしたの。気付いてるんでしょ？ あの術師たちがわたしを狙ってたこと」

「……」

「多分、また来るよ、奴らの仲間。わたしを殺しに。そしたらまた貴方は巻き込まれるかもしれない。昨日以上の大怪我をしてしまうかもしれない」

ユアンは何も言わない。ただ黙って彼女の言葉を聞いているだけ。

「なのにどうして貴方はなにも聞いてこないの！？ どうしてまだわたしと一緒にしようとするの！？」

彼女の声は弱弱いものから、強く訴えるような声に変わっていた。

そしてキャロルの言葉もそこで終わった。自分を責めているような声が止んだ。しばらく沈黙が続き、次に声を出したのはユアンだ

った。

「それで、お前は話す気になったのか？」

「……え？」

先ほどとは違う雰囲気。真剣な表情。

「俺は前に『言いたくなったら言ってくれ』って言ったろ。無理に追及するつもりもないって言ったはずだ」

「もしかして、それで何も聞かなかったの？」

「ああ。他人の事情にズカズカ首を突っ込むほど無神経な性格でもないし、それに、命も救われたしな」

キャロルは驚いていた。信じられないのだろう。あれだけの被害を受けておきながら、たったそれだけの事で何も事情を聞かないユアンの事が。

「……意味わかんない。どうかしてるよ貴方。お人好しにもほどがある。偶然旅の途中で知り合っただけなのに、名前以外はお互い何も知らないのに、ホント、普通じゃないっ！」

キャロルは涙声だった。目尻に大粒の滴を抱えて、鼻を嚙って、一生懸命ユアンに思いをぶつけている。

「それ……、よく言われるよ」

ユアンはそう言うと席から立ち上がって、キャロルの隣まで歩い

ていく。足を止めると彼は彼女の頭にポンツと優しく掌を置いた。

「でも、ダメだな俺は。何も聞かない事が相手にとって良い事だと思つてたけど、そいつは間違いだつたみたいだ」

同時に、彼は思った。自分はただ知るのが怖かつたんじゃないのか、と。何も聞かない事が相手にとって良い事だ、なんてのはただの言い訳なんじゃないのかと。

命を狙われている人間に関わつたつて、どうせロクな事にはならない。面倒事に巻き込まれて怪我をするか、ひどい場合は死ぬのが落ちだ。

だが、それ以前に、と彼は思い、か弱い少女に言葉を放つ。

この時、ユアンとキャロル、二人のいる空間から、周りの音が消えた。そして、

「女の子を泣かしちまうのは、悪い事だからな」

そう。これが一番の理由^{わけ}。

自分の考えが間違つていたと思つた切っ掛け。
するとキャロルの動きが、一瞬だけ止まった。

「よし、じゃあ聞く事にするよ。お前のこと、お前の事情。それで
お前が泣き止むなら、それでいい」

ふるふると、少女の体が小刻みに震え出す。それはまるで、何か
が耐え切れなくなつて切れそうな感じだった。

「……いいの？ これ以上わたしの事を知つたら、きっと貴方も奴

らに狙われるよ?」

「別にいい」

震える声で放った少女の問い掛けを、しかし少年は一瞬も待たず一言で答える。

「……いいの? わたしと一緒に行動したらけがするよ?」

「別にいい!」

「……いいの!? わたしの話聞いたら、奴ら本気で貴方を殺しにくるよ!?」

「いいつつつてんだろ! 何度も聞くな! そんでさっさと事情を言いやがれ!」

キャロルは頭を上げる。そしてすぐにユアンと視線があった。涙が籠った弱弱いブラウンの瞳と、真っ直ぐ強靱な芯が通った黒い瞳。

しばらく二人は互いの瞳を見つめ合っていたが、

ふえ、と。決壊寸前だったキャロルの瞳から、大量の涙が溢れてきた。

同時に、彼女は大声で泣いた。

泣き声は飲食店中に響いていたが、キャロルは気にしていない様子だった。ユアンに抱きつき、涙で濡れた顔を彼の懷にこすりつけ、

幼い子どものように泣いていた。

彼女は、初めてだったのかもしれない。誰かにこんな言葉を掛けてもらった事が。

その理由は、彼女がその身に余るほどの『危険』を背負って生きているから。その小さな身体ではすぐに押し潰されてしまうほどの大きな『危険』を。

だから彼女にはその『危険』と一緒に背負える仲間が必要だった。だが彼女は他人に自分の『危険』を押し付けられるような人間ではなかった。

仲間が欲しくても、一人を選ばざるを得なかった。孤独になるほか、なかったのだ。

彼女に残されたのは孤独だけだった。

もしかしたら彼女は『孤独』と言う苦しみを負けて、荒野で倒れていたユアンを助けたのかもしれない。

孤独は、一人は、とても辛い事だから。

“話し相手がほしかったんだよ”

ユアンの脳裏に少女の言葉が蘇る。

その言葉にいったい、どれだけの思いが込められていたのか、彼は知らない。

でも、

（これも何かの縁だ。最後まで付き合ってやるよ）

心の中で、何かを誓うように言ったユアンは、優しく少女を抱いた。周りの目なんて一切気にせずに。少年は少女が泣き止むまで、

何も言わずにただ抱いていた。

5 追う者

ここは『リーヴァリー』の町から南に数キロ離れた荒野。そこに一軒の小屋が建てられていた。

「やーっと、追い詰めた」

藁と小さな机しかない小屋の中に、黒いローブを羽織ってフードを被った一人の少年の声が響き渡る。

「……た、のむ。もう、やめて、くれっ」

そして、その少年の前には体重一〇〇キロ以上はあるだろう、太った大男が倒れていた。だが大男は両目を包帯で覆われていて、身体には無数の切り傷があった。その切り傷は以前誰かにつけられたものから、今さっきつけられたものまで様々だった。

「……『標的』の、護衛の特徴は、さっき説明、しただろっ。もう俺に、用は、ないはずだ。だから、これ以上は、やめてくれっ！」

血反吐を吐きながら必死に命乞いをする大男に対し、少年は、

「そいつはできねーなあ。お前は重大なルール違反をした。だからここで死ね」

「……そんな。嫌だ、俺はまだ死にたくない！」

大男はぼろぼろの身体を這い蹲らせて、少年から離れようとする。対する少年はローブの中に片手を突っ込んで、

「豚が。どこに行く気だそんな体で？ 逃げられると本気で思ってるのか？」

そして、

ドスツ、と大男の右肩から鈍い音が聞こえた。それは一本のナイフが突き刺さった音だった。

「がっ！ があああああ！」

激痛に大声を挙げて肩を押さえる大男に、少年はただ冷たい視線を向けるだけ。

「痛いかな？ 苦しいかな？ その痛みから解放されたかったら、さっさと他の逃げた奴らの居場所を吐け」

「しっ知らねーよ。俺は、目が見えねーから、奴らがどこ行ったかなんて、わかんねーよっ！」

「信じられないな。お前とデリック、それとアルデは兄弟みたいに仲が良かったじゃねーか。とくにデリックはお前らを実の弟のように慕っていた。あいつがお前を見捨てるのは考え難い」

「……そんなの、昔の話だ」

「それに、お前には『嗅ぐ』力があるだろう？ そいつを使えば奴らの居場所なんてすぐ分かるはずだ」

「……っ」

少年は大男の元上司だった。だから彼らの事はよく知っているの
だろう。大男とその周りの人間との関係を。

「まあいい。言う気も『嗅ぐ』気もないならここにくたばるんだな」

「まつ待つてくれっ！ 分かった。あいつらの、居場所を教える。
だから、殺さないでくれっ！」

立ち去ろうとする少年に、大男は縋るような声で呼び止める。

「本当か？」

振り返り、大男の真偽を確かめる少年。

「ああ。あいつらは、ここから北の所にある、山に向かった。別れ
てから、まだそんなに時間は経って、いないはずだから、多分すぐ
に、追いつける、はずだ」

途切れ途切れの言葉で、大男は必死に喋る。

「そうか」

少年はその場で大男の言ったことに対し頷き、考え込むと、

「嘘だな」

そう、即座に否定した。

「なっ!？」

「お前は賢い男だ。そして何より仲間思いでもある。デリック同様にな。どうせ時間稼ぎが目的だろう。わざと違う方向を言って俺から奴らを遠ざけようとしても考えたんだろ？」

「……っ、」

表情の固まった大男の顔を見て、少年はニヤリと歪んだ笑みを浮かべる。

「俺の勘だと、奴らは……そうだな、南東に向かったか。行けば黒海に突き当たる。船を使えば『組織』から逃げ切れる確率は格段に上がるからな」

ちくしょう、と大男の口から悔しさの籠った言葉が漏れる。

「どうやら、全て凶星のようだな」

少年は大男に嘲りの視線を向けると、

「豚の分際で俺に嘘をつくたーいい度胸だ。……肩爆せて死ね」

そう言い放った瞬間だった。

大男の右肩に刺さっていたナイフが、突如爆発した。

内部から弾け跳んだ肩・肺・胸襟、肩を押さえていた左手などが

小屋中に飛び散り、根元から引き千切られた右腕が回転しながら少年の足元に転がってきた。ナイフの破片が大男の身体のいたるところに突き刺さり、傷口からは大量の血液が溢れ出ている。

「太ってる割に、肉の弾け具合がいまいちだったな」

上半身の半分を吹き飛ばされた大男は、悲鳴もあげずに絶命した。そして、彼の顔には悔しさの涙が流れていた。仲間にも迫る危険を遠ざける事ができなかったから。仲間を救う事ができなかったから。自分の死が、無駄死になってしまったから。

「さーって、次はどうするか」

黒いローブを羽織った少年は、静かに小屋から外に出る。その際、小屋に風が吹き込んだ。風は少年の黒いローブを靡かせ、フードを頭から外していった。

少年の素顔が露になる。

黒と赤の髪の色をしていた。正確に言うなら元は黒髪だったのだろうが、毛先が血のような赤に染められている。耳には金色のピアス。瞳の色は赤っぽい黒。どこから見ても善人には見えない少年だった。

実際、彼は善人ではない。

「デリック達を追うか、それとも『標的』を抹殺するか」

少年は俯いて、しばらくその場で考え込む。そして、

「よし、決めた」

顔を上げ、次の任務に出かける。
彼の通った道には、赤色しか残らない。

6 事情

「ここなら追っ手も無暗に近づこうとは思わないだろ」

ユアンは辺りを軽く見渡しながらそう言った。

ここは『リーヴァリー』と言う町の中心にある広場。中央には大きな噴水があり、周りは木とレンガの建物で円状に覆われている。東西に伸びている町の中央通りと直結していて、南北側もちよつとした大通りと繋がっている。噴水の水が穏やかな陽の光に照らされて輝いている。

噴水の周りでイチャつくカップルや、追いかけて遊んでいる子ども達。ベンチに寝転がって昼寝をしている人や、木の陰に入って本を読んでいる人。飼い犬と一緒に散歩しているお年寄りや、他愛ない雑談をしている奥さん方。

そんな何でもない普通の日常を見て、少女は呟く。

「本当に昼間は賑やかなんだね」

夜は誰一人として外を歩いていないのに、昼間はこの賑やかさ。まるで別の町のような。

「『魔ジン』が生まれた町って以外は、他と変わらない普通の町なんだろうな」

ユアン達は広場に入り、誰も座っていないベンチを見つけると、二人揃って腰をかける。

「……いい天気だね」

「……ああ」

「雲一つないよ」

「そうだな」

「明日も晴れるといいね」

「ああ」

「いま何時だかわかる？」

「正確にはわかんねーけど多分一時二〇分ぐらいじゃね？」

「一時二〇分か。けっこう時間経ったね」

「だな」

二人は青い空を眺めながらポツポツと言葉を交わす。

「店、追い出されちゃったね」

「そりゃそうなるだろ。あんなにわんわん泣いてりゃ。むっちゃ周りの人迷惑がってたぞ」

「だってユアンが泣かすからさ」

「泣かすってなんだよ。俺は励まされたただぞ。お前が勝手に泣き出しただけだろ」

「女の子を泣かすような言葉を言ったのはユアンじゃん」

「俺は別にそんな言葉を言った覚えはないっ！」

「どさくさに紛れて抱いてきたくせに」

「先に抱きついてきたのはどこの誰だっけか？」

「鼻伸ばしながらわたしのお尻さわってきたくせに」

「伸ばしてねーし触ってねーよっ！」

いつの間にか言い合いに変わっている二人の会話。

朝食兼昼食を取った飲食店では、周りの客に迷惑だから、という理由で追い出されてしまった。だがユアンはキャロルから詳しい事情を聞かなければならなかったため、ゆっくり話せそうな場所を探して町の中を歩き回り、そして見つけたのがこの広場。

ユアンが最初に言った『ここなら追っ手も無暗に近づこうとは思わないだろ』と言うのは、この広場の前には『教会』があるからだ。『教会』とは、それぞれの宗教組織が領地内に置いてある役所的なところのこと。町に一つの割合で置いてあり、警察としても機能している。そのため指名手配されていたり、有名な犯罪組織に所属している者は近づけないところでもある。

「それじゃ、どこから話したらいい？」

キャロルはぼんやりと空を眺めているユアンに、首を傾げて聞い

てきた。

「んー、そうだな。お前が追われてる理由……、いや、お前を追っている組織のことを最初に教えてくれ」

「……わかった」

彼女にはまだ事情を話すのに抵抗があるようだった。全く関係のない人間をこれから『危険』に巻き込もうとしているのだから、当然だと言えば当然なのだろうが。

「キャロル」

「分かってるって。ちゃんと言うから」

そう言う彼女は何回、軽い深呼吸を繰り返し、

「まず、わたしを追ってる組織の名前から言うね」

彼女の言葉に無言で頷くユアン。適度な緊張感を持った二人。そしてキャロルは言う。

「その組織は『薔薇十字団』って言うんだよ」

「薔薇十字団!!?」

キャロルが言った瞬間、ユアンは思わずっ！と言った感じに大声を挙げてしまった。

「ちよっ、（ちよつとあんまり大声でその名前呼ばないでっ！ 目

の前に教会があるんだし、面倒な事になったらどうするの!？」

「（あつ、悪い。まさかそんな大組織の名前が出てくるとは思わなかったから）」

声の音量を小さくしてきたキャロルに吊られ、ユアンも小声で言葉を発する。

案の定、キャロルが言ったとおり周りにいた数人がこちらに視線を向けてきた。

しかし、ユアンがつい叫んでしまったのも無理はないかもしれない。

『薔薇十字団』と言う組織は、世界中の宗教団体と敵対している秘密結社のこと。団員メンバーのほとんどが犯罪者として指名手配されている事から、犯罪者雇用組織とも言われている。

「世界一巨大な裏組織と言われておきながら、その全容は全くと言っていいほど分かっていない、謎だらけの組織。唯一わかっているのは団員メンバーと、様々な組織に人材を派遣しているって事。一般的に知られているのはこの二つぐらいかな」

キャロルの言葉にユアンは頷く。

「でもさ俺思っただけど。あの組織ってそんな大した事やってないか？ それなのに無駄に有名だし」

「まあ組織事態はあんまり大きい事やってないよね。でもあの組織が有名な理由はそこじゃない。一番の理由は組織の団員メンバーなんだよ」

「メンバー？」

繰り返したユアンの言葉にキャロルは再び頷くと、

「ウィルア・U・ウエンスタウン、イマード・イーリヤー、キファ・フ・スイナン、グレンガー・ザースロード……。今挙げたのは全員、上位二級以上の犯罪者。最初と最後に言った人は上位一級犯罪者。」

貴方が一〇人束になってかかっても、傷一つ付けられないような化物たちだよ」

指名手配中の犯罪者には、その危険度を表す階級^{レベル}が存在する。上から一級〜五級。それぞれの級には上・中・下とさらに細かい階級がある。危険度の最低が下位五級犯罪者（術を使って窃盗や暴行事件などを起こした術者など）で、最高が上位一級犯罪者（世界レベルで凶悪な事件を起こした術者など）。

「んっ、なんだよその言い方。俺がもの凄く弱い奴みたいじゃないか」

「別にそんなムキにならないですよ。今のはただの例えだから。ちょっと盛っちゃった感もあるし」

「……ふーん」

「話を続けるけど、『薔薇十字団』には上位一級犯罪者が五人いるの。そもそも上位一級なんて世界中で二〇人もいないんだから」

「まああんなのが大勢いたらこの世界とつくに終わってるしな」

「？ 『あんなの』ってユアン、上位一級犯罪者で知り合いでもない

るの？」

「えっ！？ いや、そういう訳じゃねーけど」

「……」

不審な視線を向けてくるキャロルに、ユアンは思わず視線を反らした。すると彼女は一回溜め息を付いて、

「ま、今はそんなのどうでもいいか。それじゃ次はなに聞きたい？」

「……じゃあ、お前が追われている理由でも聞こうかな」

「わかった。でもこれはあんまり詳しくは言えないよ？」

「分かってるって」

「ならいいけど。それじゃかなり簡単に言っけど、わたしね、その組織の秘密を知ってしまったの」

「秘密？」

ユアンが聞き返すと、キャロルは『うん』と一回頷く。

「正確には組織の『計画』だけだね。でもこれ以上は言えないよ。これ以上知ったら本当に取り返しが付かない事になるから」

「一番大事なところが聞けないのかー」

「貴方がわたしを守るために、ずっと一緒にいてくれるって言うな

ら教えてあげる」

「んー、でもここまで聞いたんだからもう、いつその事全部聞いちゃおうかなーって思えなくもないんだけど」

ユアンは視線を上げてぼんやりと言った。だがキャロルは、そんな彼の言葉に、

「本当にもうダメ。今ならまだ引き返す事ができる。わたしと別れても貴方までは狙われない」

とても真剣な表情で言い返した。それを横目で見たユアンは、

「そつか。それじゃなんでお前は組織の『計画』ってのを知っちゃったんだ？」

「それは……」

そこで彼女は言葉を詰まらせた。まるで一番聞いてほしくない事を聞かれたかのように。

でも、

「話さなきゃいけないよね。これは」

それは、ユアンに言った言葉ではなかった。

まるで自分自身に言い聞かせているかのように、自分自身に暗示を掛けるように言った言葉だった。

「少し、わたしの家族の話をするね」

そう前置きした少女は再び深呼吸をし、意を決して話し出す。

「わたしの家族はわたし以外、父も母も兄も全員『魔術師』ランクの術者だった。特に母は術式の改造が得意で、術者試験を受ければ絶対に『魔道師』ランクに昇格できる実力を持ってたの」

術師階級と言うものがある。下から、

見習い術師 ↓ 魔法使い ↓ 魔法師 ↓ 魔術師 ↓ 魔導師・騎士 ↓ 魔導仙人

と言った具合だ。

魔術師は自分に合った術式を見つけた、言わばプロの術師だ。魔導師はその上で、一般的には術を他の者に教える事の出来る術師を指す。

「父も兄も母と一緒にでかなりの実力者だった。でもね、ある日突然、わたしの兄が消えたの」

「兄貴が消えた？」

ユアンが聞き返すとキャロルは続けて、

「スキルスクール術師教育学校の帰りに、突然連絡が取れなくなったの。母たちは必死に兄を探してた。でも手がかり一つ掴めなかった。誘拐されたのか、それとも自分からいなくなったのか。

兄はね、はつきり言って何を考えているか全く分からない人だった。術師としての実力はあったらしいんだけど、何か難しい事ばかり言ってる、正直わたしは怖かった。よく母たちと口喧嘩してたのも覚えてる」

「なんか、兄の話をしてるにしては、ちょっと他人行儀すぎないか？」

「しょうがないじゃん。わたし、兄とはあんまりしゃべった事ないんだもん。いつつもどこかに出かけて、帰ってきてても家ではいつも部屋に閉じこもってるし。それに、あんな人、……兄だなんて思ってないし」

「なんでだよ？ 自分のアニキだろ？」

そこで、キャロルの雰囲気が一瞬、暗くなった。

「なんで？ そんなの決まってるじゃん。わたしの兄は——」

そして暗い雰囲気は、殺気に似たものになっちゃって、

「——父と母を殺したから」

「……っ」

その言葉に、ユアンは絶句した。

彼女の声は少し荒々しかった。今までに聞いた事のない、憎しみを抱いている声。

彼女には、明らかに似合わない感情。

「それはね、ある日突然だったの」

そして少女は語り出す。暗い、暗い、過去の記憶を……。

7 少女の闇（かこ）（前書き）

キャロルが語る回です。

7 少女の闇（かこ）

その日、父は『兄を見つけた』って言って慌てて帰ってきた。

でも、父の顔は行方不明だった息子を見つけたって言うのに、全然笑っていなかった。それどころか、怯えているようにも思えた。

「本当なのあなた？ あの子が、ダニエルがどこにいるか分かったの？」

言ったのはわたしの母。

兄は半年以上、行方不明だった。父たちは仕事の合間や終わった後に兄を探していたらしいが、全く手がかりが掴めなかったようだ。だけど、その日突然『近いうちに帰る』と兄から連絡が入った。

「ああ。でも一体何を考えてるのか、あいつは……、『薔薇十字団』の団員になったらいい」

「え！？」

その言葉に母はひどく驚いていた。

父が言うには、兄から連絡がくる前に仕事の同僚の術師からその事を聞かされた、と言っていた。『薔薇十字団』のローブを羽織った兄を見た、と。

「あいつ、以前妙な奴らとつるんでいるなとは思っていたが、まさか『薔薇十字団』の連中だったなんて」

二人はひどく落ち込んでいた。その時のわたしは、まだ『薔薇十

字団』がどんな組織が知らなかったから何も思えなかったけど、今なら二人の気持ちがわかる。

そしてその日の夜、事件は起こった。

豪雨だったその日、わたしは雷が怖くて母と一緒に部屋で寝ることにした。でも、夜中にトイレに行きたくなったわたしは、母を起こして一緒に行ってもらおうよう頼み込んだ。

部屋を出て、父の書斎しよさいの前を通り過ぎようとしたわたしたちは、突然父の書斎の中から大きな物音を聞いた。

わたしは驚いて反射的に視線を母に向けたんだけど、その時の母の表情がとても怖かった事を憶えてる。殺気を放った、プロの術師の表情。

「キャロル、私の後ろに隠れてて」

そう言った母は、わたしを自分の後ろに付かせた。

そして、ゆっくりと父の書斎の扉を開けて、わたし達は、見た。見てしまった。

久しぶりに見た兄が、大剣で父の首を跳ねる、その瞬間を。

わたしにはその時の状況が理解できなかった。どうして兄が父の首を飛ばしているのが。だから悲鳴が出なかったのかもしれない。状況に頭が付いて行っていなかったのだ。

でも、母は違った。実の息子がその父を殺したにも関わらず、不自然なほどに冷静だった。

まるで、覚悟していたかのように。こうなる事が分かっていたかのように。

母は後ろを振り返り、わたしの背の高さに合わせるようにしゃが

み込むと、わたしの額に熱でも測るかのように触れた。

「キャロル、いい？ 今から言う事をよく聞いて。わたしは今、あなたの頭の中に情報を送り込んで。大切な情報を。これを近くの教会まで行って、伝えてきてほしいの。いや違う。それだけじゃだめ。頭の中の情報を引き出せる術者を探して。手遅れになる前に。わかったら、この紙を開いて中に描かれている陣に触って。そうすればあなただけはここから逃げられるから」

「えっ？ なに？ どういうこと？ お母さんはどうするの？」

「お母さんはここに残って、あなたの兄さんを止める」

そう言うつと、母は立ち上がって、兄のいる父の書斎へ入っていった。その時の母の顔は、とても悲しい顔をしていた。

母は術を発動させると同時に、兄に襲い掛かった。狂気を放ち、完全に殺す気で。

そして、外で雷が光ると同時に、

母は呆気なく、兄に切られた。

今度のわたしの反応は父の時とは違った。自分から離れていく母の後ろ姿をしっかりと見ていたわたしは、目の前で起こった現実を理解していた。

だからわたしは父の時みたいに無反応ではいらなかった。

「あつ、ああつ、あああつ！」

だからわたしは、絶叫した。

「あああああああああああああああああああああああああああああああ！」

その後、わたしの視界は真っ暗になった。そして母と父を殺されたシヨツクのあまり、正気を失って……。

気がついたら、わたしは自分が住んでいる町の教会の前で倒れていた。

わたしはその場から起き上がって、しばらく呆然と立ち尽くしていた。でもすぐに母が言っていた事を思い出して、すぐさま教会の中に飛び込んでいった。

だけど、教会の中には誰もいなかった。無残に荒らされていて、人の気配がまるでなかった。町もそれと同じだった。建物が壊されていて、炎が家を焼いていて、人がいっぱい死んでいた。

まるで、地獄に迷い込んだかのようにだった。世界中で自分しかないようだった。

でも、全部をなくした訳じゃない。
母と交わした最後の約束がある。

そしてわたしは旅に出た。

自分の頭の中にある『情報』を引き出せる術者を探すために。
母との約束を果たすために。

8 似たもの同士

周りは陽気な陽の光に包まれて、子ども達は追いかけて遊ぶことをして楽しそうに遊んでいる。

この広場はそんな、平和を絵に描いたようなところだった。

（両親を殺された。自分の目の前で。しかも殺した相手が実の兄だなんて……）

だが、広場の隅にある幾つかのベンチの内の一つに、明らかにこの場には相応しくない暗い雰囲気を出している少年と少女がいた。

「……」

二人は黙り込んでいた。話し終えたキャラルは俯いて喋らなくなり、黙って話を聞いていたユアンは未だに黙ったまま。

なのだが、ユアンの場合は黙るしかないのかもしれない。

なぜなら、キャラルが抱えている『闇』^{かこ}は、彼が思っていた以上に残酷で、深かったから。

（……くそっ）

ユアンは心の中で吐き捨てた。

（何だよそれ、ふざけんなよ。こいつ、今までこんなもんを一人で抱えて旅してたのかよ）

普通なら、心が壊れてしまってもおかしくない現実だった。生きる気力をなくし、自ら死を選んでしまっても不思議じゃない。

い。この誰もいない世界で、一人だけの世界で、殺される恐怖に怯えながら毎日ビクビク過ごすより、死んだほうがマシかもしれないから。

でも、彼女は生きる事を選んだ。自分に託された使命を果たすため、生きようとしている。

それはとても厳しい選択で、強い心を持っていなければ決してできない事だ。

(……この娘は、いったい)

だからユアンは思う。心の底から。

(なんでこんなにも、真っ直ぐなんだ)

彼にはキャラルの気持ちが少しだけ、いや、それ以上に分かる。それは、彼も彼女と同じような経験をしているから。同じような思いをした事があるから。

「……お前は、強いな」

「え？」

と、さっきまで何も喋らなかったユアンが突然言葉を放ったせいで、キャラルは少しびっくりしたらしい。ユアンは続けて、

「俺は、お前みたいにできなかった。怯える事しかできなかった。お前みたいに、前に進む事ができなかった」

彼の脳裏に、薄汚れた暗い部屋の隅で震えながら丸まっている自分の姿が一瞬過ぎる。

「……どういう、こと？」

ユアンの言葉にキャロルは怪訝な表情を浮かべる。だが、彼は優しく笑って、

「俺とお前は、似たもの同士ってこと」

キャロルの頭を撫でるだけ。

その時のユアンの笑みが悲しみに沈んでいた事は、この場にいた彼女が知らない。

9 別々に

「つかさ、お前のその話だと少し不自然なところがあるよな」

「？」

気を取り直して本題に戻る二人。

「まず一つ目が、お前の両親は術者で、しかも相当な使い手だったんだろ？」

「そうだよ。周りはみんな『魔道師』並だって言ってた」

「でもお前のアニキに呆気なく殺られたと」

「……」

そう言った途端にキャロルの表情が暗くなった。だが、ユアンはそれをあえて無視して、

「でも、それおかしくねーか？」

「……？」

「だって『魔道師』ランクの術者がそんな呆気なくやられるとは思えねーんだよな。お前のアニキも『魔道師』ランクだったとしても、勝敗は一発や二発じゃ決まらない」

同じ実力を持つ術者同士の戦闘は、一瞬で決着が付く事はほとん

どない。互いが数々の攻防を繰り返し、体力や元力マブナを削り合い、そこで出た経験の僅かな差や術式の相性、また戦闘中での術式の使いどころの判断で、初めて勝敗が決まる。

ましてやキャロルの両親（特に母親）は術者試験を受ければ『魔導師』ランク間違いなし！なんて言われていた術者だ。戦闘の経験に至っては心配ないだろう。

そんな術者が、自分の息子にあっさり殺されるとは考え難い。不意打ちを食らったのならまだ納得できるが、さっきのキャロルの話だと、彼女の母親は真正面から兄に立ち向かったと言っている。しかも術式を発動させて。

「つまり、何が言いたいのかと言うと」

ユアンは一泊置いて、言葉を放つ。

「お前の両親は、わざと殺された可能性がある」

「ッ!？」

当然、キャロルは驚く訳だが。

しかし、それは飽くまで可能性の範疇でしかない。実際にキャロルの両親や兄の実力を知っている訳でもないし、その時の現場に居合わせていた訳でもない。もしかしたら兄は半年でもの凄い成長を成し遂げ、両親を軽く越す力を身につけたのかもしれない。もしかしたら他に術者がいたのかもしれない。

「ま、根も葉もないただの仮説だがな」

ユアンは片手を振りながら、

「それと次に、どうしてお前の母親は『薔薇十字』の計画を知っていたのかって事なんだが」

「……、」

それは、この件で最大の謎と言ってもいいだろう。

『薔薇十字団』はこういう組織なのか、ほとんど分かっていない秘密主義な組織だ。そんな組織からこれからしようとしている『計画』が漏れるとは考え難い。

だが現に、情報は漏れてキャラルの頭の中に入っている。そして連中はどういう経緯で知ったのか、キャラルが『計画』を知っている事を知っている。

「多分、これにはもっと深い何かがある。俺なんかが想像もできない何か」

なぜキャラルの兄は『薔薇十字団』の団員になったのか。

なぜキャラルの両親は彼女の兄に呆気なく殺されたのか。

なぜキャラルの母親は『薔薇十字団』の計画を知っていたのか。

他にも彼女の住んでいた町が破壊されていた事や、彼女の背中にあった謎の『陣』の事など、不可解な所はかなりあるがユアンはそれら全てを口に出す気はなかった。

「いろいろ謎は多いが、まずはその頭の中にある『薔薇十字団』の『計画』を教会に伝えなきゃいけない。だが、口で言っただけじゃ誰も信じてくれない。だから頭の中の情報を引き出せる教会の術者を探しているって事か」

大体事情を理解したユアンは、ベンチから立ち上がる。

「よし。それならさっさと行こう。もしかしたらその教会に頭の中の記憶を引き出せる術者がいるかもしれないし」

ここで彼は、ふと思った。

この町に探している術者がいたら、おそらく彼女とは別れる事になるだろう。『薔薇十字団』の計画を知っている彼女の身柄は、教会が保護してくれるだろうから。そうなったらユアンは不要になる。そう思うと少し寂しさが残るが、彼女の命が掛かっているんだ。そんな自己中心的な事は言ってられない。

心のどこかで彼女との別れを決意したユアンだったが――、

「この町の教会にはわたしが探してる術者はいないよ」

彼女はそう口にした。

「は？ お前この町くんの初めてなんだろ？ 何でそんな事知ってるんだよ」

「初めて来る町でもその町にある教会のメンバーぐらいは簡単に調べられるんだよ」

マジで？ とユアンはキャロルの言葉に驚嘆する。

「ついでに言うと『マインドフェイスプレイ記憶表示』系の術式を使う術者がどこの教会にいるかもわかってたり」

「そうなのか！？ じゃあ何で早く会いに行かないんだよ」

「だって居場所知ったのつい最近だもん。これでもかなり急いでるんだから」

彼女の話だと、この町から北西に向かった先にある『ワルシャ』と言う町の教会に、目的の術を使える術者がいるらしい。

「それでね、ワルシャに向かう道中にわたしの知り合いが住んでる町があるの」

そう言ったキャロルの声が少しだけ楽しげに聞こえた。

「知り合い？」

「元は父の友達でアーウェル＝ローマーって言う人なんだけど、むかし何度か家にきてくれて遊んでくれた人なの」

「……」

この時、ユアンは少しだけ驚いていた。

彼女は既に両親を亡くしている。そして兄は『薔薇十字団』の団員。だから今の彼女には自分以外、頼れる家族や仲間、知り合いがないと彼は勝手に思い込んでいた。

しかし、家族がない事が世界中で一人だけになるとは限らない。今までずっと部屋で閉じこもっていた訳ではない彼女には、さまざまな人との出会いがあり、さまざまな人とのつながりがある。

ユアンはその事に内心ホツとしていた。彼女が完璧な孤独ではない事に。

「じゃあどうするよ？　すぐにでも会いに行くか？」

ユアンの意見にキャロルは『うーん』と考え込む。そして待つこと数秒、

「実はね、アーウェル小父さんにはもう連絡してあるんだよね」

「え？」

彼女の意外な言葉に彼はまたもや驚かされる。

「『一週間後に会いに行きます』って手紙送ったの。でも手紙送ってからすでに一週間経っちゃってるんだよね。だからここでわたしから提案があるの」

「提案？」

「役割分担するの。わたしは教会に行つてアーウェルさん宛ての手紙を書いて、それを送る。その間に貴方は旅の食料を調達するの」

「？　なんで別々に行動する必要があるんだ？　食料なんて後で一緒に買いに行けばいいじゃねーか」

「でも絶対一緒に行かなきゃならない理由もないでしょ？」

「そりゃまあそうだけど……」

「それとも貴方はわたしと買い物デートしたいの？　手を繋いで仲良くカップルみたいに」

「なっ、別にんな事言つてねーだろ！」

若干顔を赤くしながらユアンはキャロルの言葉を全力で否定した。
するとキャロルは、

「……むっ、そんなに強く否定しなくてもいいのに」

と、頬を膨らませてなぜか拗ねてしまった。だが次には、

「ま、貴方がそう言うならいいんだけどね」

何だか怒っているような感じに変わっていた。

「それじゃわたしはこれから教会に行つて手紙書いてくるから、貴方はちゃんと旅の食料二人分買つておくんだよ」

そう言い残すと、彼女はさっさと一人で教会に向かつて行く。
しばらくキャロルの背中を眺めていたユアンは、彼女が教会の中
に入っていくのを確認すると、ベンチから立ち上がった。

「何でキャロルが怒つてんのかわかんねーけど、暇になったしあ
いの言う通り、旅の食料でも買いに行きますか」

現在時刻は一時四十九分。

キャロルは教会、ユアンは町の市場へ足を運ぶ。

10 迫りくるは

ここは大勢の人が行き交い、賑わっている『リーヴァリー』の市場。新鮮な野菜や魚、肉などがあれば食器や武器などもたくさん売られている。

と、そんな市場の中を、一人の少年が歩いていた。フードを被り、薔薇の刺繍が入った黒いローブを羽織っているその少年の格好は、周りから明らかに浮いている。はずなのに、彼は不自然なほどに目立っていない。

（ブラウンの髪の色をした十二・三歳ぐらいの少女と、黒髪で東洋系の十五・六歳ぐらいの男……、か）

少年は人を探していた。知り合いではない。少女の方の顔は写真で見たことがある。名前も聞いている。だが相手の方は自分の事は全く知らないだろう。一方的に彼が追っているのだから、当たり前と言えば当たり前なのだ。

それではなぜ少年はその少女を探しているのか。それは『組織』から命令されたからだ。

その命令内容は至って簡単。

『キャロル＝マーキュリーとその周りにいる者を全て抹殺せよ』

「さて」

少年は人ごみの中で足を止めた。行き交う人々は彼に迷惑そうな視線を向けていたが、当の本人はこれまた全く気にしていない。

「どこにいやがるのか」

周りには老若男女さまざまな人がいる。人ごみの隙間に入って走り回っている子どもや、大きな声を出して客引きをしている大人。店の前で何を買おうか悩んでいる主婦や、商品の値段を値切ろうとして店の人間ともめている男など。

すると、遠くの方から一際大きい声が聞こえてきた。

正確には少年の後ろからだ。もちろん彼に掛かった声ではない。

「ゴラア！ 待ちやがれクソガキイ！ 店のもん返しやがれ！」

乱暴な口調の男の声。

どうやら店の品を子どもに盗まれたらしい。それを聞いてか、周りが少しざわつき始めている。

当然ながら少年はその事に一切興味を示していない。彼がここに来た理由は飽くまで任務を遂行するためなのだから。それにこの手の騒ぎはすぐに収まるものだ。解決するかしないかはさて置いて。

ところが、周りのざわつきは一向に収まらない。それどころか次第に大きくなっていつているような気がする。

と言うよりこちらに近づいてきている気がする。

「……」

今まで全く興味を示していなかった少年だが、さすがにこれだけ騒がれては任務に集中できないと思い、後ろを振り返り少しだけ視線を向けようとした。

だが、突然後ろから走ってきた子どもが少年を横切っせいで、またさっきと同じ方向を向いてしまう。その際、少年は走ってきた子

どもを無意識に目で追ってしまったが、すぐに人込みに消えていったので彼も同時に視線を外した。

（あの子ども、両手に何か持っていたな）

おそらくさっきの子どもが店の品を盗んでいった犯人なのだろう。周りのざわつきもさっきの子どもが通り過ぎて行った事で治まっていた。ついでに言うとなさっきの子どもの服、もう何日も洗っていない感じだったから、おそらく孤児なのだろう。

（まあ、俺には関係のない事だ）

周囲も落ち着いた事なので、少年は再び任務を続行しようと歩き出そうとした。その時、

ドンッ！ と後ろから何かが、いや誰かがぶつかってきた。

少年の体が衝撃で二歩ほど前に出た。

「――」

そして彼は無言のままゆっくりと後ろを振り返る。

そこには白いＴシャツを着た筋肉質な男が立っていた。身長は一八〇センチ前後で、厳つい顔つきのおっさんだった。着ている白いＴシャツは黄ばんでいてピッチリ体に張っている。この男がさっきの子どもを追っているのだろう。

「ってーな。おいガキ！ そんなところで突っ立ってんじゃねーぞ

「！」

「……………」

自分からぶつかっておきながら逆ギレし出す筋肉質な男。再び子どもを追いかけるため、その男は少年を片手で押しのけ前に進もうとする。

少年の体が後ろにさがる。男の足が前に出ようとする。

すると不意に、何かが切れる音が回りに響いた。それは比喻でもあり、そのままの意味でもある。

少年は片手をロープの中に突っ込んで、子どもを追いかけるため、一歩前に踏み出そうとしている筋肉質な男。

だが男がその足を踏み出す事はなかった。

何故なら、

前に踏み出すはずだった男の左脚と左腕が、空中で赤いラインを引きながら舞っていたからだ。

「……………は？」

間拔けた声が人込みに響く。

男の視界には宙を舞っている人間の片腕、片脚が映っている。だがそれが自分のものだと言う事は、このときはまだ気付いていないのだろう。

太股の半分から下をなくした左脚に体重を移していたせいで、男は体勢を崩す。しかしこれも、どうして自分が体勢を崩しているの

か本人は分かっているようだ。

倒れかける自分の体を男は左手で支えようとする。それは人間な
ら当たり前な動作で、でも、この時、自分の左腕に視線を向けた事
で、ようやく自分の身に起きた異変に気付いた。

だが、その時にはすでに遅く、

太股の半分から下をなくした左脚が、地面についたと同時に、
ぐしゃり、と生々しい音を発しながら左脚から激痛が走った。

「がつ！」

それだけではない。左脚の痛みを引き金に、左腕からも例えよう
もない激痛が男の体を駆け巡る。

シヨック死レベルの激痛に男は地面に倒れ込む。

「がつあつ、がああああああああああああああああああああ
あああああああああああああああああああああああああああ
ああ！」

絶叫した。

だが叫んだところで痛みは引かない。血は流れ、男の命は確実に
薄れていく。

平和だった市場の雰囲気が一変した。

周りにいた人間は目の前で流れ出す大量の赤い液体を前に、しば
らく呆然としていた。だが宙を舞っていた片腕、片脚が地面に落ち
ると同時に、悲鳴を上げ、我先にとその場から逃げ出していく。

そのどさくさに紛れて、少年はその場から離れていった。

（やっべー。思わずやっちゃったよ）

少年は右手に隠し持っているナイフをローブの中に仕舞い込む。

（さっきのは多分誰にも見られてねーはず）

常人では決して目で追うことができない早業。音も無く、命を狩る暗殺の技術。

（でも確実に教会の連中は駆けつけてくる。見つかると面倒な事になるし念のため場所を移動するか）

一秒にも満たない一瞬の時間で大人の片腕と片脚を切り落とした少年は、小走りで現場から遠ざかろうとした。

その時、不意に少年の視界の隅に一つの人影が映った。

周りにも大勢の人間がいるにも関わらず、その人影だけ意識が向いた。少年は思わず足を止め、視線をその人影に向ける。

二〇メートルぐらい先にいるそれは、十五・六歳ぐらいの少年だった。黒い髪に東洋系の顔立ちの、（ここらでは珍しいが）どこにでも居そうな普通の少年だった。

しかし、黒いローブで身を包んだ少年には、そうは映っていなかった。

（……まさか）

それはついさっき逃亡を図ろうとして彼に殺された大男から聞いた、標的特徴と合致していたから。

（東洋の人間はここらへんじゃ珍しい。そんなにいるもんじゃねえ）

つまり、おそらくあれが標的の一人。

大男が言っていた護衛の男。

「さっそく、見つけた」

周りは筋肉質な男が倒れている場所から、少しでも早く遠ざかうとする人間と、騒ぎを聞きつけてきた野次馬とでこった返していた。そんな中をローブを羽織った少年は立ち尽くしている。

対する黒髪で東洋系の顔立ちの少年は野次馬の方らしく、その場から離れるどころか現場に近づこうとしている。

少年は標的を見据え、動き出す。

人の流れを慎重に掻き分け、少しずつ近づいていく。そして標的との距離が一〇メートルを切ったところで、不意に標的が進むのをやめ方向を変えて動き出した。

正確に言つと少年から距離を取る形で、標的は離れていく。

（くそっ！ 逃がしてたまるか！）

今までは周りの人間にはそこまで迷惑をかけずに少年は進んでいた。変に目だつてしまうから。

だが、今となつてはそんな気遣いをしている訳にはいかない。強引に人の流れを引き裂き、標的に近づいていく。ところが二人の少年の距離は離れていくばかり。

（——ッ）

すると、標的である東洋人の少年が人気のない建物の隙間に入つていった。それを確認した黒いローブの少年は、

（おうおう、自分から狩られやすい場所に移動するとは）

さっきまでの焦り顔とは打って変わって、

ニヤリ、と邪悪な笑みを浮かべている。

彼は人の流れの中を強引に進むのをやめ、ゆっくりと歩く事にした。

「焦っちゃいけねえ」

ポツリと少年の口から言葉が漏れる。

幸い、標的の少年は建物の隙間の中で動かない。
そして、少年の笑みは止まらない。

「こういうのは楽しんでこそ、だろ？」

まるで自分の狩心に語りかけるように言った少年は、ゆっくりと、
だが確実に標的を狩るため、その足を進める。

1 襲撃者

「……暑い」

両手に買い物袋を持ったユアンは、建物と建物の隙間にある陽の光があまり届かない小道の入り口付近で、立ったまま壁に凭れかかっていた。

「つーか、何だったんだ？ さっきの騒ぎは」

先ほど、市場で騒ぎが起きた。彼は騒ぎの起こった現場の近くにはいたが、現場そのものに居合わせた訳ではないので、一体どんな騒ぎだったのかは知らない。気になったので近づこうとしたのだが、大勢の人の流れに遮られ現場には行く事ができなかった。

何より、無理をして現場に行く必要もなかったため、彼は人込みを避けるため一先ず人気のないこの小道に入り込んだのだ。

「人込みは苦手だ。人の熱で暑苦しいんだよ」

右手の買い物袋を地面に置いて、服の首元に人差し指を引っ掛けてパタパタ扇ぐユアン。

しばらくの間、そこではーっとしていたユアンだったが、買い物を再開するため地面に置いた袋を手に取り、小道を出ようとした。

「あと旅に必要なものは、っと」

そう言ったユアンだが、しかし彼がこの薄暗い小道から出る事はなかった。

妨害が入ったからだ。

風を切るような音と共に、後ろからユアンの足元に何かが刺さった。当然彼は足元に視線を向ける訳で、

（……ナイフ？）

それはレストランなどでいつもフォークやスプーンの隣に置いてあるあのナイフ、ではなく、正真正明人を殺す為だけに作られた鋭い短剣^{ナイフ}だった。石畳の地面にしっかりと突き刺さっている辺り、切れ味は相当なものだろう。

（何でこんな物が後ろから……）

考えて、彼は警戒した。すぐに後ろを振り返ろうとしたが、その前にそれは起こった。

突如、足元の地面に刺さったナイフが起爆した。

「——ッ！？」

何かを叫ぶ暇もなかった。

慌てて両手を顔の前で組んだユアンだったが、そんな程度ではそれを防ぐ事はできない。

爆炎は上がらなかった。

ところが、その代わりと言うように耳を割るような甲高い爆音と、普通の爆弾の数倍はある異常な爆風がユアンを襲った。

その場から五メートル以上吹き飛ばされた彼は、地面に背中を打

った衝撃で肺から酸素を根こそぎ吐き出す。さらに至近距離からまともに爆音を聞いたせいで、尾を引くような耳鳴りが鼓膜を支配している。

「……ッ」

そして、それ以上に体の至るところから鋭い痛みが走っていた。両腕を顔の前で組んだお陰で視界だけは潰れていなかったから、彼はすぐに自分の体に視線を向けたのだが、

「……くそッ」

思わず毒づいていた。しかし一時的に爆音で聴覚を潰されているユアンには、自分の放った言葉がしっかり発音されているのかどうかもわからない。

彼は体中に無数の切り傷や刺し傷を負っていた。理由はおそらくナイフが爆発した際に、刃の破片が飛び散りユアンに襲いかかってきたのだろう。一つ一つの傷の規模は小さいものの、未だに刃の破片が所々刺さっていて、鋭い痛みが体中を巡っている。

「ぐっ……」

なんとか体を起き上がらせたユアンは、汚い地面に座ったまま近くの壁に凭れかかる。周りを軽く見渡すと爆発で袋が破けたのか、さっきユアンが買ってきた旅の食糧や道具などが地面に散らばっている。

「……あーあ、最悪だ」

それを見てうつろな声を出すユアン。

視線を自分の体に戻すと一本ずつ体に刺さった刃の破片を抜いていく。そして彼は作業を続けながら考える。

（こいつは、もしかして『薔薇十字団』の仕業か？ だとすると、キヤロルが危ねえ）

痛っ、と破片を抜くたびに痛みが走る。

（でも、よくよく考えれば今あいつは教会の中にいるんだよな。じゃあ俺なんかと一緒にいるより遥かに安全じゃね？ それでも相手はあの『薔薇十字団』。教会だろうがなんだろうが構わず突っ込んでくるかもしれねーし……）

迎えに行くべきか、行くべきではないか、と悩んでいる内にユアンは体中の破片をある程度抜き終えた。

（ま、考えるのは後にして今はここから離れよう）

そう思ったユアンだったか、そこで違和感に気付いた。

なぜ、敵は襲ってこないのか。

今までユアンが倒れている間にいくらでも攻撃を仕掛けるチャンスはあったはずだ。なのにどうして何もしてこないのか。
だが、それを深く考える暇はなかった。

「敵前でゆっくり体の破片取りとは、随分と余裕だな」

今まで耳鳴りに支配されていた聴覚が機能を取り戻しつつあるのか、突然聞こえてきた少年の声に、ユアンは対応できなかった。

そして同時に、

ドスッ！ と鈍い音と共に鼻を中心とする形で顔全体に衝撃が走った。

それが顔面を蹴られた事だと認識したのはその一瞬後の事で。

前からの衝撃で後頭部を壁に叩きつけ、ユアンの意識が一瞬飛びかける。

「があ——ッ」

悲鳴がうまく上がらない。喉のところでつかえたみたいになっている。頭を打った衝撃で脳を揺さぶられ、視界の焦点が合わず、思考がうまく働かない。

「どーだった？ 俺の特性ノイズボマーナイフ（今命名）は。かなり効いただろ」

顔面と後頭部に鈍い痛みを感じる中、ユアンはグラつく思考でなんとか襲撃者の声を聞き取り、襲撃者本人に視線を向ける。

歪む視界に映ったのは、頭にフードを被り黒いローブを羽織っている少年（？）だった。フードのせいで顔つきまではわからないが、声のトーンから自分と歳の近い男だとユアンは判断する。ただその少年は、片手で頭を押さえながら何だか苦しそうにしていた。

「っ痛ー、でもあんま使い物にはなんねーな。離れてたこっちにまで音来たぞ。まだ耳鳴りがおさまらねーし」

どうやら、襲撃者の少年もさっきの爆弾ナイフのダメージを受けているようだった。

（こいつ、俺が破片取ってる間に襲ってこなかったのは、襲わなかったんじゃないかって、襲いにいけなかったのか？ 自分の攻撃を自分にも喰らっちゃったせいで）

ドジっ子かよ、とツツコミを入れられる程、まだ彼の思考は回復していない。

「やっぱりお遊びで創った術式を実戦で使うもんじゃねーな。何が起こるかわかったもんじゃねー。相手が雑魚じゃなかったら結構まずい状況になってたかもな」

ユアンは襲撃者の言葉に齒軋りする。

（クソッ、不意打ち掛けといて何が雑魚だ。真正面からやってたためーなんぞ一発KOだくそったれっ）

そんな負け惜しみを思ったところで状況は全く変わらない。

「さて、ここであーを殺してもいいんだが、それじゃあ『本命』がどこにいるかわからねー。拷問して無理やり聞き出すって手もあるんだが、俺の場合すぐ殺っちまうからダメだ。だからためーは餌として使わせてもらっぜ」

ニヤリ、と邪悪な笑みを浮かべる黒いローブを羽織った襲撃者の少年。

（……餌、だと？）

襲撃者の言葉に不安を抱かずにはいられないユアン。

だが、彼の体は既に相当なダメージを負っている。歩くのが精一杯と言うこの状態で、とてもこの襲撃者から逃げられるとは思えない。でもここで捕まる訳にもいかない。もし捕まったら襲撃者の言うとおり、キャロルを誘き寄せる『餌』になってしまうから。彼女を守るはずの自分が、彼女を危険な場所に引き寄せる足掛かりとなってしまうから。

だから、ここでダウンしている訳にはいかない。

（捕まる訳には……、いかない！）

拳を硬く握り締めたユアンは重たい体を無理やり動かし、襲撃者に襲い掛かるうとした。対する襲撃者の少年は、『耳鳴りうぜー』と呟きながらユアンから視線を外している。

（チャンスだ！ 今だったらやれる！）

だが、硬く握り締められた彼の拳が襲撃者に当たる事はなかった。

「ナメてんじゃねーぞ、雑魚が」

ドッ！ と、無感情な言葉と共に襲撃者が放った一発の膝蹴りが、ユアンの鳩尾に直撃した。

「ぐ、ぶっ！」

肺から酸素が搾り出される感覚がした。襲撃者の膝が鳩の深くに抉りこむ感覚がした。

「そんなにがつつくなよ。楽しく行こーぜ？　楽しくよ」

襲撃者のあざ笑うような声は、しかしユアンには届かない。前からの衝撃で今度は壁に背中をぶつけたユアンは、ズルズルと背中の服を壁に擦り付けながらゆっくり地面にしゃがみこむ。

（ちく、しょう……）

視界が眩み、その言葉を思い浮かべたのが最後だった。

そして今度こそ、確実にユアンの意識は飛んだ。

1 襲撃者（後書き）

第三章いきなりの急展開です！

2 不安

教会内は騒がしかった。

「通り魔事件の次は爆発事件！？ 一体どうなっているんだ！」

神父らしき男が部下の報告を受けて昏倒しそうになっている。

アーウェル「ローマー宛ての手紙を書き終えたキャロルは、受付に手紙の配送を頼みにいつていた。

しかし、

「すいません、お客様。ただいま本教会はこの通り立て込んでおりますので、配送の受付は一時中止となっております。しばらく経ったらまたおこしく下さい」

と言う受付お姉さんの丁寧なお断りのせいで、手紙を送れなかった。

「もータイミング悪すぎだよ」

ぐだー、と教会の隅に並べてある丸いテーブルに、気だるい声を放って突っ伏せているキャロル。

「こんな事になるんだったらあの人と別行動なんて取るんじゃないかなった」

はあ、と溜め息を付いた彼女は、どこで購入してきたのか、紙コップに入ったオレンジジュースをストローで飲みはじめる。

「とゆーか何で教会の中はこんなに騒がしいんだろ？ さっきまでは全然静かだったのに」

ユアンと別れてから教会の外に出ていないキャロルが、外で起きた騒ぎの事を知らなくても無理はないだろう。

「何か通り魔とか爆発とか言ってたけど」

大きな事件でも起きたのかな？ と思ったキャロルは、暇なので近くを通りかかった教会の人間に聞いてみる事にした。

「通り魔事件と爆発事件の事ですか？ どちらともまだ詳しい事は分かっていないんですけど……」

突然話し掛けられた事にびっくりしたのか、それともただ弱気なだけなのか、黒い修道服を着た教会のシスターは困ったような表情をしている。だが、弱気な性格でもなければ、突然話し掛けられても大抵はすぐ受け答えできる社交的な少女キャロルは、そんなシスターの動揺などお構いなしに聞き続ける。

「詳細とかはいいから、大雑把に教えて」

ぶつちやけ彼女が聞いてきているそれは建前で、本音は『暇だから話し相手になって』なのだった。

はあ、と困り顔のままシスターは話し出す。

「先に起きたのが通り魔事件の方で内容は、『店の品物を盗んでいった子どもをその店の店主が追いかけていたら、突然その店主の片腕・片脚が切り落とされた』って事です。当時、現場にはたくさんの方がいたにも関わらず、目撃者がいない不可解な事件だって私の

上司が言っていました」

「何それ？ 迷宮入りでもしそんな事件なの？」

「いや、そこまではないと思いますよ。おそらく何らかの『術』を使った事件だろうから、その場の残存元力^{マグナ}を調べれば犯人を見つける事ができると言っていました」

ふーん、と自分から聞いて興味なさそうな相槌を打ったキヤロル。

シスターは続けて、

「そのすぐ後に、今度は爆発事件が起こったそうです。現場は通り魔事件の現場からそんなに離れていない、三階建ての建物に挟まれた小道で、その内容が、『小道の中が突然爆発した』との事です」

「そのまんまだし」

「……はい、そのまんまですね」

なぜか申し訳なさそうにしているシスターだが、彼女の話はまだ終わっていないらしく、キヤロルは紙コップに入ったオレンジジュースをストローで飲みながら、話を聞く。

「それで、その爆発のすぐ後に現場となった小道から、黒いローブを羽織った少年が若い男の東洋人を肩に担いで出てきたのを、近くにいた主婦たちが複数目撃しているらしいんです」

（若い男の東洋人？）

キャロルはシスターの放った言葉を反芻して、

ぶべツ！　と思わず口に含んだオレンジジュースを吹き出した。

そのまま咳き込んでいたが、彼女は咳きが治まるのを待たずに無理に話そうとする。

「ちよつ、え！？　若い男の東洋人！？　黒いローブを羽織った少年！？」

「……あの、少し落ち着いてください」

ゲホツゴホツ！　と咽ているキャロルをシスターは優しく背中を摩って落ち着かせる。その甲斐あってか、彼女は数回深呼吸をしようやく落ち着きを見せる。

もう大丈夫だから、と片手で制したキャロルはシスターに話しの続きを要請した。

「えっと、黒いローブの少年の方はフードを被っていたらしく、素顔までは分からなかったらしいですけど、その少年の肩に担がれていた東洋人はぐったりしていて、体中血だらけだったそうです」

キャロルはゴクリと唾を飲み込む。そして今までの態度とは打って変わって慎重な面持ちになると、シスターに問う。

「それで、その黒髪の東洋人って言うのはもしかして……、十五・六歳ぐらいの少年だったりする？」

その問いにシスターは軽く驚いた表情になり、

「よく分かりましたね。もしかして探偵さんだったりするんですか？」

「いや、そう言う訳じゃないんだけど……」

キャロルは言い淀んだ。

（もしかして、あの人がったりするの？）

冷たい汗が頬を伝うのを感じながら、彼女は再び質問する。

「それじゃあ、その事件が起きた現場って……」

「市場ですよ。この町で一番大きな。って言っても今日は一ヶ所だけしかやっていませんけどね。もしかして現場の近くに知り合いでもいたんですか？」

シスターの答えを聞いたキャロルは、呆然としていた。

（……まさか）

嫌な予感が彼女の脳裏を過ぎる。

（まさか！）

考える前に勢いよく椅子から立ち上がったキャロルは、走って教会の出口に向かう。背後からさっきのシスターの呼び止める声が聞こえたが、彼女は無視して教会の中を走る。

（……うそ、うそだよそんなの！ 絶対ないよそんなの！）

願いにも似た思いをキャロルは心の中で叫んでいる。

（きっと、人違いだよ。きっとあの人じゃないよ……）

そう思ったかった。でもここで東洋人は珍しい。そう何人ものとは思えない。

だから、嫌な予感が浮かんでくる。

「……ッ！」

教会を出たキャロルは走る。嫌な想像をかき消すように。自分の早とちりだったと思えるように。

3 連行

そこは『リーヴァリー』の北西入り口。

大勢の商人が行き交うその入り口に、一人の男が立っていた。

「やっと、着いたか」

男は三〇歳過ぎのおっさんだった。背は高く、黒く短い髪に赤い瞳、頬に大きな切り傷を負っている。体つきはよく、小さなバツクを右肩に担いでいた。服装はグレーのジーンズに青いＴシャツなのだが、かなり汚れている。そのためか、彼はあまり周囲の人間に良い印象を与えていなかった。

「途中、道に迷うわ砂嵐に巻き込まれるわで散々な旅路だったが、無事着いて何よりだな」

砂嵐に巻き込まれても生きていた男は、一人事を言いながら周りを軽く見渡す。

「さて、彼女はどこにいるのか」

そして前に視線を向けると、町に一步踏み入れた。すると、

「ちょっといいですか？」

隣から黒い修道服を着た神父に呼び止められた。

この町、と言うよりこの世界では、神父などの聖職者は警官の役目も果たしている。つまりこれは警官に呼び止められた事と同じ状況で、それは何かしらの疑いが掛けられていると言う事で……。

「……」

男はリアクションに迷って困って固まって動かなくなった。

「……あの、聞いていますか？」

神父は男に訝しげな視線を向けている。固まっていた男は何とか冷静さを取り戻し、

「あつ、はい！ 全然聞いてますっ！」

平静を保とうとする。だがその行為が逆に怪しい感じを醸し出している事をまだ本人は気付いていない。神父の視線はどんどん悪くなっていく。

（ここで変に焦っちゃダメだ！ 俺は別に何も悪い事はやってねーんだから捕まる理由もない！）

「はあ、それなら良いんですけど」

神父は相変わらず怪訝な視線を向けている。

「それで、何か御用でしょうか？」

「ああはい、ちょっと一緒にその教会まで来てもらえますか？」

「……」

現代語に翻訳すると『ちよつと署まで来てもらえますか？』にな

る。

つまり、

「いきなり連行かよ！」

と、言葉に出すわけにはいかなかったので心の中で叫んだ男。

（理由もないのにいきなり捕まっちゃったよ！ 着いて早々意味わかんない疑いかけられちゃったよ！）

そして男は教会きうしに連れて行かれた。

3 連行（後書き）

とあるおっさんの話です。

4 知らないこと

人が多く集まっていたのは『リーヴアリー』の市場付近にある、三階建ての建物と建物に挟まれた狭い小道だった。だが、一応そこは事件現場なので人だかりはその周りにできている。

と、そんな野次馬達の中を掻き分けて必死に現場に近づこうとしている少女が一人。

キャロルだ。

彼女の年齢は十二・三歳ぐらいだ。よって背も高くない。周りは皆彼女より背の高い大人ばかりで彼女は丈の長い草原を掻き分けるように進んでいた。

「……ここだ」

そう言ったキャロルは、足を止めた。彼女は今、爆発事件が起こった現場の前にいる。理由はある事を確かめるためだ。事件の現場となった小道の入り口には、『Keep out』と記された黄色いテープで塞がれており、その前を複数の修道士が警備している。

だが、今の彼女の視界にはそんなものは映っていない。

映っているのは現場の状態だった。

簡単に言くと、たくさん物が転がっていた。それは食べ物もあれば食器などの家具や服などの日用品もある。

キャロルはユアンが何を買ったのか知らない。だからそれがユアンの物だと言う確証もない。最近知り合ったばかりだから、どういう買い物の仕方をするのかも分からなければ、買ってくる品の特徴も分からない。

つまり、キャロルはユアンの事を何も知らないのだ。

（やっぱり、本当に、一緒に買い物、行けばよかった）

知らない事を、こんなにも辛く思った事はない。

（あの人は、人のことばかり聞いてきて自分のことは何も話してくれない。わたしが聞かなかったからってのもあるけど……）

いや、と彼女は首を横に振り、

（わたしが聞かなかったから、だよな。わたしがいろいろ聞いていれば、あの人のことをもつと知ろうとしていれば……）

この事件とあの人は関係ないと分かったのに。

キヤロルは小さな掌で作られた小さな拳に力を込めて、齒軋りした。

（あの人は絶対に関係ない。それを証明するにはあの人を探し出さなくちゃならない）

現在の時間は二時二五分。

市場の最盛期だ。

特に今日の市場はいつもより人も人が多いらしく、殺人事件や爆発事件があつたのにも関わらず人が減った気配はない。さらに増えたと言っても過言じゃない。

（ここじゃあ東洋系の顔立ちの人は目立つから、聞き込んでいけば必ず見つけられるはず！）

もつとも、それは爆発事件の被害者でなかった場合だが。
彼女はそれを決して信じていない。

（必ず、あの人はわたしが見つけ出してみせる！）

5 誓い

ぼんやりと、人の話し声が聞こえる。

「う……」

頭と体に疼くような痛みが走る。

目が覚めたら見覚えがない建物の中で転がっていた。建物と言っても屋根が半分ほどしかなく、レンガで造られた壁と柱だけの古びた廃墟だ。広さは学校の体育館ほどで、入り口が左右に複数ある。だがどれも扉などではなく、ただの囲いと化していた。

（ここは……？）

一種の記憶障害なのか、自分がどうしてこんなところで眠っていたのか、彼は覚えていない。その事について考えようとしたユアンだが、そこで気付いた。

自分の手足が、動けないよう縛られている事に。

そして同時に思い出した。自分の身に起きた全ての事を。

（……くそ）

『拉致』と言う言葉が頭の中に思い浮かぶ。

（今は、何時だ？）

彼は首を動かして周りを見渡す。

汚らしい廃墟には物などはなく、半分しかない天井からは夕日のような紅い光が差し込んでくる。

（つてもしかして、もう夕方なのか！？）

ユアンが襲撃され捕まったのはおそらく午後二時過ぎの事だろう。そして今の時期、陽が翳り出す時間帯は午後五時から六時ぐらい。

（三時間も気を失ってたって訳か）

キャロルとは大雑把だが夕方ぐらいに、ホテルの前で合流する事になっている。早く行かなければ彼女に余計な心配をさせてしまう。ユアンは腰の後ろで縛られている両手首を動かしてロープから抜け出そうとするが、全く意味を成していない。相当強く縛られているのか手首に痛みすら感じる。足首の方も手首と同じだった。

と、何とかここから抜け出そうとしているユアンの耳に、左側の一番近い入り口から再び人の話し声が聞こえた。声のトーンから男だろう。

「まったく、ラージーさんにも困ったもんだ。餌だかなんだかしらねーが、俺たちにあんなガキの見張りを言いつけるなんて」

「全くだ。あんなガキ、さっさと殺しちゃえばいいのによお。『二人同時に殺ったほうが面白い』とかなんとか言ってるさあ」

「あの人のドSっぷりにはホント鳥肌もんだよな。絶対すぐには殺さねーぞ」

「なんか素直に同情するよ」

「おいおい、変な気は起こすなよ」

「起こすかバカ」

そんなような声を聞いたユアンは、

（敵は二人か。こっちに向かってきているな）

状況を分析し、行動に出る。

彼は両手両足をロープで縛られている。そのロープは普通のロープではなく、何かしらの術が掛かっているようだった。

（どうせ元力マグナの循環を阻害するタイプのもんだろ。無理に術を発動させれば力が塞ぎ止められて体が破裂するってお決まりのな。でも、俺にそれは通用しないんだな、これが）

汚い地面に横たわっているユアンは両の掌を拳に変えて、目を閉じる。そして彼が息を吸い、吐き出し、また息を吸った瞬間、

両手両足を縛っていたロープが弾け飛んだ。

もしそれを他の人間が見ていたならば、必ず驚いているだろう。

理解できないだろう。

なぜなら彼は『術』を使っていないから。

（うまくいったな）

手足が解放されたユアンがその場にしゃがみこむのと、数ある廃墟の入り口の一つから黒いロープを羽織った青い髪の男と黒い髪の男が、話しながら入ってくるのはほぼ同時だった。

（奴らはまだ気付いていない。やるなら今！）

決意を固め、戦闘の準備を開始する。

大気が不自然に蠢いた。するとユアンを中心とするように、回りに溜まっていた砂や埃などが突然発生した風に巻き上げられ、渦の形に変わっていく。その渦は最初、半径二メートルほどもあったが次第に小さくなっていき、ユアンの両足に巻きついた。

それは例えるなら風のプーツ。

一緒に渦を巻いていた砂や埃などは一切取り除かれていて、透明な、しかし視界で捉えられるほどに圧縮された風の渦。

そして会話をしていた男達だったが、青い髪の男が、ユアンがロープから解放されている事に気付き、

「おい！ あれやバイんじゃねーか！？」

その言葉に残るもう一方の男もユアンに視線を向けて、

「なっなんであいつロープから抜け出してんだよ！」

かなり驚いていたがもう遅い。

ダンッ！ と地面を蹴り飛ばして前に飛んだユアンは、そのまま真っ直ぐに男達の元に向かう。

そのスピードは尋常ではなかった。男達との距離は二〇メートル以上もあるのに関わらず、一切地面に足を着かずに、弾丸のような速さで向かって行く。

そんな高速的な状態の中、ユアンは両手を広げて、青い髪の男は顔を覆うように両腕をクロスさせ、黒髪の男は突っ立ったまま。

そしてユアンは、そのまま二人の男の間に入り、首元に腕の内側部分を打ち当てた。

プロレス技のラリアットだ。

鈍い音が聞こえた。

「が——ッ！」

「ぐ、ぶ——ッ！」

合計四本の足が地面から離れると同時に、二人の男は真後ろ（ユアンから見たら前）に吹っ飛んでいく。構えが取れなかった黒い髪の男は地面の上を、砂ぼこりを立てながら転がっていき、構えを取った青い髪の男は黒い髪の男ほど派手には転がっていかなかった。黒い髪の男は完全に気を失い、青い髪の男は体を起き上がらせようとす。だが、その前にユアンが胸を踏みつけて、背中を地面に叩きつける。

「ぐっあ、てってめえ……！」

男はユアンを睨み付けているが、彼は全く取り合わない。ユアンは男に問う。

「俺をここに連れてきた男はどこだ？」

「……言つと、思つか？」

「言わなきゃ殺す。と言ったら？」

「じゃあ殺せよ。俺達はいつでも死ぬ覚悟はできてる」

「ご立派な誠心だな」

「覚悟してなきゃやっていけない世界なんだね」

「……そうかい」

苦い声で言ったユアンは、胸を押さえつけている足でそのまま男の顎を蹴り飛ばした。大きく上を向いた男が動かなくなったのを確認すると、自分の周囲を見渡す。

周りにはユアンが倒れていた廃墟の他に、同じような古びた建物がたくさん並んでいた。どうやらここは町だったようだ。地平線に沈みかけている夕日に照らされて、どこか神秘的な雰囲気を感じ出している。

だがそれに見惚れていられるほど、今のユアンに余裕はない。

「くそつ、ここどこだ？ 町には近いんだろうな」

先ほど周囲を見渡したが他に人の気配などはなく、彼を攫った男も今はいないようだった。

「ここが『薔薇十字団』の拠点ってことなら、ここで待ち伏せていればあいつは来る」

だが、その前にキャロルと合流しなければならぬ。

「きつとまだあいつは捕まってねーはずだ」

そう思う根拠は『薔薇十字団』の一時的な拠点である、この廃

墟の人の少なさを見れば分かる。もし捕まっていればここは奴らで埋め尽くされているだろうから。それ以前にそうなっていれば、自分は今もう天使に連れられて天国に行っている。

「あのクソ野郎、何が『二人同時に殺ったほうが面白い』だ。つまらねー事考えやがって」

ユアンにはあの襲撃者が何を考えているのか想像がつく。

（どうせ俺がキャロルのどっちかを先に殺して、残った一方が泣き叫んでいるところを見て悦に浸ろうって言う、胸クソ悪いことでも考えてんだろうなあ。あの野郎は）

そういう事を考える人間かどうかは、相手の目を見れば分かる。と言つかあの襲撃者はどう見てもそんな人間だ。

「絶対に、殺らせねえ」

ユアンは荒野の向こうに小さく見える、一つの町を睨み付ける。ここから町へは三キロ以上あるだろう。だが、そんなものは関係ない。そんな事ではユアンの足は止まらない。

彼は誓う。

「必ず、守ってみせる」

自分の心に。守るべきモノに。

6 審問室

「だから俺は違つて！ 今来たばかりなんだって！」

ここは『リーヴァリー』の教会。その中にある審問室と言う所。どつという事をする部屋なのは、名前の通りだ。

「はいはいそれは何度も聞いた」

部屋の中には机一つとそれを挟むように椅子が二つ置かれている。とても殺風景な部屋で柵が取り付けてある窓が一つと、その反対側に入りの扉が一つだけ。

黒い修道服を着た神父は扉側の席に座り、その後ろに同じ黒い修道服を着たシスターが立っている。窓側の席には黒い髪に赤い瞳、頬には大きな切り傷を持ち、薄汚れたグレーのジーンズに青いＴシャツを着た三〇代過ぎの男が座っている。

「じゃあ何でさっさと解放してくれないんだ！」

「だからそれもさっきから説明しているように、あんたの身元を確認するまで解放できないんですって」

神父は呆れたような口調で言う。

「がー！ こんな事しとる暇なんてねーのに！ 何で捕まらなきゃなんねーかな」

「だからそれは――」

「あーはいはい分かってますって、言わずとも聞きましたからそれも何度も」

この町は現在、厳重警戒態勢を取っている。

理由は昼過ぎに市場の真ん中で起こった殺人事件と爆発事件が原因。教会の聖職者は皆、事件解決または事件の再発防止のため、調査及び警備に狩り出されていた。そのため、町の住人ではない『不審』な人物はこうして連行され、身元を調査されるのだ。

「まったく、何で俺が不審に思われるんだよ」

「それは自分の格好を見てから言ってください」

溜め息を付いた神父は後ろに立っていたシスターに何やら書類を渡している。

それを見ていた男は一見落ち着いているように見えるが、内心かなり焦っていた。理由は彼がこの町に来た事と関係している。

（ちっ、なんつータイミングの悪さだ）

神父から視線を反らし、男は齒軋りした。

（悪すぎて嫌な予感しかしねーぞ）

7 焦り

時刻は既に午後六時を回っていた。

太陽は地平線の向こうに沈み、闇が町を飲み込み始める。

「ちくしょう！ いねえ」

ユアンはホテルのロビーにいた。だが明かりが灯り、戸が全開だったにも関わらず、中には誰もいなかった。

「あのじじい、こんな時にどこいつてんだよ！」

落ち着きがなくなっているユアンは、荒い足取りでホテルの三階——昨日ユアンとキャロルが借りた部屋に向かう。そして勢いよく扉を開け放ったユアンだったが、

「くそっ」

そう吐き捨てただけだった。

部屋の中もロビー同様、誰もいなかった。端っこに自分とキャロルの鞆が置かれているが、触られた形跡はない。それは昼食を食べに行ってから、誰もこの部屋に入ってきていない事を意味していた。その後も他の部屋や風呂場など、様々な場所を探し回った。しかし結果はどれも同じで、誰一人として見つける事ができなかった。

「まだ、帰って来ていない」

その事実、ユアンの焦りは増すばかり。

ホテルの外に出ると、町の中央へと進路を取る。

「後は、教会と広場だけ」

拳を握り締めて、彼は再び走り出す。

8 力ある者

審問室と書かれた部屋の中で待つこと約四時間。

頬に大きな切り傷を持ち、黒髪で青いＴシャツの男は、ようやくそこから解放された。

「がー、長かった」

彼は教会の二階から一階に降りてきた階段の前で背伸びをすると、辺りを見渡す。

教会の営業時間は基本午後五時まで。しかしもう午後六時過ぎだと言っのに、教会の中は騒がしかった。やはり例の事件が関係しているのだろう。

「俺には、あの子には関係ないと祈るしかねーな」

男は小さなバッグを肩に担いで教会の外に出ようとした。すると、受付に見知った顔のおじいさんが立っていた。

「あれ？　もしかしてガルト隊長じゃね？」

男と受付にいるおじいさんの距離は一〇メートル。男は一人事のように口元でボソッと呟いただけ。だが対するおじいさんは男の方に振り返り、

「その声は……、アーウェルか？」

いとも容易く聞き取り返事をした。

「うおお、相変わらずとんでもない聴覚ですね」

「おお、やはりアーウェルじゃったか」

「でも口調は変わりましたね。年寄り臭くなってますよ」

「うるせえ。年取ると皆こうなるんじゃないよ」

彼らの距離は未だ一〇メートル。端から見たら一人事を喋っているように見えるかもしれない。

男はガルトと言うおじいさんの元まで歩いていく。

「久しぶりですね。まさかまだこの町にいるなんて」

「いいじやる別に。わしはこの町が気に入ってるんじゃない。昼は賑やか夜は静か、いい町じゃないか。ところでお前さんはどうしてこの町におるんじゃない？」

「人探しですよ」

人探し？ とガルトが聞き返し、男は首を縦に振った。そして続きを話そうとして、

ドンッ！ と叩くような音と共に教会の扉が勢いよく開け放たれた。

ガルトとアーウェルは二人同時に扉の方に視線を向ける。そしてそこにいたのは一人の少年だった。

「なんだあの汚らしいガキは。全身血だらけじゃねーか」

「それを言うならお前さんも似たようなもんじゃろ」

ガルトはアーウエルの服装を見て呆れたように言う。

「東洋人か、珍しいな」

その少年は黒い髪に黒い瞳と言う東洋人特有の顔立ちで、年は十五歳か十六歳ぐらい。背の高さは年相応と言ったところか。かなり焦っているようで、自分が周りの注目を集めている事に全く気付いていない。

「すつげえ挙動不審になってんな、あのガキ」

怪訝な視線を向けているアーウエル。すると隣に立っていたガルトが不意にこんな事を言ってきた。

「ああ、あれはわしの知り合いじゃよ」

「マジっすか!？」

「昨日わしのホテルに泊まりに来たんじゃ。まあわしが強引に泊めただけじゃがな」

「何でそんな事したんすか」

「何でっってお前さん、わしが無理やり誰かを泊める理由なんて決まっておろつが」

その言葉に『ああそうか』とアーウエルは相槌を打った。

「あんたはまた匿ったんですね。どこの誰だか知らない人間を」

呆れたように言ったアーウェルは知っている。

ガルトはアーウェルがとある組織に所属していた頃の上官で、仕事が終わるとよく二人で飲みにいったりもした。だから知っている。ガルトはいつも、自分から首を突っ込まなければ、絶対に巻き込まれないであろう面倒事に自ら足を踏み入れる事を。

「力のない人間を力のある人間から守るため、ですか。その誓いは今も変わっていないようですね」

「今でもわしが驕おごっていると思うか？」

「まさか。あんたは驕おごってもいいほどの实力を持っている。だからそんな誓いを立てても驕おごっているなんて思えませんよ。今も昔も」

アーウェルは顔の前で片手を振って、

「と言う事は、あのガキも何かしらの事情を抱えている、と」

「そう言う事だ」

「それであんたはまた助けると」

「そう言う事だ」

全く躊躇わずにそう言い切ったガルトは少年の元へ歩いていく。そしてその後を追うようにアーウェルも足を踏み出す。

「全く変わってませんね、あんなって人は」

「それがわしと言う生き物なんじゃから、仕方なかるう」

「あ、でも口調だけは変わってました」

「うるせえ」

言いながら二人は歩いていく。

一人は力なき者を力持つ者から守るために。そしてもう一人はその後ろ姿を追うように。

「それよりもいいのか？ わしなんかについて来て。お前さん人を探しているんじゃない？」

「あ、そーだった」

9 クライシス

時は少し遡る。

午後五時三〇分前後。

どこ？ と少女の声が聞こえる。
どこなの？

「ユアン！」

初めて、少年の名前を呼んだような気がする。

キャロルは陽の沈みかけた町の中を走り回っていた。息は切れかけ、走っているか歩いているか分からない状態だ。

ユアンを探しに出てから、既に三時間以上が経過していた。町中を探したキャロルだが、一向に彼を見つける事ができない。必ず、この町のどこかにいるはずなのに。

「絶対に、捕まったりなんてしていない！」

そう何度も自分に言い聞かせて、キャロルは再び走り出す。だが、不意にどこからか声が聞こえてきた。

「キャロル＝マーキュリーだな」

聞き覚えのない男の声が自分の名前を呼んでいる。

彼女が今いる場所は町の出入り口に近い、三階建ての建物が立ち並び通りだった。陽が沈みかけているせいか、周りは昼間の賑やかさとは打って変わって誰もいなかった。

だが、声は聞こえた。

キャロルは音源を辿っていき、とある三階建ての建物の屋上に視線が向いた。

そこには、一人の少年が屋上の枠ギリギリの所でしゃがんでいた。その少年は毛先を赤く染めた黒髪で、瞳の色は赤っぽい黒。その凶悪な風貌をさらに際立たせるように、黄金のピアスが両耳に二つずつ。

そして黒いローブを羽織っていた。

「——ッ！」

キャロルはすぐにその場から、黒いローブを羽織った少年から逃げようとした。だが、

「ばーか。もう手遅れだ」

あざ笑うような少年の声は、少女に残酷な現実を突き付ける。

「……そんな」

それに彼女は言葉を失うだけ。
一言で言おう。

キャロルは囲まれていた。複数の黒いローブを羽織った人間達に。トン、と背後から小さな音が聞こえた。その音の正体が、屋上に

しゃがんでいた少年が飛び降りて地面に着地したものと認識したのは、彼女が振り返ってからの事。

乱れた服装を整えた少年は、告げる。

害意に染まった音色で。無慈悲な言葉を。

「さあ、一緒に来てもらおうじゃないか」

10 前進

光浸樹と言う木がある。

その木はとても変わっていて、年中葉や果実などが生らない不思議な木だった。果実が生らないのに、どうやって子孫を残しているのかはまた今度話すとして、木は人々の生活に深く根付いていた。

なぜなら、その木は光を放つから。

昼間、光浸樹は太陽の光を吸い込む。そのため木の周囲は歪んで見えるが、夜になると木の枝が白い光を放ちだす。どうして光を放つのか、その理由も分かっていない。だが人々はその木を加工し、街灯や部屋の明かりなどに使っている。

だから電気や電球がなくても、この世界では夜でも光が灯っている。

そして、そんな加工された木の光に囲まれている町の広場を、一人の少年が走っていた。

ユアンⅡバロウス。

彼は教会の前で立ち止まり、扉を乱暴に開け放った。

そのせいで周りから注目を浴びたが、彼は全く気にしていない。

（どこだ？ キャロルはどこだ！？）

教会の中を、首を振り、眼球を動かして必死に見渡す。端から見たらちよつとした不審者に見えてしまっている。

一通り教会内を見渡したユアンだが、彼の探し人は見つからなかった。

（くそっ！ ここにもいねえ。外の広場にも見当たらなかったし、後はどこ探せばいいんだよ！）

ユアンは考える。キャロルがいそうな所を。

（あいつは頭が悪いわけじゃない。絶対に人気のないところには行かぬーはずだ）

だが既に陽が沈みかけているせいで、外を歩いている住民はほとんどいない。昼間の活気が嘘のように消えていた。そんな町の外を歩けばどこでも人気のない危険な場所になる。

（じゃあ、もう考えられるのは――）

最悪な状況だけだった。

そしてなぜか今の彼にはそれが最も現実的な事実だと思ってしま
う。

（何なんだよ、この胸騒ぎは。なんで俺の頭はこんな最悪な考えを否定できないんだよ……）

彼女は既に捕まっているのかもしれない。

そんな、想像もしたくない、悪夢のような事態が頭の中から離れ
ない。

（でも、もしそうだったとしたら……）

彼女は廃墟あぐいにいるだろう。

「行くしか、ねえか」

敵地のド真ん中に。一人で。

無謀でも、足を止める訳にはいかない。

ユアンは拳を握り締め、振り返って教会を出て行こうとした。すると、

「そんな傷だらけな格好で、何しとるんじゃ？」

背後から年寄りじみた男の声が聞こえた。それは聞き覚えのある、勘に触る声だった。

「……あんたか」

振り返って、やっぱりと言う表情を作ったユアン。

そこにいるのは六〇歳過ぎの老人だった。彼はユアンとキャロルが泊まっているホテルのオーナーで、得体の知れない年寄りだと、ユアンはあまり好いていない。

「別に、あんたには関係ない」

「おいおいそんなつれない事を言わんでくれ。一度助けてやった仲間だろ？」

「でも友達になった訳じゃない。それとも助けた借りを返せってんならまた後にしてくれ。俺は今急いでるんだ」

素っ気ない態度で言うと、ユアンは再び教会の入り口に進路を取り直そうとした。

と、そこでユアンの耳に、今度は聞き覚えのない男の声が響いて

きた。

「おいガキ、お前は何をそんなに焦ってたんだ？ そんなんじゃ何にも出来やしねーぞ」

声のした方向に視線を向けると、そこには案の定見知らぬ男が立っていた。

背が高く、黒髪で赤い瞳、頬に大きな傷を持ち、服装は薄汚れた青いTシャツにグレーのジーンズ。教会の人間ではない事は一目で分かった。

「誰だあんた？」

「そのじいさんの知り合いだよ」

見下すような視線を向けている男に、ユアンの目つきが少し鋭くなる。

「何だかよくわかんねえけど、ガルトさんはお前の力になってやって言ってたんだ。この人の实力を知ってたんなら断る事はねえだろ」

確かに、この老人が手助けをしてくれるって事は、ユアンにとって相当心強くなるだろう。四〇人の術者を一人で全員潰したとも言っていたし、『薔薇十字団』相手でも引きを取らないかもしれない。

でも、ユアンにはこの人を巻き込む事ができなかった。

もし巻き込んでしまったら、彼女の意思を、他人を巻き込みたくないと言っ優しい思いを、全て踏みにじってしまう気がしたから。

「……悪い。俺に構わないでくれ」

「は？ 何でだよ。困ってんなら助けを求めりゃいいだろ」

納得がいかないような表情になっている男に対し、ユアンは僅かに視線を逸らした。するとガルトと言う老人が声を上げた。

「これアーウエル、手助けの押し付けは己の傲慢さを自嘲しているようなものじゃぞ」

「でもよお……」

「相手が助けを求めてきたら、何も言わずに助ける。それが一人前の騎士つてもんじゃろうが」

ガルトの言葉に男は黙り込む。だが彼の表情はやはり変わっていない。『あんただって強引に泊めたって言ってただろ』とぶつぶつ言いながら、拗ねた子どもみたいになっている。

「……アーウエル？」

そんな中、疑問形で言ったのはユアンだった。彼は以前にもその名前を聞いた事がある。それほど昔の事ではない。聞いたのはついさつき、四時間ほど前だ。

（キャラルの言っていた知り合いの名前も、確か『アーウエル』だったような……）

「どうした？ 突然阿呆の名前なんぞ呼んで」

「あ、いえその……」

突然話し掛けられて言い淀んでいるユアンを側に、名前を呼ばれは本人はと言うと、

「ちよつ、ガルトさんっ！ 阿呆って何ですか阿呆って！」

そんな風に一生懸命抗議していた。だがガルトはそれを完全無視。ユアンの返答を待っている。

ここで何も言わなかったらあまりにも男が哀れに思えてしまうので、ユアンはガルトに自分が抱いた疑問を話す事にした。

「……なるほど。お前さんと一緒にいたあの嬢ちゃんの知り合いも、『アーウェル』と言うのか」

復唱するように言ったガルトに、ユアンは一回だけ頷くと続けて、

「確か、姓が『ローマー』だったような……」

「ほう、それは凄い偶然じゃのう。実はこの阿呆の姓も『ローマー』なんじゃよ」

「え？ それって——」

どこかわざとらしく言ったガルトと、その言葉に驚いているユアンは、同時に話題の原点になってしまった男に視線を向けた。

「……え、俺？」

いまいち状況を飲み込めていないような態度を見せている男に、ユアンは一つ質問する。

「あんたが本当に『アーウェル』ローマー』なら、『キャロル』って少女を知っているはずだ」

内心ちよつとだけ緊張しながら言ったユアンだったが、男の返答は呆気なかった。

「キャロル？ 知ってるけど」

当たり前のように肯定した。同時にユアンの鼓動が一瞬だけ大きく脈打った。

「つーか俺の探し人ってキャロルなんだよな。手紙受け取ってからもう一週間以上経ってんのに全く来る気配がなかったから、わざわざここまで探しに来たって訳なんだが……。なんだ、お前知ってるのか。じゃあその当の本人はどこにいるんだ？」

「そう言えば、お前さん一緒じゃないようじゃの。逸れたのか？」

男とガルトの問いかけは当然の事だった。男はともかく、ガルトの方はユアンとキャロルと一緒に旅をしている事を知っている。一緒にいなければ不自然だと思うのも無理はないだろう。

彼らの言葉には疑問しかなかった。彼らはただ純粹にそれを口にただけだ。

しかし、今のユアンには、彼らの質問が尋問だと感じてしまうのは何故だろうか。

それはとても簡単な事だ。
とても単純な事だ。

「……」

なのに、ユアンは理由を言えなかった。とても簡単に単純なはずなのに。

（言える訳がないだろッ！）

碎ける勢いで奥歯を噛み締め、彼は心の中で吐き捨てた。

ユアンの瞳は男を見ていない。どこも映していない。

キャロルは言っていた。今、目の前にいる男は昔よく遊んでくれた人だと。それを話している時の彼女の声が、少しだけ楽しそうだったのを彼は覚えている。

それはおそらく信頼の証だろう。そして彼女がそんな風に思っているのなら、おそらく思われている相手も、それと同じ気持ちを抱いているはずだ。

曖昧な予想でも、勝手な決めつけでもない。

確信だった。

そんな相手に『キャロルは攫われました』など、言える訳がない。

……ちくしょうッ。

心の中で放った言葉は、しかし心の中以外にも響いていた。

「それは、何のための苦悶だ？」

言ったのはアーウエルと言う男だった。

声に出すつもりはなかった。だが、いつの間にか、自分の予期せぬ内に、その言葉は音になって自分の口から漏れていたのだ。

「お前とあの子がどういう関係なのかは知らねえ。でも、もしあの子に何か遭ったのなら、隠すんじゃない。俺はあの子を助けるため

に、ここに来たんだからな」

この男は、まるでキャロルの抱えている事情を全てを知っているような言い方だった。

真っ直ぐなその言葉にユアンは視線を上げていて、

そして男と視線が重なり合ったと同時に、ユアンは男の言葉の『答え』を知った。

その後、ユアンは二人に全ての事情を話していた。

キャロルと別行動を取ったこと。

自分が『薔薇十字団』に捕まって、すぐに逃げ出したこと。

今までキャロルを探していたこと。

そして彼女はもう捕まっているだろうと予測を立てたこと。

「それで、お前は一人で『薔薇十字団』に挑もうとしてたってか」

言ったのはやはりアーウェルと言う男。ユアンは男から視線を逸らさない。

「……」

そもそも何故ユアンは全てを喋ったのか。

その理由は、彼らにはそれを知る権利があると思っただから。

（いや、違うな）

教えるだけならまだ良いと思っただから。

（そうじゃない）

彼はただ……、

（俺は、ただ……）

誰かを強く思っている男の目に、気圧きあつされただけ。

自分の力だけではどうにもならないと、直感しただけ。
だから、彼は言う。

「あいつを、キャロルを……、一緒に助けてください」

安っぽいプライドを捨てた少年は、一歩大きく前に出た。

11 余裕から絶望へ

時刻は午後六時三〇分。

太陽は地平線に隠れ、荒野は暗闇に沈んでいた。
静寂が辺りを支配し、虫の音が響き渡っている。

だがその暗闇を破るように光を放つ廃墟郡があった。
そこからは複数の人の気配があり、人の声も聞こえる。

「逃がしただと？」

黒いローブを羽織った少年がそう問いかけているのは、彼よりも明らかに年上で屈強な体つきの二人の男だった。

「……すいません、ラージーさん」

言ったのは二人の内の一人、黒い髪の子。年下に頭を下げているのを見ると、少し情けないように映ってしまう。

「縛っていたローブには阻害術式を組み込んでいたはずなんだが」

ラージーと言う少年は、地面に座っている二人の男を見下ろしながら言う。

阻害術式とは、術者が術を発動しようとする^{マグナ}と発動し、元力の循環を遮ってしまう効果を持つ。術的拘束力が弱いものは簡単に破られるが、強力なものだと強引に術を発動しようとした場合、元力^{マグナ}が体内で暴発し内臓などが破裂する事がある。

彼らの使っていたのは後者の方だ。

「奴はそれを破ったんです」

「あれはそんな簡単に破れるもんじゃねえ。お前らはちゃんと見張ってたんだよな？」

「それは……」

口の中で言い籠った黒髪の男に、ラージーは怪訝な視線を向ける。

「……まさかとは思うが、席を外していた、なんて事はないよな？」

「……」

何も言わない部下達に、ラージーは溜め息をついた。

今、彼の後ろにはロープで縛られた一人の少女が倒れている。その少女はある少年を誘き寄せるための餌であり、自分の任務対象でもある。

そして、周りには大勢の黒いロープを羽織った人間が囲んでいた。それを外からさらに囲うように、廃墟の角や木の枝など様々などころに、円柱状に加工された『光浸樹』の枝が取り付けてある。そのため辺りはそれなりに明るかった。

と、不意に別の男の声が割り込んできた。

「まあそんなにイジメてやんなよ。そいつらだって逃がしたくて逃がした訳じゃないんだろ？」

ラージーは声のした方向に視線を向ける。

そこにいるのは一人の男。名はキファーフ・スイナン。歳は二〇代前半ぐらい。青に近い黒髪と青い瞳。黄金のネックレスを首に下げている、不良みtainな男だ。

彼は二階建ての廃墟の上に座っていた。ラージーは見上げながら、

「ダメっすよキファーフさん。こういうのは厳しく教育しねーと」

「相変わらず頭硬いなお前は。鞭ばかりじゃ部下はついてこねーぞ」

「生憎と俺は力しか使えないんでね」

皮肉そうに言ったラージーは再び二人の男に視線を向ける。

「それで、奴はどこに逃げた？」

「……」

二人の男は黙ったまま。

「知らねえのか」

黙りこむ二人の男にラージーは再び溜め息をつく。

「面倒くせーなあ。また町に行かなきゃなんねーのかよ」

うんざりしたような声を出した少年だが、そこで再びキファーフがこんな事を言ってきた。

「どうやら、探さなくてもよさそうだぞ」

「？」

唐突な言葉に訝しげな表情をしたラージーは、キファーフに視線

を移し、彼の視線の先を追う。そして行きついたのは、小さな光がポツポツと灯っている町景色だった。

だが、彼の注意はすぐに別のモノに移った。

その手前にいる三つの人影に。

「あれは……」

はつきりとは見えないが、ラージーは確信した。

あの三人の内の一人は、東洋人の少年だと。

理由は分からない。ただ直感したのだ。

「自分からきやがるとは」

ニヤリ、とラージーは彼特有の邪悪な笑みを浮かべる。

「こつちから探しにいく手間が省けたな」

彼はローブの中に片手を突っ込み、一本のナイフを取り出す。銀色の刃が周りの光に照らされて輝いている。

（目標は東洋人だが、まあ端から潰しに行くとするか）

ラージーと三つの人影との距離は、まだ一〇〇メートル以上ある。だが足に仕込んでいる、身体能力を一時的に強化する術式を使えば、五秒でゼロにする事が出来る。

「右から首を跳ねてやる」

姿勢を低くし、体勢を整える。暗闇の向こうから近づいてくる三

つの人影、特に右側の影に鋭い視線を向ける。ナイフを握っている右手に力を込めて、前方向に体重を移し走り出そうとした。

しかし、彼がその場から離れる事はなかった。

原因は、自分が今まで凝視していた右側の人影が、不意に消えたからだ。

（な！？ 消え――）

そして、それが起こったのもほぼ同時。

突如、轟音と共に右側にいた黒いローブを羽織った人間、合計二人が、上空約一〇メートル位置まで紙のように吹き飛ばされていた。

「――ッ！」

大地が震え、絶叫が迸る。

走り出す寸前だったラージーは、一瞬遅れて不自然な体勢なまま右側に視線を向ける。

そこにはさっきまで立っていた部下たちはおらず、代わりに巻き上げられた粉塵と、一人の老人が立っていた。

右手に白い大剣を持ち、左手に黒い鞘を携えた、白髪が目立つ老人が。

その老人の瞳はひどく冷めていて、直接睨みつけられている訳でもないのに寒気を感じさせられる。

地面に振動が伝わった。それが空に上がった人間が地面に落下したものだと思い付いた時には、既に連続で同じような振動が地上を揺らしていた。

（あいつは……、ヤバイ！）

ラージーは直感した。あの老人は危険だと。レベルが違い過ぎる
と。

今までの余裕は跡形もなく消え去り、代わりに恐怖と絶望が沸々とこみ上げてくる。

固唾を呑み、無言のままラージーは立ち尽くす。

12 強大な力

一人の男が二階建ての廃墟の屋上から、自分の部下たちが上空に吹っ飛ばされるのを眺めていた。

(……こいつは、おもしろい)

だがその男は、笑っていた。

『薔薇十字団』の幹部であり、上位二級犯罪者であるキファーフは、胸の奥からこみ上げてくる昂揚感に浸りながら、心の底から楽しそうに笑っていた。

そして地面に置いていた一本の鉾^{ほこ}を手に取る。

その鉾は矛先の形状が二等辺三角形で、刃根元には両側に突起が設けられていた。所々黄金の装飾がなされており、置物のようにも見える。

右手に鉾を携えたキファーフはその場に立ち上がり、粉塵の中に堂々と佇む一人の老人を見下ろす。

「久々に、とんでもねえ化物と闘い合えそうだ」

ニヤリ、と口元を歪ませて、二階建ての廃墟から飛び降りた。

そのまま両手で鉾を握り締め、大きく真上に振り上げる。

狙いは一人。二〇人以上の人間を一振りで薙ぎ払った常識外れの老人。

対する老人は、上空から迫るキファーフに気配を感じ取ったのか、夜空を見上げ大剣を構える。

殺気の籠った両者の視線が重なり合い、次の瞬間には、

轟ッ！！ と、右から左へ振るわれた老人の白い刃と、上から下

へと振り下ろされたキファーフの矛先が火花を散らし交差した。

大気が震えた。

同時に耳をつんざくような轟音と地震のような振動が大地を揺らす。

元力マグナと元力マグナが衝突し、視界で捉えられるほどに圧縮された衝撃波が二人を中心に球状に広がった。そして地面を薄く剥がし、粉塵を巻き起こす。

それは単に鉾と剣が交わっただけと言う領域を越えていた。二つの隕石が正面から衝突し砕け散ったかのように、強大な二つの力がぶつかり合い弾け飛ぶ。

(……)

隕石並の一撃を放ったキファーフだったが、彼の表情は若干険しくなっていた。

(このじいさん。俺の元力マグナと全体重を掛けた一振りを、片腕で受け止めやがった)

並みの術者なら剣の上から真つ二つに両断されていたはずの一撃を、老人は右手一本の一振りで受け止め、さらにそのまま振り返してきた。

「な——ッ！」

攻撃が通じなかった上にそのまま弾かれたキファーフは、大きく体勢を崩し後ろへ飛ばされる。靴の裏を地面に引き摺りながら何とか速度を落としたが、気を抜く事はできなかった。

何故なら白い大剣を握った右腕を左肩の上に回し、半身の状態で

飛び掛る老人がキファーフの眼前まで迫って来ていたからだ。

「……………」

「——ッ！」

隕石並の一振りを軽々とあしらった老人の大剣が、月明かりに照らされて白く輝く。

そして高速で身を捻り、老人はキファーフの体を左上から右下へ切断するべく、豪快に振り下ろす。

空気が強引に裂かれ、大気が乱れる音がした。

だが同時に、金属の甲高い音も鳴り響いていた。

「はっ！！！」

そう吐き捨てたのはキファーフだった。隕石以上の破壊力を持つ一撃を真正面から受け止めて、屈強な両足を地面に打ちつけ立っている。

「やっぱりあんたで間違いなさそうだな。うちの部下を殺しまくったって言う殺人狂は！」

「……………」

叫ぶキファーフに、しかし老人は取り合わない。

次の一撃を放つべく、相手との距離を取り大剣を構えるだけ。

13 救うために

キファーフと老人の激闘を眺めていたラージーは、そこで気付く。今度は左側にいた部下たちが、青いＴシャツを着た男に次々と斬られていつている事に。

「あの野郎！」

ラージーは男に握っていたナイフを投げつけようとした。だが、その前に動いた者がいた。

三つの人影の、最後の一人。

両手両足に、目に見えるほど圧縮された風の渦を巻きつけたユアンバロウズが、拳を硬く握り締めイッザラージーの眼前まで迫ってきていた。

「——ッ！」

一瞬反応に遅れたラージーだったが、彼はそこで思う。

（こいつ、素手でやる気か！？）

ナイフを持った敵に素手で挑もうとするユアンの行動は、無謀としか思えなかった。鋭く尖ったナイフと人間レベルで硬くなった拳とでは、結果は目に見えているから。

「武器もなしによく突っ込んでこれるなあ！」

嘲るように叫び、ラージーは刃先を青いＴシャツの男からユア

ンに向ける。

同時に右肩を引いていたユアンの右拳が、風を纏って前に突き出る。

ナイフと拳が正面から衝突し、

ナイフが刃先から削れていった。

「な——ッ」

瞬間、ラージーは愕然とした。

ナイフと素手の拳とでは勝負にもならないはず。実際に勝負にもなっていないが、その結果が明らかに異常だ。

ユアンの拳は鉄製のナイフを大根みたく削っていき、そしてラージーの顔面に突き刺さる。

ドッ！ と鈍い音が響き渡った。

そのまま一〇メートル以上殴り飛ばされたラージーは、地面に大の字になって倒れこむ。

砂ぼこりが彼を包むように舞い立った。

「……どういう事だ？」

しかし今の彼は顔を殴られた事よりも、自分が生きている事を不思議に感じていた。

（ナイフを削り取った拳だぞ。それをまともに喰らった俺が、なんで生きてんだ）

考えられるのはただ一つ。

あの少年が手心を加えた。つまり力を抜いたのだ。

「殺しはしねーよ」

言ったのはユアンだった。彼は倒れているラージーを見下ろし、静かな声で発語する。

「俺はただ、キャロルを助けに来ただけだからな」

13 救うために（後書き）

第三章はこれで終了です。

次は第四章——の前にまたまた行間が入ります！

孤独な決意

轟音が聞こえた。舞い上がった砂粒が皮膚を叩く。

悲鳴が聞こえた。恐怖に怯える男女様々な声が辺りに轟く。

振動が伝わった。気持ちの悪い鈍い音が頭に響く。

風が吹いた。温かくもあり、冷たくもある不思議な風が。

そして、

『俺はただ、キャロルを助けにきたただけだからな』

少女の鼓膜を振動させて脳に伝わってきたのは、一人の少年の声だった。

「……ユ、アン？」

気がついて、掠れた声で最初に放った言葉は少年の名前。

少女は瞳を開け、少年の声が聞こえた方向に焦点を合わせる。

そして一〇〇メートルぐらい離れた所に、彼はいた。

拳を固く握り締め、黒いローブを羽織った少年を殴り飛ばして。

「……」

気を失っている間に一体何が起こったのか。少女は知らない。

自分は『薔薇十字団』の追っ手に捕まったはず。現に手足はローブで縛られていて動けない。

そのため、どうして少年は戦っているのか。彼女には分からない。

否、戦っているのは少年だけではない。

周りを見渡すと、六〇歳近いおじいさんが右手に白い大剣を握って、飾り物のような鉾を持った青に近い黒髪の男と剣を交えていた。

短い黒髪で頬に大きな傷を負っている見知った顔の男が、黒いロブを羽織った集団に突っ込んで行っていた。

(……これ、どういう事なの?)

現状が理解できていない訳ではない。

彼らは自分を助けに来てくれたのだと、彼女は正しく理解している。

ただ、信じられないのだ。

あの三人は自分のために戦ってくれている。彼らは命懸けで自分を救おうとしてくれている。その事実が。

(……なんで?)

彼女の頭の中には疑問しかない。

(……どうして?)

自分を助けた所で得られる物など何もないはずなのに、得する事など何もないはずなのに、どうして彼らは自分を救おうとしてくれるのか。

自分たちの身を危険に晒してまで、どうしてそこまでしてくれるのか。

確かに、少年には自分が抱えている状況を大雑把ではあるが告げた。だが告げただけ。だから助けて、などと言った覚えはない。

しかし彼女は気づいていない。少年に事情を話した事そのものが、既に救いを求めている事に。

そしてその救いに少年は応えていた。

“ いいつつつてんだろ！ 何度も聞くな！ そんでさっさと事情言

いやがれ！”

ふと、少女の脳裏に少年の声が響いた。
乱暴だけど温かい。優しさの塊のような言葉。
全てを受け入れてくれた人の声。

（そっか……）

そこで少女は気が付いた。

今まで、自分は一人だった。他人を巻き込みたくなかったから。他人を不幸にしたくなかったから。孤独を選ぶ他、なかったのだ。でも少年と出会った事で、彼女は独りではなくなった。母親からの頼みを果たすまで独りでいよう。そんな自分の信念と引き換えに。

一時の気の迷いや思い切りの判断は、間違いなく彼女を孤独から救ったのだろう。だがその代償は途轍もなく大きくて残酷だったと、彼女は今更ながら思い知らされた。

取り返しのつかない過ちに気付いてしまったのだ。

ポタリ、と少女の瞳から涙が落ちる。

生暖かい滴が頬を伝い、地面を小さく濡らした。

その涙が、一体どういう意味で流れたのか、本人にしか分からない。
い。

ただ、それがどんな事であれ、彼女にはこれから自分がすべき事は分かっていた。

だから彼女は覚悟を決めた。

だから彼女は瞳を閉じた。

「だから、わたしは……」

そんな消え入りそうな少女の声は、決して誰にも届かない。

1 破壊の衝撃（レーヴァシューラーク）

ユアン＝バロウズは普通の人間ではない。

この世界での『普通の人間』とは、体内に『^{マクナ}元力』を宿し、『術』と言う魔法に似た力を使える者たちの事を指す。

だがユアンはその普通とは少しばかり違っていた。

まず、彼は異常な回復能力と動体視力・反射神経を持っている。音速で迫る弾丸の軌道を目で読み取り、弾丸で貫かれた傷は一晩で水に浸かっていいほどには回復してしまう。体中に切り傷を負っても三時間ほど寝ていれば大抵は治っているし、体力の回復速度は常人の二倍以上。それらの身体能力はとても普通の人間の体が持ち合わせている機能ではない。

次に、彼は術を使わない。『^{マクナ}元力』の総量が極端に少ないから。どんなに規模の小さな術式を發動しようとしても一回が限界。その術式を維持できるのもほんの数秒と言う、無に限りなく近いのだ。

最後に、彼は風を操る力を持っている。

その力は『術』ではない。『^{マクナ}元力』を全く使わずに、彼は大気を操る事ができる。

なぜ自分がそんな力を持っているのか、彼は知っている。

『^{マクナ}元力』の総量が少ない理由も、身体能力が高い訳も理解している。全て分かっているからこそ、彼はそれらの力を存分に振るう事ができるのだ。

「ははっ」

男の失笑するような声が聞こえた。

それはユアンの視線の先に倒れている一人の少年のものだった。

その少年は黒いローブを羽織っていて、瞳の色は赤っぽい黒。毛先を真紅に染めた黒髪で、耳には黄金のピアスが二つずつ。

ユアンは知らないが、その少年の名はイツザ「ラージー」と言う。

そんな、まさに悪人そのものと言う顔つきの少年は、地面に大字になって倒れていた。

「殺しはしねーよ、だと？」

ユアンに殴り飛ばされた少年の口から言葉が漏れる。

金属と金属がぶつかり合う甲高い音が辺りから響いてくる。

「俺はキャロルを助けにきたただだから、だと？」

ガルトと鉾を持った男が戦っている方向から、衝撃波に乗って粉塵が巻き上げられ、

そして、

「なめてんじゃねえぞッ！！」

少年の叫びが辺りに轟いた瞬間、

爆ッ！！ と彼の体を中心に地面が爆ぜた。

埋められていた地雷が起爆したかのように地面が弾け飛び、大量の粉塵が舞い上がった。振動が大地を揺らし、轟音が鳴り響く。

「な——っ」

それを一〇メートルほど先から眺めていたユアンは啞然とした。

（……自爆！？）

爆発は明らかに地面に倒れていた少年の背中から起こっていた。背中の地面があれだけの規模で爆発すれば、人間の体なんて一瞬で木っ端微塵に砕け散ってしまう。
だが、

「上から目線でもの言ってるじゃねえぞ雑魚がッ！！」

ラージの叫び声が聞こえた。そう。

「上からッ！？」

上空二〇メートルぐらいだろうか。爆発によって吹き飛ばされた敵の体が、五体満足で空を舞っていた。

「てめえみてえな野郎が一番勘に触るんだよッ！」

空中で体勢を整えているのか、ラージは両腕・両足を大きく広げて、頭から落下しないように上手くコントロールしている。

「てめえみてえな野郎を俺が一番ぶっ殺してえんだよッ！」

あまりの怒りに表情が歪んでいるラージーは、噛み付くように吠えている。

すると彼は、両手を剣の柄を握るように揃えると、自分の頭上に振り上げた。

「だからよお！」

そして、振り上げた両手の中からその物体は現れる。

全長は二メートルほどで、柄の長い剣の刃を、円柱型の金属塊に替えたかのような殴打型の武器。

中世では鎧を纏った人間に対して、その上から体を叩き潰せる事で有効だった兵器。

それは、撲殺用の金属製打撲武器だ。

（あの野郎。一体どこからあんなもんを——！？）

何らかの術である事は間違いないが、今はそんな素朴な疑問などいちいち解いている暇はない。

ラージーが叫ぶ。

「拉げろおおおおおおおッ——！」

「い——ッ——！」

ユアンは即座に回避しようとした。だがメイスの出現により重量が増えたのか、ラージーの落下速度が急激に上昇し、

予想よりも早く頭上にメイスが振り下ろされた。

もしユアンの身体能力が並だったのなら、確実に頭から体を潰されていただろう。常人以上の反射神経を駆使して、間一髪の所でその一撃を後ろへ下がる事で回避した彼だったが、しかし攻撃はそれ

だけでは済まなかった。

ドッ！ と地面にめり込んだメイスを中心に、
轟ッ！！ と爆破が生じた。

爆発が起こる前、ユアンとメイスの距離は一メートルもなかった。そんな距離で地雷並の衝撃を受けたらどうなるのか。考えるまでもなく、その結果は目に見えている。

視界を覆った眩い光が熱・音・衝撃を纏って襲い掛かった。反射的に両腕で顔面を覆ったユアンだが、そんなものは気休め程度にしかない。

石を壁に叩き付けたような鈍い音と共に、両腕全体に細かい粒の衝撃が走った。爆発により挟まれた地面の破片が、爆風に乗って襲い掛かってきたのだ。同じような衝撃は既に体の至るところから伝わってきている。

そしてその衝撃を痛いと感じた時には、焼けるような熱さが触覚を、裂けるような音が聴覚を刺激していた。

「がアああああッ！！」

一〇メートルほど吹き飛ばされたユアンは、乾いた地面の上を転がっていく。背中から伝わってきた衝撃に一瞬意識が飛びかけ、痛み思考が削られていく。すぐにでも起き上がりたいのに、体が言う事を聞かない。自分がいる一帯だけ重力が何倍にも膨れ上がったかのように、地面から体が離れない。

（……あいつ、また、やりやがった）

疼くような痛みを感じながら彼は思う。

先程の爆破は、地面にめり込んでいたメイスを中心にして起こっていた。ユアンはかなりの近距離でその衝撃を受けたが、彼よりもさらに近くでその衝撃を受けているはずの人間がいる。

それは、爆破を起こした本人。つまり黒いローブを羽織った少年
イツザ・ラージーだ。

（でもあいつは、多分何らかの防御術式を使っているはずだ）

最初と同じで敵は無傷だろう。そもそも自分の攻撃を自分にも食らうバカはそうはいない。

そう思ったユアンは、霞む視界でなんとか爆発地点を映した。そして案の定、黒々と立ち籠る煙の中にラージーは立っていた。

最もあの衝撃を間近で受けたはずなのに、彼は無傷のまま佇んでいた。

「無様だな。まあてめえにはお似合いだが」

悪意しか籠っていない少年の言葉が、ユアンの耳に入ってきた。

「でも、まだくたばんじゃねえぞ？ こっちは全然もの足りねえんだからよお」

例え黒煙に映った影しか見えなくても、ユアンには今の少年の表情が思い浮かぶ。歪んだ笑みを浮かべているであろう少年の顔が。

「そうだな、立てるようになるまで少し時間をやるよ」

薄暗い乾いた大地にラージーの声が響いている。

「とある聖書に載っている『ソドムとゴモラの滅亡』っつー伝説…

…、いや神話を知ってるか？」

片手にメイスを携えているであろう彼は、語りかけるように言葉を放つ。問いかけているにも拘らず、彼はユアンの返答を待たずにそのまま続けて、

「ソドムとゴモラってのは町の名前なんだが、そこじゃあ強姦、殺し、盗みに恐喝、ありとあらゆる悪徳行為が延々と繰り返されてたらしい。だからか、その町の住人は神様の逆鱗に触れちまって、空から降ってきた火と硫黄の雨に町ごと跡形もなく消滅させられたんだと」

黒煙の中には、まだ所々赤く揺れる火が灯っている。

「まあこの話はある種の例えみたいなもんなんだが、神様ってのはつくづくやる事が派手だよなあ？　どの神話でも」

語り続けるラージーが攻撃を仕掛けてくる気配はない。それを悟ったユアンは重たい体をゆっくりと起き上がらせる。

「でも神様からしたら人間の町の一つや二つ破壊する事なんて、人間が蚊を叩き潰すのと同然の事なんだろうけどよお、もしも人間にも神様と同じ事ができるとしたら、てめえならどうする？」

「……何が言いたい」

「ちょっと回りくどすぎだったか？　もうちょっと簡潔に言つただな、この世には神様の扱う術式が記載された本が存在する。ってのは知ってるよな？」

「神の十二聖書の事か？」

ユアンの言葉に『ああ』とラージは言った。

『神の十二聖書』。それはこの世で最も強大な術式『セフィロト法』が記載された術導書^{バイブル}。

名前の通り十二冊に分けられており、それら全てを解読し、習得すると神またはそれに近い存在になると言われている。

因みに術導書^{バイブル}とは、術式や術式の使い方などが記載された術の手引書のようなものの事。世界中に数え切れない程存在する。

「その中の一冊に『ゲブラー』^{バイブル}って術導書があるんだが、そいつは破壊と鉄を司っていて、あらゆるモノをあらゆる方法で破壊する事ができる術式が記載されてるって話だ。噂だと、ソドムとゴモラを消した術式も載っているとか」

「……」

「それってつまりは神様の術式が載ってるって事だよなあ？ 犯罪^{おれ}者にとつちや夢のような話だ。そいつを使いりやこの世の頂点^{てっぺん}取れるかもしれねーんだから」

ラージの口調は幼い子どもが自分の夢を語っているかのようなだった。とても純粹に『破壊』を望んでいるようだった。

そんな語りを聞いているとユアンの背後から風が吹き、黒煙を少しずつ薄くしていく。

「まあ最終的に俺は何が言いたいのかと言つと……」

そして黒煙が完全に消え去ると、

「俺は『ゲブラー』に載っている術式の改良版を使ってるっー事なんだが、その意味ぐらいいは分かるよな？」

ふらふらな足取りで立ち上がったユアンの黒い瞳と、堂々とした態度で佇んでいるラージーの赤黒い瞳がぶつかった。

「鉄は破壊の象徴。だから俺の獲物は鉄製のメイス」

予想通り邪悪に歪んだ表情で、敵は笑っている。

「刻んだ術式は光・音・火・衝撃の四要素をかね揃えた『爆発』^{エラプション}。獲物がメイスつてのは、この術式を使っても耐えられる強度をもっているからだ」

そして周りには赤く揺れる小さな炎。少年は鉄のメイスを見せ付けるように天へと掲げる。

「他にもいろいろあるんだが、それら全てを上手い具合に組み上げたのが、この『破滅の衝撃』^{レイヴァーシュラック}だ」

「『神の十二聖書』系列の術式の取得は、世界的に禁止されているはずだが」

言ったのはユアンだった。

彼が言った通り『神の十二聖書』に記載されている術式の全ては、例外なく『禁術』——法で習得及び使用を固く禁止されている。大体『全て習得したら神になれる』術式なんてものを、この世界のお偉い方々が禁止しない訳がない。

禁術を習得した術者は大抵指名手配される。捕まったら即監獄行きだ。

「おいおい、俺を何だと思ってんだてめえは？ 犯罪者がそんな決まり守る訳ねーだろ」

もつとも過ぎるラージーの言葉に、ユアンは齒噛みをするだけ。

（レーヴァシューラク、か。名前から見て『レーヴァテイン』が元ネタだろうな）

ユアンは術を使えない。だが術に関する知識——特に『神の十二聖書』の事なら、それなりに知っている。

『レーヴァテイン』とは、とある神話において、世界に幕を引いてしまふほどの強力な剣だと記されている。剣と言ってもただの鉄で出来た剣ではなく燃え盛る炎の剣で、その輝きは太陽のそれを凌駕するほどと言われている。

（だからと言って、奴の武器が世界を焼くほどの威力を持っている訳じゃない）

所詮は紛い物。本物には到底敵わない。

だが、それを分かっているからこそ、彼は気を抜けなかった。

なぜなら、『神の十二聖書』に載っている術式の密度を一〇〇〇分の一にしたとして、その威力は建物一つぐらいなら簡単に吹き飛ばす事ができるからだ。

（こいつ、面倒なものを使いやがって）

予想以上に苦戦を強いられるかもしれない。

心のどこかでそう思ったユアンは、体中の痛みを押し込めて、構える。

「さて、長話はこれくらいにして……」

話に区切りをつけたラージーも、重々しいメイスの先端をユアンに向けた。

そして彼は告げる。

「そろそろ、始めるか」

2 怒り

アーウェル「ローマーの戦い方は、ガルトのそれとは違う。

一振りで全ての敵を薙ぎ払うなどと言う、ぞんざいでもつたいない事はしない。

敵地の真ん中に飛び降りて、一人一人の命を丁寧、そして確実に摘み取っていく。

それがアーウェルのポリシーだ。

どんな人間の命でも、命である事には変わらない。悪人だからと言ってその命を虫けらのように扱っていいとは思わない。

などと言う善人被れの綺麗事を思っている訳ではない。

彼はただ、戦闘を楽しみたいだけなのだ。一振りで全てを終わらせてしまつては、一度に得られる快感は大きいかもしれないが、それらは全て一瞬で終わってしまう。

一度に得られる快感は少なくとも、その快感を長い間感じていたい。

それがアーウェルの本性だった。

戦闘において、本来彼が抱くべき感情だった。

しかし、今の彼が抱いているものは、それとは違う。

「……許さねえ」

怒り。

『薔薇十字団』に対する完全なる怒りだった。

「お前らだけは絶対に許さねえ!!」

彼の怒りはとある少女と関係している。

彼にとってその少女は何者にも代えられない、特別な存在だった。昔、共に戦場で戦った友人の娘。そして、その友人からの最後の頼み。

“娘を頼む”

手紙に書いてあった言葉の意味を理解したのは、友人の町が焼かれたと知った時だった。その友人が死んだと知ったのはそののさらに後の事だ。

細かな事情は全て自分で調べた。寝る間も惜しんで必死に調べた。そうして全ての事情を知った彼は、すぐにでも友人の娘を探しに行こうとした。

その時だった。

本人から手紙が届いたのは。

内容は『一週間後に会いにいきます』と、とても簡潔なものだった。

彼は一週間待った。ここで変に家を空けたら入れ違いになってしまいかもれないと思ったから。

だが少女は来なかった。それから三日経っても来なかった。だからここまで探しに来て、見つけた。

『薔薇十字団』に捕まった状態で。

(……俺がもっと早くキャロルを探しに出ていれば)

黒いローブを羽織った人間を、次々と切り裂きながらアーウェルは思う。

（こんな事にはならなかった）

口の中に鉄の味が充満する。奥歯を噛み締め過ぎたせいで、歯肉が出血しているのだ。

（俺がもつと！ ……っ）

今更そんな事を思っただけでも、起こってしまった事実は何一つ変わらない。

分かっているながらも、彼は後悔を止められなかった。

（くそっ、体が全然動かねえ）

アーウエルの右手には、全長一・五メートルほどの刃幅の狭い黒片手半剣が握られている。彼がそれを握ったのは二年ぶりだった。それは二年間一度も闘っていない事を意味している。

（道理で体が動かねえ訳だ）

本人はそう思っているが、他から見たらバリバリの現役騎士にしか見えない。

アーウエルの動きは、彼を狙っている者の動きを遥かに凌駕していた。

その証拠に、彼は切り傷一つ負っていない。数では圧倒的に勝っているはずの『薔薇十字団』。しかし二年間剣を握っていなかった男一人に苦戦している。

と、そこでアーウエルの視界に複数の敵の動きが映った。

離れた所から銃口を向けてきた女が三人。

槍の先端を心臓に向け迫ってくる男が二人。

それは今まで防戦を余儀なくされていた『薔薇十字団』初の攻め。最初に動いたのは槍を持った二人の男達だった。両脇から同時に迫る鋭い切っ先に、アーウエルは臆する事なく『術式』を発動する。

ポケットの中から取り出したのは一枚の紙だった。喫茶店などでコップの下に敷くコースターのような正方形の紙だ。

アーウエルはその紙を地面に落とし右足で踏み潰すと、左側から迫る男に黒剣の切っ先を向ける。

迫る二人の男達は気付いていないが実はこの時、既にアーウエルの『術式』は発動していた。もし相手がガルト並の実力者、又は元^マ力の流れを読み取る事のできる術者だったのなら、この『術式』は通用していないかもしれないが、それ以外の術者に彼の『術式』を見破るのは極めて困難。なぜなら彼の『術式』は気付かれない事にこそ意味があるからだ。

普通の視界では絶対に、感覚では限りなく感じ取る事のできない六芒星を基盤にした『陣』が、アーウエルの右足を中心に半径五メートルまで展開された。

既に『陣』の中に入り込んでいる二人の男達には、数秒後の自分たちの姿は想像できない。

同時、標的であるアーウエルを刺殺するべく、二つの矛先が両側から突き出され、

アーウエルが消えた。

比喻でもなく、何かの例えでもなく、言葉通りにパツと消えたのだ。

「——ッ!？」

突然、貫くはずだった標的を見失ったため行き場を無くした二つの矛先が、正面から衝突した。左側の槍が衝撃に押されて跳ね上がり、勢いを消しきれなかった右側の槍がそのまま男の脇腹へと突き刺さる。

「ぐ、があッ！」

短い男の悲鳴が聞こえた。

しかし、それは仲間の槍に腹を刺された男のものではない。仲間を刺した方の悲鳴だ。

「相打ち、ご苦労さん」

言ったのは、消えたはずのアーウェル。彼は仲間を貫いた男の心臓を半剣で背中から突き刺し、引き抜いた後だった。黒い刀身に付着した赤い液体を真横に振るって払い落とし、一歩足を引く。

「俺も一応術者だからな。真正面から突っこむだけのバカじゃねえんだよ」

その言葉が、倒れていく二人の男に届いているのか、彼には分からない。

もとより彼らの死に捧げるために言った訳ではない。

と、今度は三人の女が、二〇メートル先で構えている歯輪銃（火縄銃的なもの）の銃口から火花が吹いた。

同時に放たれた三つの弾丸だが、しかし『狙い』であるアーウェルを貫く事はなかった。

なぜなら、既に『狙い』はその場からまた消えていたからだ。

「俺が今まで、何も考えずに暴れまわっていただけだと思っただけか？」

感情の籠っていない冷たい音色が響く。

アーウェルが現れたのは、弾丸を放った一人の女の背後。

鉄で出来た銃身を切り落とし、そのまま女の腹部を蹴り飛ばして
気絶させると、アーウェルは半剣を肩に担いで見下すような視線を
『薔薇十字団』全体に向け、

「お前らには、神に祈る時間すら与えねえ。一人残らず^{なぶ}翫^{なぶ}って殺す
！！」

そして放った言葉は死の宣告。

3 激突

ユアン＝バロウズは思う。

（俺の目的はキャロルを助け出す事）

一〇〇メートルほど先で倒れている少女に視線を向けるが、気を失っているのか彼女が動く気配は全くない。

（でも先にこいつを止めなきゃ意味がない）

だから、彼は戦う。

一人の少女を救うために。拳を握って体勢を低くし、己の敵を見定める。

（力押しだけで勝てるかどうかって言うたら……、まあ普通に考えて無理だろうな）

敵の武器が今まで通りの短剣ナイフだったのなら、話はまた変わってくるかもしれないが、鉄の鎧の上からでも人体を叩き潰す事が出来る金属製打撲武器メイスに、直撃した物を爆破する術式を組み込まれていては、はつきり言って手の出しようがない。

（でも、必ずどこかに抜け道があるはずだ）

根拠はある。最初の爆発と先程の会話で不可解な点を幾つか見つけたから。

しかしそれを確かめるためには、もう一度あの爆発を受ける事になるかもしれない。

（ビビってる訳にはいかない。俺の知識が正しければ何とかなるはずだ）

そのための、先制。

ユアンは握っていた両の拳を開き、掌サイズの風の渦を形成した。それは次第に薄くなり、鋭くなって刃^{やいば}となる。

チャクラムと言う武器を連想させて貰えば分かりやすいだろう。

チャクラムとはCDやDVDのような円の形をした手裏剣みたいな物。

彼の手の中にあるのは正にそれだ。鉄ではなく空気で創られているが、その用途は変わらない。

彼は一度両腕を後ろに引き、狙いを定める。

対する敵はメイスを肩に担ぎ、掛かって来いと言わんばかりの態度だ。おそらく挑発しているのだろう。

ユアンは後ろに引いていた両腕を振るうと同時に、チャクラム型の空気の武器を投擲する。

速度は弾丸の二分の一以下。だがその利点は視界で捉えにくい事であり、今の場合はただの陽動。致命傷を狙っている訳ではない。

ユアンの両足に風が渦巻く。

そして地面の乾いた土を吹き飛ばし、先に飛ばしたチャクラム型の空気の塊を追うように狙いに迫る。

敵の動作は至って単純だった。

四〇キロはあるだろうメイスを片手で軽々と振るい、回転しながら飛翔してくる風の刃を真横へ一線し消滅させる。そのまま両手に握り直すと新たに迫る自身の敵を、爆破の撲殺武器で叩き潰すべく大きく再び真横に振るった。

バットで球を打ち返すが如く。

高速かつ強大に。
大気を強引に引き裂きながら。

ブオンッ！！ と壮大に空振った。

「……ッ！？」

ホームラン
直撃確定だったはずの一振りが、球であるユアンの体が急激に高度を下げたせいで、何もなくなつた空間を通り過ぎたのだ。

ユアンが敵の目の前で着地するのと、敵がメイスを振り切るのは同時だった。

風を纏つた拳を、両手でメイスを握っている為防御が出来なくなっている敵の顔面に突き刺そうとするユアンに対し、敵はメイスを引き戻して自身の敵に振り下ろそうとする。

（いけるか……ッ！？）

「ぐ——ッ！」

奥歯を噛み締めた両者。

固く握つた拳を突き出そうとするユアン。到達まで約一秒弱。

完全に振り切つたメイスを早急に引き戻し、再びユアンに叩きつけようとする敵。到達まで約二秒強。

一秒弱VS二秒強。

秒単位の戦闘。

結果は一目瞭然。

そして、

敵の腕が異常な動きをした。

人間としての腕の機能が異常なのではない。

腕を動かした速さが異常なのだ。

四〇キロ以上のメイスを握っているのにも関わらず、敵はそれを

〇・三秒で真横から真上に掲げ、

「
」

〇・一秒で、何かを思う暇もなくユアンの頭上に振り下ろされた。
地面を割る振動と大気を裂く爆音が鳴り響いたのは、その〇・五
秒後。

4 強敵への宣言

秒単位の死闘を繰り広げているのはユアンだけではない。

ガルトVSキファーフ。

率直に言おう。

この二人の死闘はユアン達のそれを更に凌駕していた。
斬って突いて、防いでかわして。

そんな、戦闘において当たり前の動作を、彼らは一秒間に一〇回は繰り返していた。

一見すれば二人は均衡しているように見えるだろう。

(ぎ……ッ！)

だが、蓋を開ければどちらが優勢なのか、明白だった。

(い、の……)

「腐れジジイがアああああああああああああッ！
ッ！」

キファーフは極めて珍しく絶叫していた。

今までの攻防とは違う、大振りな一撃。ガルトを遠ざけようとするその動きが、逆に仇となり大きな隙を作ってしまう。

体を軽く逸らしキファーフの渾身の一振りを軽々とかわしたガルト。

そして左脇腹へと。

両手で握られた白い大剣が、キファーフの上半身と下半身を切り

離すため横薙ぎに振るわれる。

「——ッ！」

鉾を回し辛うじてその一打を防いだが、衝撃に負けて地面から両足が離れていた。

（ぐ、ちくしょ……ッ！）

抗いようのない力が鉾の刃に掛かる。一方からの強烈な負荷によって空気が壁のように感じられる。

ガルトの腕の筋肉が爆発的に膨らむのが分かった。六〇歳近い老人の腕とはとても思えない、化物のような太さ。怪物のような引き締め。

そしてキファーフの体は上へは行かず、地面を抉り粉塵を掻き立てながらぶっ飛んだ。

「ごがアあああッ！！」

背中や腕、脚が摩擦により削れ、体からの振動により脳が大きく揺さぶられる。地面から抵抗が掛かりながらも二〇メートルは進んだ彼の体は、粉塵の中、鉾を手放し仰向けになって動かない。

（腕が……、重い）

乾いた喉。揺らぐ視界。

（体中が……、痛え）

霞む思考に抜ける力。口から吐き出された物は粘着いた赤黒い痰。

（あのじいさんの一撃一撃が、体の芯まで響いてきやがる。受ける度に、体の中から壊されてってる感じだ）

例えばここで立ったとしても、同じような攻防が続くだけだろう。そうなたら自分はどうなってしまうのか。そんなものは容易に想像が出来る。

体の芯から碎かれて、殺される。

「……上等じゃねえか」

だが、裂かれた口から放たれた言葉は、老人への挑戦だった。キファーフはゆつくりとその場に立ち上がり、地面に転がっている己の銚を再び手に取る。

「体の芯を碎かれて、一步も動けなくなるその時まで、俺は銚こいづを放さねえ。全力で、あんたを潰す」

目の前でカーテンのように立ち込める粉塵を、彼は一振りで払い飛ばし、再び視界に現れた老人に宣言する。

「だからあんたも」

自分が抉った地面の先に立っている、強敵に。

「本気で来いッ！」

その首を取ると。

この時、今まで何をするにも無表情だった老人が、一瞬だけ笑ったように見えた。

そして、二人の攻防は再び会^{かい}された。

5 戦局の一転〔前編〕

濛々と立ち込めていた粉塵が、少しずつ薄らいでいつている中。当初二秒強は掛かるはずだった一連の動作を、僅か〇・四秒で成し遂げたラージーは、

「な、に？」

目の前の状況に言葉を失っていた。

理由は明快。

叩き潰したはずのユアンの残骸が何処にも見当たらないからだ。

彼は確信していた。自身の勝利を。わざと懐を空ける事で敵を誘い込み、その上で必殺の一撃を叩き込む。自身が考えた作戦は完璧だったと自負していた。

実際に手応えはあった。人間の骨を砕く、あの独特な触感。肉の中で弾ける骨の音。

それらの感覚は、その後起こった爆発によりすぐに吹っ飛んでいったが、確かに覚えている。記憶として。

だが、いない。血の一滴すら残っていない。

（どういう事だ……）

何らかの術を発動したのか。しかし発動より早くメイスが振り下ろされ、敵はそれを受けてから消えた。

考えられる可能性としてはそれがベスト。

（何にしても、奴はまだ近くにいます。どこかで怪我を癒してるのかもしれねえ）

攻撃が当たった事は確實。致命傷になっているのかどうかは分からないが、長引かせると厄介だ。

そう判断したラージーは地面にめり込んだメイスを引き抜こうと思ひ、利き腕である右に力を込めて、

左斜め後ろから気配を感じた。

（——ッ）

視界で確認する暇はなかった。

それを殺気だと感じた彼はメイスを素早く引き抜き、そのまま気配を感じ取った方向へ大きく振るった。

大気を引き裂く凶音。

そして次の瞬間には、

ゴンッ——ッッ！！ とメイスが鐘のように鳴っていた。

鳴らしたのはユアン・バロウズの拳。

鉄の棒と人間の拳が衝突し、互いに大きく弾かれる。

（ぐ……っ！）

鐘を鳴らした時に起こるような強烈な振動が獲物全体を震わせ、ラージーの掌に大きな負荷を掛けた。

（人間の拳が……、鉄を鳴らした！？）

鋼鉄の手袋でもしていなければ決して成しえない芸当。しかしユアンはそれを素手の拳で成し遂げた。普通なら拳の方が潰れていなければいけないはずなのに、彼の手の甲には岩を殴った時に出来るような削り傷程度しか負っていないかった。

（こいつ、鉄塊を砕く気なのか——！？）

そう思わせるに十分な一撃が、ユアンが地面に着地すると共に再び拳となって握られる。

対する弾き返されたメイスはラージーの頭上。つまり胴体はまたもがら空き。隙だらけと言うことだ。

（このままじゃ間に合わねえ！）

先ほど腕を高速で動かしたあの術式を発動させるしかない。そう判断した彼は右肩に刻んだ強化術式の『陣』に元力を送り込もうとして、

鼻を中心に鋭い衝撃を感じた。

それが顔を殴られた事だと判断した時には、彼の体は真後ろに飛んでいて。

地面から弾みを受けた。体がバウンドし乾いた大地に背中を合わせる。鼻の先端に疼痛な痛みが走った。鼻の骨が折られたのだ。

「がッあつ！」

短い悲鳴を上げ、ラージーは地面に蹲る。敵前だと言う事も忘れ、武器を手放し、湧き水のように血液が溢れ出してくる鼻を両手で押さえている。するとラージーの耳朵に、少年の声が入って来た。

「……やっぱりそうだ」

何かを確信したかのような声を放ったのは、ユアン＝バロウズと言う少年。

「お前は防御術式なんて使っていない。それどころか自分の使っている術式に制限を掛けてやがるな」

痛みのせいで真っ白になっていたラージーの思考が、その声によって呼び覚まされる。彼はぼんやりとした視界の中にユアンを映す。

「お前の扱っている術式が、『神の十二聖書』系列の術式だと聞いた時から変だとは思っていたんだ。あの術導書バイブルに載っている術式、特に『ゲブラー』に載っている術式は、例え術式の密度を一〇〇〇分の一に薄めても、その威力は家の一つや二つなんて簡単に吹っ飛ばせるほどのはずだ。

なのにお前のそれはなんだ？ 地面を軽く挟む程度の破壊力しかねーじゃねーか」

そもそも『神の十二聖書』の術式は簡単に手に入るものではない。それはラージーも分かっている。

十二冊の内の九冊は、この世界で最大の都である『宗教都市エルサレム』のエルサレム大図書館に保管されている。そこには、他にも様々な術導書バイブルが保管・管理されており、中には世界の構造そのものを破壊しかねない危険な書もあるので、警備体制は世界でも一位二位を争うほどに厳重だと言われている。

そんな所から盗み出すのはほぼ不可能だ。

残りの三冊は未だに行方が分かっていない。五〇〇年前から所在が掴めていないとか。

「悪いが俺はこの目で『神の十二聖書』の術式を見た事がある。と言うかその術式を使っている人を知っているし、その術式を習得しようとした奴がどうなったのかも知っている」

どうやってそれを手に入れたのかは知らないけど、とユアンは付け足した。

強力な術式には必ずリスクがある。

『神の十二聖書』に記載されている術式『セフィロト法』は、習得しようと思えば誰でも習得できてしまう、至って簡単な術式でもある。ただ、習得はできててもそれを実際に行使できるかどうかはまた別の話で。なぜなら九九・九九九九九%の確率で術者は習得した直後に命を失うからだ。

例え運良く生きのびたとしても、絶対に無傷では済まない。脚や腕を無くしたり、内蔵の一つ二つを無くしたり。と、対価として必ず何かを失う。

なによりこの対価が途轍もなくふざけたもので、それを無くしたらその者は生きていけないようなものばかりを奪っていくのだ。人体で言うところと心臓だったり。心で言うところ自分の命よりも大切な人の命だったり。

「これは俺の感覚的な判断だが、お前の術式は確かに『神の十二聖書』系列のものなんだろうな。そこでその術式を習得する際に、お前は何かを失ったのも確か。

それが自分の体の一部なのか、それとも他の何かなのは知らないが、でもまあご苦労な事だよな？」

「……」

「それ相応の対価を払ったのに、お前はその術式をコントロールできなかった。お前には強大すぎたんだろ」

ユアンの声には感情が乗っていない。ただ、その言葉は明らかに相手を蔑むものだった。

（この野郎……ッ！）

ラージは地面に転がりながらユアンを睨むだけ。

「だから制限を付けた。おそらく爆破の威力を最小限にし、爆破によって起こる衝撃を他の術式によって操作する。衝撃を操作できれば爆破の中にいても、自分のいるところだけを安全地帯にすることができるから」

爆破の威力を最小限にしたのは、あまりに衝撃が大き過ぎると操作できないから。そして何より、威力を最小限にしても十分な殺傷能力を持っていたから。それと操作できる衝撃は『レイヴァンシュラーク破滅の衝撃』によって生み出されたモノのみ。

それらの事は言葉にすら出していないが、ユアンは分かっていると思っ
ていいだろう。

「ここまではある程度予想が付いていたんだ。問題だったのは爆破が起こる条件。こればかりは体張って確めるしかなかったな。御蔭で腕一本やられた」

言いながらユアンは左腕を軽く振り、ラーギーはそれに視線を向ける。

（完全に折れてるな。ざまあ見やがれ）

遠目からでもはっきりと分かる。ユアンの左腕、正確には前腕の中心部分が青黒く腫れていた。相当ひどい内出血を起こしているのは明快だ。

「ズバリ言って、お前の術式は地面を叩かないと発動しない。そう
だろ？」

「……、」

「俺は最初、爆破のタイミングは自分で操作しているのかと思って
いたんだが、俺の腕にメイスが当たっても、俺の腕は吹っ飛ばな
かった。その後、俺はすぐにお前の後ろに回避したんだが、ここで
よっとおかしな事が起こってな。メイスが地面を叩いた瞬間、爆
発したんだよ。俺の腕には当たっても爆発しなかったのに。何で
だろ
うな？」

まあそんな時に、お前が爆破を防いでるんじゃないかって操
ってるんだ
って分かったんだけどな。そう付け足すとユアンは近くに落ちて
いた短い木の棒を広い、Ｔシャツの袖を破いて、腫れている左
前腕
部に巻きつける。

「そこで、俺はある仮説を立てた。それは――」

——『破滅の衝撃』レイヴァンシユークは地面を叩いた場合にしか起爆にしないんじゃないのか。

「案の定、俺の仮説は大当たり。お前のメイスと真正面からぶつかった俺の拳は爆発しなかった」

右手と口を使って、木の棒を左腕と一緒に破いた袖で固定し、即席ギブスを作ったユアン。

「そうでもしないと、誤って自分の体に触れたときに起爆するかもしれないから。そんな所だろ」

そんなユアンの推理を黙って聞いているラージーだが、彼は奥歯を砕く勢いで噛み締めていた。

（なんだ、こいつは）

彼には理解しえない。

目の前にいるのは、見た目はただの旅する少年だ。でも、

（こいつの洞察力、行動力は異常だ）

本格的に戦闘を開始してからまだ一〇分も経っていない。それなのに眼前に佇む少年はラージーの術式の構造をほぼ全て見抜いている。それに『神の十二聖書』の事をよく知り過ぎている。あれは確かに有名だが、中身まで知っている者は極僅か。誰でも知っている事ではない。

なのにあの少年は知っている。おそらく実際に『神の十二聖書』の術式を使っている本人以上に。

「よく出来た術式だとは思っぞ、実際。でも相手が悪かったな。俺は術式の構造を見抜くプロだ。術者が己の術式構造を知られるのは死に等しいってよく言っよな？」

ラージーは何も言い返せない。ただ地面の上に転がって黙ってそれを聞いている。

「宣言してやる」

何を思っでもなく、何をするでもなく。ラージーはじっと敵の睨みつける。

そしてユアンは言った。

「お前はもう、俺には勝てない」

戦局の一転を確定するように。

5 戦局の一転〔後編〕

（なーんて、ただの脅しだけど）

左腕に例えようのない激痛が走っている中、ユアンは相手の戦意を失わせようと必死に言葉を並べていた。折れた腕は木の枝と服の裾を使って固定しているものの、ぶっちゃけ応急処置にすらなっていない。

（これ以上闘えるわけねーだろ。絶賛左腕複雑骨折中だぞ。そんなんで動き回ったら痛みで気絶するっての）

それにユアンは別に術式の構造を見抜くプロなどではない。偶々相手の使っていた術式が『神の十二聖書』系のモノで、偶々その術式の事を人並み以上に知っていただけ。もし相手がエレメントやゴーム系列の術式を扱っていたのなら、彼は術式の構造を見抜けなかっただろう。

（つーかさ。これ言っちゃ本末転倒なんだけど……、術式の構造を見抜いて、何なの？ って感じなんだよね）

確かに術者同士の戦闘において、自身が使っている術式の構造を見抜かれる事は致命傷に等しい。だがそれは同じ実力を持つ術者同士の場合であり、そもそもユアンの場合は『術者』と言う前提から危うかった。

なぜなら彼は内包する元力マグナの量が少な過ぎるため術を使えないから。

そんな彼を果たして『術者』と呼んでいいものなのか。

（俺には相手の術式を見抜く事はできても、見抜いた術式に対処するための力がない。いや、対処は出来るかもしれない。でも俺の場合、対処する方法がかなり制限されるんだよな）

ユアンには術を使わずに風、大気を操る力がある。だが、それしかない。風しか操れない。

（こんな時、元力ちからがない自分が齒痒くてたまらない。だから――）

彼は望む。

心の底から。懸命に。

（お願いだからここはもう引いてくれーっ！！）

しかし、現実はそのなにごくはなかった。自分の思った通りに全ての事が進むほど、優しくはなかった。

倒れていたイッザラージが立ち上がったのだ。
左手で鼻を覆い、右手にメイスを携えて。

「……てめえは、何勝手に決め付けてんだ」

鼻声にはなっているものの、彼の声には気迫があった。今まで以上の威圧感が。

それに圧されてユアンは思わずたじろいでいた。

（さっきまでとは、違う）

何かが変わった。ラージーの何かが。はっきりとは分からない。でも、はっきりと分かる。

（こいつは、引く気なんて微塵もない。それどころか――）

戦意が、増している。

そう思った瞬間、遠くから何かが弾ける音がした。

とても不快な、気持ちの悪い音。肉が爆ぜたような、生々しい響き。

（な、んだ……？）

ユアンは思わず音のした方向に視線を向けていた。目の前に敵がいる中で、その敵から注意を反らす事がどれほど無謀な事なのかを、正しく理解した上で。

彼はそちらに目を向けた。

向けざるを得なかった。

そして、一人の少女が視界に映った。ブラウンの髪の色。セミロングヘアで毛先が外側へ若干ウェーブ掛かっているのが印象的な女の子。ユアンの助けるべき人。

ところが、今までと同じ倒れたまま。と言う訳ではなかった。

彼女は血を流していた。決して少なくはない量の血を。

「――」

瞬間、頭の中が真っ白になった。

どうして彼女が血を流しているのか。一体誰が彼女を傷つけたのか。彼はそれらの原因を一切思考していない。

何も考えず、ユアンは足を前に出し、少女の下へ歩み寄ろうとする。

だが、それを遮る者が自分のすぐ側にいる事を、彼は完全に忘れていた。

イツザッラージー。

呆然と歩いていくユアンを粉碎するべく、ラージーは飛び跳ねメイスを振り上げる。

対するユアンは自身に迫っている危機に気付いていない。彼はただ、少女の下へ足を進めるだけ。

結果、戦局は再び一転した。

6 優しい願い、暗い思い

どうして、こんな事になったのだろうか。

そう思った少女は、掠れる視界に己の体を映し出す。
出血は止まらない。衣服が赤に染められていつている。激痛に全身が覆われている。

流れ出す自分の鮮血を眺めながら、少女は再び思う。

どうして、こんな事になってしまったのだろうか。

最初はただ、嫌なだけだった。

少年の足を引っ張ってしまっている自分が。何も出来ない自分が。

これ以上彼を困らせたくなかったから、これ以上間違えたくなかったから、彼女は行動を起こした。

手足をロープで縛られて身動きの取れなくなっているこの状態を、打破するために。

自分の身が解放されたと知ったら、きっと今戦っている彼らの重荷も軽くなると考えたのだ。

抜け出す手段は考えてある。とても簡単、難しくない。この世界の人間なら誰でも持っている物を使うだけ。

それは、^{マグナ}元力だ。

なぜ『^{マグナ}術』ではなく^{マグナ}元力なのか。それには色々と事情があるのだが、その前に元力に付いて軽く説明しなければならない。

本来、元力^{マグナ}には人や物を物理的に害する力はない。相手を威圧させたり、幸福または不快な思いにさせたりする事はできるが、直接的に傷つける事はできない。元力^{マグナ}は飽くまで超常的な現象を起こすためのエネルギーなのであって、それ単体では何の効果もないのだ。

そんな元力^{マグナ}にも種類が存在する。

大きく分けて三種類。

じんりよく

人力・天力・魔力。

詳しい説明は省き、基本はこの三種類。どれも直接的な物体の接触・破壊等はいできない。

だが、どんなものにも『例外』と言うものは付き物で。

例えば、元力^{マグナ}だけで人や物を傷つける事ができたり。

例えば、その元力^{マグナ}専用の術式でないと術を暴走させてしまったり。

これらの性質を持つ元力^{マグナ}は異元力^{オドマグナ}と呼ばれ、それを持つ者は一億分の一ぐらいの確率で出現する、とても稀有な存在だった。そして、ここにいるキャロル^{マグナ}「マーキュリー」がその一億分の一人だったりする。

彼女の内包する元力^{マグナ}の性質は、前に挙げた二つの例えそのもの。元力^{マグナ}だけで物体を破壊でき、術式を暴走・暴発させてしまう。

そのため、彼女は術を使えないし、本来この世界の人間なら必ず通わなければならない、術の基礎知識を学ぶ『術師教育学校^{スキルスクール}』（通称スクール）にも行った事がない。彼女が術を行使する事で、周りに危害を加えてしまう恐れがあるからだ。

だが、今キャロルはここでその性質を逆手に取ろうと考えた。

彼女の両手両足を縛っているロープには『阻害術式』が組み込ま

れている。『阻害術式』は術者が術を発動させようとするが発動し、元力マクナの循環を阻害する、一般的な拘束術式だ。そのため、術者は術でそのロープに干渉する事はできない。

そこでキャロルは一つの事を思い付く。

『阻害術式』は術を発動する前、つまり元力マクナを練り上げると発動する。でも彼女の場合は術を発動させるに至らなくても、元力マクナだけでロープに干渉できるため、本来より動作をワントンポ削減できる。

簡潔に言ってしまうと、『阻害術式』が発動する前にロープを切断できるかもしれない、と言う事だ。

（まさか、こんな所でわたしの力が役に立つなんて、考えもしなかったよ）

自嘲気味にキャロルは思う。

今まで、この力のせいでとても辛い思いをした。

他の人、同じ歳の子ども達は当たり前のように使っている術。それが使えない事が。存在そのものが危険である自分が。

（小さな明りを灯すだけの術式も、わたしがそれを発動させると強力な閃光弾に変わってしまう。ロウソクに火を点けるだけの術式も、わたしは業火を出してしまう）

どうしても行き過ぎてしまう。制御の効かない力。

こんなもの無くしてしまいたいと、一体何度思った事が。

（もしかしたら、自分から使おうって思ったの、初めてかも）

それ程に、彼女はそれを嫌っていた。

でも、もしこの状態を打破できたのなら、この力があって良かったと思えるかもしれない。

（自分を好きになれるかもしれない）

そんな淡い期待を胸に、少女は自分の立てた、一種の賭けに近い推測を行動に移した。

息を吐き、気を沈め、意識を集中させる。

瞬間的に体内の元力^{マグナ}を両手両足に集め、『阻害術式』が発動する前にロープに干渉する。

元力^{マグナ}がロープに接触すると同時に、それに刻まれている『odstantia』と言う文字が光を放ち、

バチッ！！と何かが弾ける音がした。

手足を拘束していたロープが全て弾け飛んだのだ。そう。

少女のか細い両手両足首の皮膚と共に。

「い、ぎ——ッ——！」

血液と皮膚が散ると同時に激痛が感覚を蝕み、少女は悶絶した。跳ねた赤黒い液体は乾いた大地に染み付き、白かった少女の手足は生々しい真紅に彩られる。絶叫すらしなかったものの、押さえの効

かない出血と痛みに少女の意識は遠退いていく。

時に現実とは無慈悲な悪魔に姿を代える。

小さな少女の願いすら、ほんの些細な希望すら、弾き返し嘲笑う。

彼女の立てた推測は半分当たって半分外れていた。確かに彼女なら術を発動しなくても、元力^{マグナ}だけでロープを破壊する事ができる。そのため本来よりワントンポ行動が早くなるのは必然的だ。

しかし、彼女はここで大きなミスをしていた。

『障害術式』は元力^{マグナ}を練り上げる後と、術を発動させる前に起動する。簡単に言つと、

“元力^{マグナ}↓障害術式発動↓術式発動&ロープ切断”

と言った具合だ。この場合は障害術式が先に発動しているため、ロープからは抜け出せない。

そして、ここで『術式発動』が消えたとしても、

“元力^{マグナ}↓障害術式発動&ロープ切断”

となる訳で、『ロープ切断』が『障害術式発動』より早く行われると、一体誰が言い切れるのだろうか。

結果的に障害術式とロープ切断は同時に行われ、最終的に少女は両手両足を酷く負傷すると言う最悪な状態に陥ってしまった。

ところが、そんな彼女を更に追い詰める事態が、目の前で起こるうとしていた。

ロープが弾ける音を聞いて気付いたのか、一人の少年が自分に視線を向けていたのだ。ひどく歪んだ形相で、光を無くした瞳を。辛

い現実突き当たったかのような、絶望の表情で。

武器を握った敵がすぐ側にいるのに、それを一切無視して彼は覚束ない歩幅でこちらに近づこうとしている。

(……だ、め)

激痛に苛まれながらも、少女は必死に思う。

少年の足を止めなければならない。これ以上敵から注意を反らしていたら、取り返しの付かない事になる。だから来てはいけな、と。

だが、現実と言う高い壁は少女の思いを決して通さない。

彼女が声を出す前に、赤と黒の髪を持つ『敵』が再び進撃を開始したのだ。

敵は飛び上がり、少年の横合いに着地した。対して少年は、メートルもない至近距離に敵がいるにも関わらず、尚全く反応を示さない。そんな少年に敵は躊躇いなくメイスを振るい、容赦なく決るように腹を殴り後ろへ飛ばす。鈍い音が辺りに散乱し、赤い色が舞い散った。血痰を吐き、無抵抗のまま飛ばされた少年の体が罅割れた大地の上を転がっていく。

(……いや、だよ)

敵と少年の距離は二〇メートルに広がった。

それでも敵の強襲は止まない。自分の背後の地面をメイスで叩き起こった爆発の衝撃を利用して、高速で少年の元へ迫る。

それに直面している少年は腹を抱えて上半身を起こした所。ようやく正気に戻ったようだが、太い鉄の棒で腹を思い切り殴られた彼に、追撃を加えようとしている敵を対処できるとは思えない。

破壊を生む凶器が弧を描き、再度標的に襲い掛かる。

撲殺の一撃を回避するため、標的である少年は転がるように体を横合いへ反らす。

メイスが大地を抉った。

ほぼ同時。爆破した。

発生した爆発の衝撃は全て少年のいる方向へ。

「——や、めて」

そんな弱弱しい少女の声など、噴出した轟音と粉塵、悶え苦しむ少年の絶叫に掻き乱されて消えるだけ。

ボロボロの体が回転しながら宙を舞っていた。体からは力が抜け、衝撃に運ばれるがまま滑空する。血の尾を引き、左腕の即席ギブスが外れていく。誰がどう見ても彼には既に意識はなかった。

それなのに、敵は追撃を止めない。

掻き上がった灰色のカーテンの中から太い鈍器が勢い良く突き出てきた。それは空中を浮遊していた少年の背中に直撃し、骨が砕けるような音と共に彼の体を更に大きくぶっ飛ばす。

「もう、やめてよ……」

不安定に揺れる力の無い声は、やはり誰にも届かない。少年が傷を負う度に、胸の奥が死にそうになるぐらい締め付けられて、死んでしまいたいと思ってしまうほど苦しかった。

一体、少年は何度地面の上を転がったのだろうか。

彼の体には無数の切り傷や痣などがあり、まるでボロ雑巾のようだった。息をしているのかすら怪しい状態だ。

そんな少年を見て、少女は涙を流し、ただ嘆く。

（このままじゃ、死んじゃうよ）

また、自分のせいで大切な人を亡くしてしまう。以前と同じ、目の前で。

いやだ、と現実を否定したがる少女の心は、底から滲み出てくる『感情』に少しずつ浸かっていく。

そこで、倒れている少年の指が微かに動いたのが分かった。奇跡的にも彼は生きているようだったが、ただそれだけだ。死んでいないだけで彼にはもう立ち上がれる力はない。だらしく投げ出された体に、気力など感じられる訳がなかった。

それでも、敵は追撃を止めない。

メイスを握り、粉塵の中からゆっくりと歩を進める破壊者は、決して立ち止まらない。

（死んじゃう……）

完全に標的の息の根を止めるまで、あの敵は進撃し続ける。否、もしかしたら息を止めたとしても、敵の暴力は治まらないかもしれない。少年を原型すら残らない肉塊に変えるまで、握った武器を下ろさないかもしれない。

それ程に、敵は狂っていた。

（助け、なきや……）

少女の底から溢れてくる『感情』は、次第に心を満たしていく。少年を救いたいと言う思い。死なせたくないと言う願い。少年を傷つけている敵への怒り。許さないと言う憎悪。

（助けなきや、あの人を……）

それらの思いは少女の心を埋め尽くし、集約し、混ざり合い、どろどろの『負』へと変わっていく。手足の痛みなど彼女は当に忘れていた。

視界が狭くなっていく。自分と言う存在が他の何かに奪われて行っているような感覚がする。だが、彼女はそれに抗おうとは思わなかった。それどころか、それに全てを委ねようと思っすらいる。

何故だろう。

同じような感覚を以前にも感じた事がある。

あの時はどんな気分だっただろうか。

思い出そうとして、だが止めた。そんな事などどうでもいいと思っただからだ。

今やらなければならない事はただ一つ。

「——助けなきや」

視線の先にいる一体の敵を粉碎する事。

そのためならば、少女は何も躊躇わない。どんなモノにも頼る。

こうして、その小さな体に秘められた強大な『狂気』の翼は、羽を広げた。

7 範囲移動（レインジームーブ）

陽は沈み、完全なる闇に姿を変えた荒野の中に、複数の光を灯す廃墟郡。

戦場はその中心。廃墟の建物に囲まれた何も無い小さな広場。そして、轟々と立ち上がる粉塵を背に、一人の男が少年に迫る。

男の名はイツザ＝ラージー。

少年の名はユアン＝バロウズ。

元々の両者の実力差はそれ程開いてないにしろ、ダメージ・疲労の蓄積量は比を見るほどに明らかだった。

ラージーは鼻の骨を折られ、顔面の下半分を鮮血に塗られている。しかしユアンは重さ四〇キロのメイスに腕・腹・背中を殴打され、術式『破壊の衝撃』レイヴァッシュラックの爆発を合計二回、それぞれまともに受けた。腕に冠しては複雑骨折中だ。

そんな彼に、迫り来る敵を対処するだけの力は残っていない。

ラージーの、ゆっくりと進んでいた両足が次第に速度を増していく。メイスを握った腕を引き、横たわっているユアンにトドメの一撃を浴びせるため、真っ直ぐに突き進む。

それを回避するだけの体力すら、ユアンには残っていない。

「く、そ……っ」

（こんな、ところで）

俺は死ねない。

思ったと同時に、必殺の一撃が振り下ろされた。今までとは違う。完全なる頭蓋きようがいを狙って。

瞬間、耳鳴りのような金属の甲高い音が轟いた。

当然、人間の頭部を叩き潰した音ではない。ユアンの頭は金属製ではないからだ。

それは、この場に全くそぐわない衝突音だった。まるで、何かが迫るメイスを遮ったかのような、武器を受け止めたような音だった。

「お前は何をやってんだ。あんだけ息巻いてたくせによお」

一つの声が語りかけてきた。ユアンは音源を辿っていき、必然的に前を向く。

金属製打撲武器を黒片手半剣で真正面から受け止め、屈強な両足で立っていたのはアーウェル「ローマー」と言う男だった。しかし彼は『薔薇十字団』の他の団員約二〇名と戦っていたはずだ。なのに、何故自分の目の前にいるのか。

「……どうして、ここに、いるんだ」

掠れる声でそう言っているものの、その理由は薄々考えがつく。

「あ？ 全部片付いたからだよ」

何気なく言ったアーウェルの一言に、それを分かっていたにも関

わらずユアンは絶句してしまった。

（あれだけの敵を、この短時間で全て……）

アーウェルと知り合ったのはつい先ほどで、彼の事等ユアンは殆ど知らない。だが、雰囲気で察しがつく。この男はガルト同様とんでもない化物だと。

ギチギチと、メイスと半剣の接触点から音が鳴る。

「まあ色々言いたい事はあるが、今はこっから移動するのが先決だな。お前を庇いながら闘うのは面倒だし」

言ったアーウェルにユアンは襟元を掴まれると同時に、今まで無言のまま牙を向けていたラージーが口を開く。

「逃がす訳ねえだろ」

メイスに力を加えたらしく、それに押されてアーウェルの両足が地面を削りながら少しずつ下がっていく。

ところが押されているにも拘わらず、彼の表情には笑みがあつた。

「あんま獲物に力を入れない方がいいぞ？　きっと怪我するからな」

「なに？」

訝しげな視線を向けているラージーに、アーウェルは笑みを崩さない。ユアンにも彼の言っている事がサッパリ理解できず、ただ見上げているだけだったが、

「お前、『^{レインジムープ}範囲移動』って知ってるか？」

その言葉の意味を深く考える暇は、なかった。それより早く状況が、目の前の風景が変化したからだ。

メイスで半剣と交えていたラージーが、瞬きを一回した後突如視界から消えていた。

ほぼ同時、小さな振動が地面から伝わる。

「……は？」

緊張感のない声が口から漏れた事を自覚しながらも、ユアンは起こった事態を飲み込めずにいた。

（敵が消えた……？ いや、何かが違う）

全体的に、何かが違う。

今まで闘っていた場所は四方から『光浸樹』の光に淡く照らされていた。しかし今はそれがない。暗い部屋の中、豆電球の光を消したかのように、辺りは暗闇に染まっていた。それに以前まで近くには無かったはずの、崩れかけの壁がすぐ隣に立っている。敵が消えた事で周りの状態まで変わっている。

これは明らかに異常だった。人間が一人消えただけでこれだけの変化が起こるとは到底思えない。

（アーウェルがさっき言っていた事。レインジムープ……）

頭の中でその言葉を反芻していたユアンは、そこでようやく気付いた。

「……そう言う事か」

「お、何か気付いたようだな」

アーウエルの声は後ろから聞こえて来た。ユアンは体を起こし隣にある壁に背中を預けると、目の前の位置に移動してきたアーウエルに語りかける。

「移動したのは相手じゃなくて自分だった。そう言う事だろ？」

思えばどうしてすぐ気付かなかったのか。周りが移動したのではなく自分自身が移動したのなら、周りの風景がそのまま変わっていても不思議はない。

「そう言う事だ」

アーウエルは半剣を肩に担ぎ若干自慢げに言った。

「ついでに『レンジムーブ範囲移動』ってのは、術式を刻んだ陣と陣の間を、空間を越えて移動する空間移動術式的一种。つまりそれを使っただけだろ」

「俺の場合はその前に『オール』って付くんだけだな」

本人曰く『オールレンジムーブ諸範囲移動』だとか。

一般的な『レンジムーブ範囲移動』は同じ術式を刻んだ複数の陣の間をワープ

する術なのだが、彼が扱っている物は、一定距離に元力マゲナで創作した、視界では捉えられない巨大な陣を展開させ、その範囲内ならどこにでも一瞬で移動できる、と言うものらしい。

簡単に言くと、自分で創作した円の中ならどれだけ距離が離れていようと一瞬で行きたいところに行ける、と言う事だ。

「とまあそんな感じなんだが。それだけ聞いてるとヤバイぐらい万能な術だと思う奴もいるが、もちろんこいつにも使用条件つてのがある」

一つ、移動させられる質量は276キロまで。

二つ、陣の最大半径は二〇〇メートル。

三つ、移動させられる物質は術者本人と術者が身に付けている物、触れている物のみ。握っている物や、離れた所にある物だけを移動させる事はできない。

四つ、移動できる範囲は陣の内部でも術者の視界に入っている場所のみ。死角へは移動できない。

「これじゃあ陣の内部ならどこでも移動できるってのは嘘になっちゃうな」

それでも『オールレンジムーブ諸範囲移動』は強力な術式だとユアンは思う。もし敵がその術式を使って一瞬で自分の目の前に現れたら、対処できるとは到底思えないからだ。

「説明はこれで終わりだ。あの爆発野郎は俺が相手するからお前はここで休んでろ」

「俺なら、まだやれる」

「やれるかボケ。ボロボロだろうが。後ろ見てみる。今のお前にあれの相手が出来ると思うか？」

顎で後ろを示すアーウエルを見てユアンは後ろ——壁の向こう側を覗き込む。

視線の先にいるのは一匹の野獣だった。自分の命を狙っている狂った敵。濛々と込み上げている粉塵が敵の狂気を更に際立たせている。

「理性を、なくしてるのか？」

そう思ってしまうほど、あの敵の姿は禍々しかった。

「いいや。あいつは確り理性を保ってるぞ。爆発の衝撃をコントロールしていた」

「？ あんたはあいつの術式を知っているのか？」

「見てたからな。奴の使う術式はある程度解析できた」

「……」

また言葉を失ってしまった。

この男は一体どれほどの実力を持っているのか。ユアンには想像すら出来なかった。

彼の言った事はつまり“二〇人以上の敵を相手にしながら、離れた所で闘っていたユアンの敵を観察していた”となる訳で。

本来、今現在闘っている敵から注意を反らす事は死に直結している、と言っても過言ではない。しかしアーウエルはそれをしながら

も軽々と敵を殲滅し、ユアンを助けた。

自分なんかとは、全てが比べ物にならない。

一人の男として、その事実は途轍もない屈辱と惨めさを与えてくる。

「……でも、それがなんだ」

ところが、全てを完璧に成し遂げたはずのアーウエルの表情には、無念の色しかなかった。

「術式が解析出来ても、敵を全て倒しても、俺はあの子を助けられなかった……っ！」

その言葉にユアンの表情が変わった。

「そうだよ。そもそも何であいつは血を流してんだよっ！」

この事態の全ての元凶、とでも言うべきか。少女はなぜ負傷してしまったのか。別の敵から攻撃を受けたのか、戦闘の余波を受けてしまったのか。

しかしアーウエルはどれも違うと言った。

「俺はずっとあの子を見ていた。誰よりもあの子を優先して見ていた。だから言える。あの子の傷は別の誰かがやったものじゃない」

突然、何の前触れもなく少女から血が舞った。それを見ていたアーウエルも、何が起こったのか分からないと言っている。

「何だよそれ、意味わかんねーよ」

「嘆いてる暇はないぞ。一刻も早く残りの敵を始末して、あの子の傷を治療できる所まで連れて行く。唯一の幸いは残りの敵が後二人
って事だけだな」

確かにアーウエルが言っている通り残りの敵は二人で、戦況的にはユアン達の圧倒的有利だ。

そのはずなのに、ユアンの心は落ち着かないでいた。

「……」

（なんだ、この胸騒ぎは……）

事が上手く運び過ぎているような気がする。

それに少女の負傷を目にしてから、胸の中の焦燥感が拭われない。そんな彼が抱えている言い知れない不安の正体は、案外早く明かされる事になる。

そう。

「——あはっ」

背筋が凍てつきそうになるほどの強大な気配と、少女の不気味な笑い声と共に。

8 一筋の光（レイオブライト）

「そろそろ、頃合かの」

星空の下、ガルトの声が響く。

彼の前には瓦礫の上に転がっている『薔薇十字団』の団員、^{メンバー}キフ
アーフ・スイナンがいた。

（……くそっ）

内で吐き捨てたのはキフアーフ。

これまでの戦闘は、ガルトの圧倒的な押しによるキフアーフの防戦一方だった。反撃の隙すら与えぬ老人の剣戟に、彼は攻める事が許されなかったのだ。

キフアーフは思う。

（何も変わってない）

戦闘を開始した当初と状況は全く変化していない。それどころか、ダメージ的に相手との距離は増すばかりで、悪化していると言っても過言ではないだろう。

自分からあれだけ威勢の良い啖呵を切っておきながら、キフアーフは老人の本気を受け止めきれずにいた。

（いいや。あのじいさんはまだ本気を出していない）

これから、出すつもりだ。

雰囲気分かる。

ゆつくりと天に向けて突き出された大剣の切っ先から、じわじわと滲み出てくる膨大な元力^{マクナ}。空から降る紫外線のような、防ぎようのない威圧感が皮膚に突き刺さってくる。

何らかの術を発動させようとしているのは明白だった。

キファーフは瓦礫の上から切り傷だらけの体を起こし、鉾を握って立ち上がる。そして直ぐにガルトの声が聞こえてきた。

「本当はお前さんから挑戦を受けた時に発動させたかったんじやが、何せわしの術式には使える環境と言うものがあってな。明るいと意味を無さんのじゃよ」

丸い月。満天の星空。廃墟に取り付けられた無数の『光浸樹』。

太陽が完全に沈んでも、辺りは仄かに照らされている。

「じゃが、この程度の光ならばわしの力だけで、どうにでも出来る。と言う事で見せてやろうじゃないか。お前さんの要望どおり、わしの本気をな」

ガルトは口元で小さく笑みを浮かべると、自ら視界を封じた。並行するように天上へと掲げていた白い大剣からもパツと圧迫感が消え。

そして静かな声で告げる。

「——一筋の光、発動」
レイオブライト

瞬間、大剣から何かが炸裂した。

ほぼ同時、廃墟中に取り付けられていた二〇〇もの『光浸樹』が甲高い音と共にガラスの如く全て弾け飛び、黄金に輝く月と夜空を埋め尽くしていた星の光が、――一瞬にして全て消えた。

「……っ！」

それは完全なる闇が訪れた事を意味していて、キファーフが更に不利になった事を告げている。

（真っ暗で何も見えねえ……っ。それ以前にあのじいさん、星や月の光まで消すってどういうでたらめだ！ 天空でも掌握したってのか！？）

術の常識を軽く逸脱しているガルトの術に、キファーフはただ吃驚するだけ。

それもそのはず。自然環境そのものに影響を及ぼす術はかなり強力で、何より極めて珍しい。理由はその殆どが強力過ぎる故、禁術に指定されているからだ。

「言っておくがわしは禁術など使っておらんぞ。術師なら考えればすぐ分かる。簡単なトリックじゃよ」

暗闇から響いてくるガルトの言葉にキファーフは瞬時に身構えし、即座に相手の位置を掴み取ろうとしたが、

「おいおい、そんなんでいいのか？ しっかり構えんとお前さん……、死ぬぞ」

背筋に寒気が走り、体が一瞬固まった。

そのため、突如目の前に現れた一線の光に、キファーフは反応で

きない。

己の首と胴体を切り離すべく迫る白光した刃に、無様に鉾を構える事しかできない。

しかし実際に自身の首が落とされる事はなかった。

キファーフの背後から、膨大な閃光が注がれてきたからだ。

廃墟を塗り潰していた闇が一気に拭われる。

それはつまりガルトの姿が視認出来る事を意味していて、突然照らされ現れた己の敵に、彼は先ほどとは違って戸惑う事無く瞬時に斬り掛かっていた。

鉾を再び構え直し、いきなりの閃光に怯み動きが止まった老人を刺殺するため、全力で突き進み渾身の一振りを放つ。

そして本来なら腹部を両断していたその一撃は、しかしガルトの右腹部を浅く切断し、矛先を赤く染めただけ。

（あの体勢でもかわされた……！）

そのまま左側に流れる老体だったが、倒れる事は決してなかった。両足で踏ん張り、傾く体を平行に修正すると、身を捻り更に輝きが増した大剣を横薙ぎに振るう。

それは今度こそキファーフを斬首するコースだった。

「——ッ！」

彼に迷っている暇はなかった。高速で迫り来る相手の一撃が、今までとは格の違う破壊的なものだと感じ取ったキファーフは、瞬間

的に自身の持つ最強の術式を発動させ、共に鉾を振るう。
そして、

大剣と鉾が衝突し、膨大な衝撃波が空間を裂いた。

視界を覆う光と、鼓膜を貫く轟音、皮膚を焼く熱量が連続して巻き起こり、

白い波動となって二つの間に爆裂した。

（一瞬、遅かったッ！）

凄まじい振動が鉾や空気を伝って全体に響いてきていた。
メキメキ、と鈍い音が聞こえる。

キファーフとガルトはお互いの間に生じたエネルギーに弾かれて、後方へー○メートルほど押されて引く。両足に力を込めて押される体を停止した両者の視界は、大量の粉塵に遮られていた。

（……やられた）

キファーフは右手に握っている物を一瞥する。そこには以前の鉾はなかった。鉾の切っ先から中央部分までを吹き飛ばされており、掌の中に残ったのはただの棒切れ。

（これじゃもう戦えねーな。それにしても、さっきの一撃。完全に決める気だったなあおいさん）

視線を上げ、今度は眼前の惨状に意識を向ける。

目障りに舞っていた粉塵が、風に流されて多少薄らいで行っているためどうにか見る事が出来る。

二人が激突した大地に、巨大なクレーターが見事に掘られていた。周囲にあった廃墟の建物は完全に瓦礫と化し、空間が先ほどよりも広く感じる。

（それと、何だったんだ？ さっきの光は……）

事実上、自分の命を救ってくれた光は今も尚、瓦礫の奥で輝いている。ただ、その光は妙な圧迫感を与えてくる。

（あの光、じいさんの殺気に似てるけど、少し違う。あそこから感じるのは膨大で歪な力の塊。こんな圧倒的な気配は、初めてだ）

状況が大きく変わりつつある。

恐らく、悪い方向に。

「これはもう引き時だな。これ以上の戦闘は得策じゃない……。お互いに、そうだろう？」

キファーフが問いを投げ掛けたのは粉塵の向こうにいる老人。そして意外な事に、問い掛けの返答は返ってきた。

「何を言っておるんじゃないや。お前さんは。武器を無くしたから引きたいってのが本音じゃろう」

「そいつを分かっただけなら話は早い。俺達は今引かせてもらう。標的の抹殺はまた今度、と言う事にして、あんたとの決着もいつか必ず付ける」

「お決まりな台詞でいい感じに締め括ろうとしおつて。己から大胆な啖呵切っておきながら、己から尻尾撒いて逃げ出す、なんてのお前さんは自分が情けないと思わぬのか？」

「思わねー訳ねーだろ。だが、今はプライドより命ってな。俺はまだ死ねないんだよ」

「ほおう、安っぽいプライドより命を取るか。何か信念でも持つているようじゃな。最近の若者にしてはよく出来た決断じゃと思う。でものお、わしはお前さんを逃がすつもりはないんじゃないや」

「そりゃそうだ。そっちには俺を逃がして得する事なんてねーからな。……でも、俺は引かせてもらっぜ？」

「わしから逃げ切れると？」

「ああ」

「その自信。何か考えがあるようだな」

「生憎と」

自身有り気に言い切ったキファーフの視線は、粉塵ではなく、瓦礫の山の奥へ向いていた。

瓦礫に潜む二つの影に。

二人の会話が途切れた瞬間。

ガルトは粉塵の中に勢い良く突っ込んで行った。

（逃がす訳にはいかん！　ここで奴を倒さんと状況は一切変わらん！）

キャロルの命を狙っている張本人を処理しなければ、何の解決にもならない。それどころかこちら側の戦力を知られてしまっているため、その対策を取られたら状況は更に悪くなってしまう。

（あの男は、今殺らなければならん！）

ピリピリと肌に痺れが伝わってくる。衝突した際に生じた膨大な元力^{マダナ}が消費し切れずに空气中に停滞しているのだろう。

大剣を振るい粉塵を掻き飛ばしたガルト。同時に術式を発動させたが、

しかし、抜けた先には誰もいなかった。

既に逃げられてしまったのだ。

「遅かったか」

舌打ちをしたガルトはキファーフの痕跡を探るため、周囲を一瞥する。

（あれだけの術者じゃからな。足跡など残しているとは思わぬが）

案の定、キファーフの気配は全く感じ取れなかった。あれだけの短時間でどうやってそれだけの距離を取ったのか、不思議なぐらいに。

（これは、痛い失態じゃな）

あの男を逃がした事で、今後あの少女に一体どれだけの危険が迫るのか。そう思ってしまうと遣り切れない気持ちになってしまう。

（……それにしても。結界で星空を覆っているにも拘わらず、どうしてこんなにも明るいんじゃないやろうな）

ガルトの術式『一筋の光』^{レイオフライト}は、発動させると同時に半径五〇メートルの空を結界で覆い、空からの光を完全に遮断して、『光浸樹』などの光源を破壊する。簡単に言うと辺りを真っ暗闇にする術式だ。

そして、ここまでが術式発動の第一段階で。

次に、辺りから光を消した後、大剣を白光させて相手の意識を強制的に一本の光に集中させる。そうする事で相手は暗闇の中、強調された光に視界を奪われ、結果本体であるガルトに意識を向け辛くなってしまふ。そして、光の太さ等を相手との距離事に調節し、気付かれる事なく接近して標的の首を取る。

言ってしまうと『一筋の光』^{レイオフライト}は暗殺系の術式なのだ。

そして現在、ガルトはその術式を発動している。本来なら辺りは

暗闇に覆われているはずなのだが、瓦礫の奥から漏れてきている膨大な光に、闇は完全に拭われていた。

（あそこは確か、少年がいるところじゃなかったかの。一体誰の作業なのかしらんが、どうにも奇妙な光じゃな）

あの光からは殺気、と言うより抗いようない圧力を感じる。長い人生の中、全く感じた事のない元力マクナを感じる。

（いや、この感じは天力に似ておるな。じゃが天力はこんなにも歪で荒々しいものじゃのうて。天力でも人力でも魔力でもない。もしかしてこれが噂オードマクナに聞く異元力と言うモノなのかの）

何にしても、まずは光の源へ向かう必要がある。今の状況を知るために。

——現在の戦況——

午後六時三〇分時点までの『薔薇十字団』メンバー団員は総勢四七名。ところが午後七時十二分現在の『薔薇十字団』団員数は一名。イ

ッザ＝ラージーのみ。

それに対しユアン＝バロウズを中心としたキャロル＝マーキュリ
ー救出部隊は、戦闘開始当初と変わらず総勢三名のまま。

戦闘の結果など、問うまでもなく明らかだった。

9 後悔

突然、廃墟を照らしていた『光浸樹』が砕け散り、星の光が消えた。

辺りが真っ暗になったと思ったら、少女の不気味な笑い声が耳朶に響いてきて、

言い知れない異様な気配を感じた。

その気配は殺気にも似ているが、少し違う。これは強大過ぎる力が放つ絶対的な威圧感。無視し様のない存在感。

「……」

イツザ「ラージーは反射的に気配を感じた方向へ視線を向けていた。

そして彼の瞳に映ったものは小さな輪郭。

両手首と両足首の皮膚が無残に切り裂かれ、手足を鮮血に染めた一人の少女。

彼が殺すべき標的。

それらを全て理解した上で、彼には分からなかった。

（あれは……、何だ？）

何故手足を負傷しているのか。阻害術式を刻んだロープで手足を拘束していたはずなのに、何故立っているのか。それらの理由もそうだが、それ以前に今現在少女が放っている気配。異常な威圧感と存在感。

とても普通の人間が放てるものではない。

あの少女が放つ気配に比べたら、自分がつい先ほどまで放っていた殺気など、子どもの駄々に親が抱く程度の些細な感情だったと、ちっぴけなものだったと、思い知らされてしまう。それ程に、あの気配は巨大で強大、そして絶対的なものだった。

（馬鹿げてやがる。こんなもん、どこの化け物だよ……っ）

掌に油が滲み出てくる。緊張しているのだと悟ったラージーは、少女に対して身構えたのだが、そこでふと思った。

（いや、待てよ。もしかしてこれなのか？ ダニエルが言っていた化け物退治ってのは。だとしたら……）

俺はここで死ぬかもしれない。

じわじわと口の中に溜まっていく唾液を一気に飲み込んだラージーは、この任務を承諾した時の事を思い出していた。

——冷たい月明かりが差し込んでいるとある教会の薄暗い聖堂の中で、人の話し声が響く。

「それで何の用だよ、ダニエル」

ダニエルと言う者に問い掛けたのはラージーだった。彼は説教壇の前にずらりと並んでいる長椅子の一つに腰を掛け、説教壇の前に立っている男を見据えている。

ラージーの前に立っている男はダニエル「マーキュリー」と言う。歳はラージーと同じぐらいで、背が高く凛とした端麗な容姿に癖のない茶髪。狡猾そうなイケメンを想像してもらえば分かりやすいだろう。

二人は所属している『薔薇十字団』内の派閥は違えど、割と仲のいい友だった。暇があればこうやって駄弁ったりしているが、しかし今は、どこか暗い雰囲気を感じていた。

「行く前に、一応伝えておこうと思ってな。お前がこれから受けようとしている任務。それを上層部に申請したのは……、俺だ」

「知ってる。キファーフさんから全部聞いたからな」

「そうか」

「でも解せねーな。何でてめえはあんな任務を申請したんだ？ キヤロール「マーキュリー」の抹殺。つまり、自分の妹を殺せなんてよお」

ダニエルはラージーの言葉を受け、頭を下げて少し黙り込んだ。考え事でもしているような、何かを迷っているような。どちらか判

断が付けられない表情をしているダニエルが、頭を上げて話し出そうとした時、突然別の方向から違う声が割り込んできた。

「危険だから、でしょ？」

女の声だった。品のある、明るい声。

ラージーとダニエルの視線は共に声のした方へ向く。

そこには二〇代前半ぐらいの一人の女性が立っていた。肩の上まである、毛先が大雑把に切り揃えられた薄い金髪に、穏やかな蒼い瞳。女性用の黒いスーツを着込んでいて、真面目そうな印象を与えてくる人だ。ついでにかなりの別嬪さんだったりする。

「あんたは確か……、ダニエルの彼女だっけか？」

「そうよ」「違う」

ほぼ同時に言った二人の返答は真逆なものだった。ダニエルは女性に怪訝な視線を向け、女性は驚いたような表情をしている。

「え？ 私たち付き合ってるんじゃないの？」

「それは初耳だな」

「えー嘘ばかり。貴方から告ってきたじゃない。忘れたの？」

「忘れた以前にそんな事実は存在しないと思うんだが」

「もーダニエルちゃんったら友達の前だからって恥ずかしがっちゃって。そーゆーシャイな所もまたカワイイんだけどね」

「恥ずかしがっていない。俺は事実を告げたまでだ」

「何言ってるの今更。あんなに熱い夜と一緒に過ごしたじゃない。貴方のテクで私イカされまくりで何度昏倒しそうになったことやら」

「妄想でそこまでなるとは、想像力が豊かだな」

「そうやってまた恥ずかしがっちゃってさ。ホント、シャイなんだから。機会があつたら今度またやろうね」

「ああ。次同じような事言ったら殺ってやる」

割と真剣な殺気を女性に向けているダニエルと、鈍感なのか頼に両手を当てて『次はどんなプレイを要求してくるのかしら。コスプレ？ それとも野外？ あーなんだか興奮してきたー』とニヤケ面でのん気な事を呟いている女性。

「そんな事よりも。アメリカ、お前何か用でもあるのか？」

「ん？ 別にないけど。通りかかったら知ってる声が聞こえて来たから割り込んだだけよ。それにしても貴方ってホント、クールなツッコミするわよね」

「悪いかな？」

「いいえ」

ダニエルの鋭い返答に、アメリカと言う女性は柔和な笑みを浮かべている。

そんな二人の漫才かいわに一区切り付いたようなので、ラージーは話の流れを元に戻そうとする。

「それで、危険ってのはどー言う意味だ？」

「あらごめんなさい。話が十分反れてしまったわね」

視線をダニエルからラージーに向け直したアメリカと言う女性は、そのまま落ち着いた口調で、しかしとても真面目な表情で話し出す。

「——そう。彼の妹は存在そのものが危険なの。破壊的な意味でね」

「破壊的って何だよ。町を一瞬で消し飛ばすような爆弾でも抱えてんのか？」

「冗談混じりで言ったラージーの言葉に答えたのは、アメリカではなくダニエルだった。

「ある意味においては爆弾。だがその威力は町一つを吹っ飛ばす程度じゃ済まない。この際だからはっきり言っておこう。アレの持つ力が正しく制御されて、もし『薔薇十字団』に牙を向いたら、——
——組織は確実に壊滅する」

「……は？」

思わず気の抜けた声を出していた。ダニエルが言った事の意味が、ラージーには一瞬理解出来なかったのだ。

「ダニエル、てめえは本気でそんな事思ってたのか？ この組織には世界中に名の馳せた実力者がごろごろいるんだぞ。そんな組織が

ガキ一人に潰されるだど？」

「ああ」

「……」

ダニエルの真剣な眼差しに、ラージーは絶句してしまった。今度はアメリカが言う。

「貴方は見ていないから分からないのよ。彼の妹はね、まだ十二歳なの。そんな幼い少女が、三〇人の教会の術者と五〇〇人ぐらい居た町の住民を全て、一瞬で皆殺しにしたのよ」

「おいあんたも。それ、本気で言ってるのか？」

「本気も何も、全て事実よ。そして彼もまたその場に居合わせた被害者で、唯一の生き残り。まあ言い様に依れば加害者でもあるけどね」

アメリカがダニエルに視線を向けた為、ラージーもそれに習って首を振る。

ダニエルは言った。

「お前がこれから受ける任務は子ども一人の抹殺じゃない。どんな任務よりも危険な『化け物退治』だ。もしアレの様子が少しでもおかしくなったら、その時は迷わず退け。いいや、そうになったらまず無事に退けるかどうか、だな」

「確かに。あの娘の射程圏外に退避するのは相当困難ね。五キロ先から眺めていた私にすら彼の妹、気付いたのよ。どうして攻撃して

こなかったのかは分からないけど、あの時はかなり寿命が縮まったわ」

「と言う事らしいから、危険だと思ったら即座に標的から五キロ以上の距離を取れ。生き残るにはそれしかない」

「おいおい……」

二人の話を聞いていると驚きを通り越して次第に呆れが出てきていた。実際に現場を見ていないラージーには、たった一人の子どもに対して過度な警戒をしている目の前の二人が、ただ臆病なだけに見えるからだ。

するとアメリカがスーツのポケットの中から一枚の小さな白い紙を取り出し、教壇の上に置いてあった羽ペンを使って何やら文字を書き出した。

「それともう一つ。私ね、占いが得意なの。だから貴方の未来を少しだけ占ってあげる。彼の妹の力が発動した際の、貴方の生存確率は………、あら。〇%みたい」

書き終えると紙に小さく息を吹き掛けたアメリカは、突然ラージーに死を宣告した。彼女は続けて、

「つまり、標的の力の発動は貴方の死を意味しているって事。自分で言うのもあれだけど、私の占いつて結構当たるのよね」

「結構って言うよりこいつの占いはほぼ一〇〇%当たるぞ。もしかしたらこれがお前との最後の会話になるかもな」

「何だよそれ。縁起でもねー事言ってんじゃねーよ」

「はは、確かに今の発言はよくないな。まあでも、用心しといて損はないはずだ。馬鹿馬鹿しい話かもしれないが、極力気は抜かないようにしろよ」

「……」

この時の二人の話は、やはり冗談としか聞こえなかった。ただの子どもが、そんな化け物じみた芸当を出来る訳がないと思い込んでいたから。

しかし、彼は早くに気付くべきだった。

ただの子どもを殺すだけの任務を、組織の上層部が任務として許可する訳がない、と。

そもそも、誰一人としてダニエルの妹を『ただの子ども』とは言っていないかった、と。

つまり、この任務には他の意味合いが含まれている事に、彼は気

付かなければならなかったのだ。

彼は後悔していた。甘い考えをしていた事を。友の忠告を信じず、従わなかった事を。

（今更ダニエルの言ってた事を信じたって、もう手遅れかもな）

こんな事になるんだっいたら遊ばずにさっさと殺しておけばよかった、などと言う後悔が頭の中で回っている。

ラージーはメイスを低く構え、少女を睨む。彼女のいる空間は異常な気配に影響されてか、真夏の地平線のように歪んで見える。

（……いいや、大丈夫だ。あれはまだ力を発動していない。多分、発動する前の段階だ。……殺るなら、今しかねえ）

占いでは力が発動した時の生存確率が〇%だと出ている。それなら力を発動する前に殺ってしまうえば、自分は殺られずに済むはず。深く考えている暇はない。

（速攻でけりを付けるッ！！）

強化術式を使い脚力を常人の五倍以上に強化したラージーは、五メートル走を二秒で走り切る速さで廃墟を駆ける。

当初、標的との距離は約三〇〇メートルあったが、走っていると加速も付くので時間で換算すると、約二五秒で任務を完了する事が出来る。

しかし、その二五秒の間に、状況は大きく変化してしまう。

少女の衣服。赤い鮮血に染まった真つ白だったワンピースの背中部分の布が、勢い良く弾け飛んだ。同時、露出した背中に刻まれた

赤くて丸い『陣』が閃光を放ち、その中から丸い蛍光灯のような、光を放つ輪が現れた。直径は少女の肩幅程度。赤みを帯びた光を放ち、その出現によって少女が纏っていた気配が一段と膨れ上がった。

一瞬、更に増した威圧感と少女の急速な変化にラージーは進む事をたじろいだ、それは本当に一瞬の事で、次の一瞬には既に覚悟を決めていた。

何が起きようと突き進む、と。

標的までの距離は一〇〇メートルを切っていた。もう三秒も掛からない。

「——ッ!」

声にならない咆哮。

己の中に残っている全ての元力^{マゲナ}を振り絞り、一本のメイスに集約し、最大の一撃を真正面から相手に放つ。

そして、

音も無く、鮮血が舞った。

『^{レイヴァッシュブレイク}破壊の衝撃』による爆破は、起こっていない。

同時、少女の背中に現れた輪の側面から、鋭利で薄く細長い、赤みを帯びた閃光の刃が飛び出していた。その刃は真っ直ぐと前方に伸び、ラージーの左肩を深く切り裂いていた。

「……っ!？」

ラージーは全く状況を理解出来ない。前に進んでいたはずの体はいつの間にか止まっていて、それどころか前方からの強烈な圧力によって真後ろに押されようとしている。

否。押されるなどと言う甘い事態ではない。

後方へ。尋常ではないスピードで。ラージーの体はぶっ飛んで行った。

叫びなど、出せるはずがなかった。

走馬灯すら、彼には許されないのだから。

10 助かる者を助けるために〔前編〕

イツザ「ラージーが地面と平行に、ミサイルの如く飛んで行く。そのまま廃墟を突き抜け、遠方の大地を掻っ切りながら減速する。掻き立てられた粉塵により、彼の生死は確認出来なかった。」

「なん、だよ。あれは……」

ユアン「バロウズは廃墟郡を突っ切って行ったラージーに、視線を向けていない。突然辺りが暗くなった事にすら気にしていない。彼の瞳には、彼の心には、赤く染まった両足を地面から切り離し、俯いたまま空中で静止している一人の少女しか映っていなかった。少女の背中から出現した、赤味を帯びた、光り輝く輪。その輪の右側面から前方へ飛び出した、長さ五〇メートル以上ある薄く細い、鋭く尖った閃光の刃。」

「どうなっただよ、一体……」

少女。

キャロル「マーキュリー」。

歳は十二か十三。背丈は歳相応かそれ以下。ブラウンでセミロングの髪に、毛先が外側へウェーブがかっているのが印象的。白い肌は見惚れてしまうほど綺麗で、明るそうな顔立ちに相応して、ひらひらした白いマキシワンピースを着ている。

ユアンが知っているはずの少女は、活発な性格で時々ドSな要求をしてきてとんでもなく大食いで、何処にでもいそうな普通の女の子だった。

しかし、

現在ユアンが見ているものは、そう言ったキャロル・マーキュリの像から明らかにかけ離れていた。出血のため熱が出ているのか、ふわふわしていた髪が汗でじっとりと湿っていて、綺麗な手足は鮮血に染まっていた。白かったワンピースは真紅に染まってしまい、同じく白かった肌も泥と赤に汚れてしまっている。

背中に浮かぶ光の輪と、宙に浮く身体。人間離れした雰囲気、壁のような存在感。

それだけでも既に異常を超えているというのに、それらを更に際立たせる変化が起こった。

正確には、輪の側面から生えている一本の巨大な鋭い刃に。

刃の全長が、一瞬で五〇メートルから二メートル以下にまで縮小したのだ。そしてそのまま刃は三つに分裂し、輪の左側面にも全く同じ刃が花びらのように三つ現れた。その変化と並行して少女のブラウンの髪が、血のような真紅に染まっていく。

左右三枚ずつ。赤い輪を中心にして出現した、合計六つの赤光の刃と、変色した紅い髪。

その姿は、神話や伝承・聖典などに登場するある生物を連想させた。

背中に白い翼を持ち、神の使いと称されるそれは、

天使。

六つの赤い光の刃は、天使の白き翼。

放つ禍々しい光は、天の神々しき輝き。

纏う圧倒的な気配は、神の絶対的な存在感。

人知を超えたそれは、もう少女でもなければ人でもない。

ただの――

「っ――、」

と。

ユアンは思わず自分の口から漏れそうになった言葉を、両手を使って必死に押し止めた。

(……言ったら、ダメだっ)

それは決して口に出してはいけない事実だったから。言ってしまったら自分が許せなくなってしまうと思ったから。

そんな彼の仕草を隣で見ていたアーウェルが、

「どうした？ あの気配にでも当てられたか？ まあ無理ねえだろうな、あれじゃ。ぶっちゃけ俺も結構キツイ」

「別に、そんなんじゃない。俺はただ――」

「それとも、思わず言いそうにでもなったか？ 自分の本音を。あの子に対して」

「……っ」

アーウェルの言葉にユアンは黙った。黙ざるを得なかった。目の前の男に全て見抜かれてしまっていたから。自分の本音を。口に出してしまいそうになった言葉を。

視線を前に戻したアーウエルは話を続ける。

「そう落ち込む事はないと思うぞ。あんなもん見たら多分誰でも思っちまう事で、誰でも言っちまいそうになる事だからな。その点お前はまだマシな方だ。普通なら言葉に出していてもおかしくない。でもお前は言わなかった。そいつはつまり、お前はそれを言っちゃいけねえ事だと分かっている程度には、あの子を大事に思ってるって事なんだろ」

「……」

何も言わないユアンにアーウエルはただ言葉を繋げる。

「何でお前があの子に対してそこまで思っているのかは知らねえが、きっとそいつはあの子にとってどんな事よりも嬉しい事だ。だからまあ、あれだ。あんな姿になったとしても、お前は、お前だけは、あの子を大事に思ってたってくれ」

もちろん俺も大事に思っているがな、とアーウエルは付け足した。

「……そんなもん、言われなくても分かってる」

彼女にはもう家族と言える者はいない。信頼できる友達や大切にしてくれる知り合いも、おそらくユアン達だけだろう。だから、彼女を守ってやれるのはもう自分達しかない。

「そうか」

彼の返答にアーウエルは微かに笑い、視線を前に向けた。そして苦い声で、

「まあそんな事を言ってはみたが、結局は何も変わらねえし分からねえんだよな。本当に、一体あの子に何が起こってんだ」

「？ あんた何も知らねーのか？」

「生憎な。思い当たる節が全くねえ……いや、待てよ」

「？」

言いかけて言葉を止めたアーウェルにユアンは首を傾げる。しばらく俯いて口を閉じたままだった彼は、すっと顔を上げると、

「あれはもしかして、あの子の両親があの子の為に作った、護身用の術式なのかもしれねえ」

「護身用？」

「ああ。以前あの子の両親がそんな事を言っていた。あの子は昔から、生まれつき持つてゐる特殊な元力マグナが原因で、色々なクソ野郎どもに誘拐されそうになる事が多かったんだ」

アーウェルの話によると、キャロルの持つてゐる特殊な元力マグナ——異元力オールドマグナと言うらしいのだが、それは一億人に一人の確率で現れるかなり貴重なもので、世界中の闇組織が挙って狙っているとか。

とある研究家オールドマグナが異元力の確保に大金をかけたため、と言う事もあるが、一番の理由は、その元力マグナを術的に抽出して専用のゴーレムのエネルギーなどに使うと、驚異的なパワーと破壊力を生み出す事が出来るため、と兵器的な使用が目的らしい。

「人攫いや奴隷商人なんかは二十四時間あの子を攫おうとしてくるが、あの子の両親は二十四時間あの子の側に居られるって訳じゃない。用事や仕事で彼女を一人にしてしまう事だってあるはずだ。そしてそれを奴らは見逃さない」

様々な組織が様々な目的で一人の少女を狙っている。しかし彼女を守るのは両親と、アーウエルのような繋がりのある人間だけ。教会には一応、協力の申請をしようとしたらしいのだが、教会の内部にも異元力オイドマクナを狙っている者がいたため、当てにする事は出来なかったらしく。

結果、四方八方から迫る多人数の敵から、四方も固められない少人数で彼女を守るしかなかった。

「人数的な問題でも穴は必ず空いちまう。そこを狙って敵が来て、あの子を攫おうとする。例えそれを全て防いでいても、次第に疲労は出てくる訳で、穴もどんどん広がっちゃう、状況は悪くなる一方所謂、終わり無き防衛戦ってやつだな」

そこで彼らが考えたのは、キャロル自身が身を守る事。
幸い、彼女には異元力オイドマクナと言う強力な武器がある。

「欠点を利点に代えようって事か」

「そつだ」

生まれつき持っているその特殊で強大な力のせいで狙われているのに、それを使わない手はないだろ、と言う事だ。

「自分の身は自分で守ってもらうため、あの子の両親はあの子専用

の、あの子の持つ元力^{マクナ}でしか扱えない迎撃術式を開発した。

でも当時の彼女はまだ一〇にも満たない子どもで、そんな年端もいかなない子が術式を上手く使って、攫おうとしてくる敵を迎撃できる訳がない」

「確かに」

「だから次に考えたのが、おそらく術式の自動制御。つまり、攫われそうになると自動的に術が発動して、自動的に敵を迎撃するってやつだろう」

そうする事で以前よりも攫われる確率は格段減るし、守っている者達も少しは気を抜く事が出来る。

「今のあの子はおそらく意識を失ってたんだ。術式を発動している間は強制的に気絶させられるんだろ。意識があつたら色々都合が悪くなるからな」

いくら自動的に起動して敵を迎撃すると言っても、エネルギー^{マクナ}となる元力は本体、キャロルから供給される。元力の精度は本人の心の状態に比例するため、意識を保っていると術の維持にも影響を与える可能性があるのだ。

「話をまとめると、あの子には自己防衛術式が組み込まれていて、今はその術式が発動中。本人は術式が発動している最中は意識を失っていて、このままじゃ俺らにまでその牙が向いちゃうかもしれないねえって事だ」

「そうか。意識がないって事は、キャロルは俺達を俺達だと判断できないのか」

本人の意識・記憶とリンクして、人物の認識が出来る高性能な自動制御術式を使っているのなら話は変わってくるが、そんな都合の良い術式など聞いた事がない。

大抵の自己防衛術式は発動すると自分の付近にいる、自分に危害を加える者、又は力を持っている者などを無差別に迎撃する。そのため、例え危害を加えるつもりがなくとも、迎撃対象になってしまう事が多々あるのだ。

「見た感じ、あの子の自己防衛術式はかなり強力だ。長い間、色々な術式を見てきたが、こんな見ただけで悪寒のするものは初めてだ」

アーウエルの実力から見て、彼は数多くの死線を越えてきた、言わば戦闘の達人だ。しかし今のキャロルは、そんな男でさえ尻込みしてしまふほどの力を放っている。その事にユアンは息を呑む事しかできない。

（あのアーウエルでさえこの反応。一体あいつの防衛術式はなんなんだ……っ）

驚異的な存在感と威圧感。人間離れした、まるで『天使』のような姿。

それら全てに絶句していたユアンは、そこでふと思った。

（……天使？）

心の中で思ったこの言葉に、彼は怪訝な表情になる。

以前にも、この言葉を耳にしたような気がする。否、この言葉に相当する『物』を目にした気がする。そんなに昔の事じゃない。最近の事だ。

そう思ったユアンは思い返す。今までに起こった全ての出来事を。

——臭うぞ。臭うぞ！『風』と『天使』の臭いが！

この町に来た最初の夜。『薔薇十字団』の最初の追っ手が攻めて来た時に、ハンマーを持った大男が放ったこの言葉。『風』とはおそらくユアンの事で、『天使』とはキャロルを指していたのだろう。しかし当時の彼は何故キャロルが『天使』なのか分からなかった。

——あの『陣』の形、一度似たようなのを見たことがある。けど『あれ』は簡単に扱えるものじゃねーし。それにあの『陣』、『あれ』と本当に似てるけど何かが違う。

キャロルの入浴を覗いてしまった時に見た、彼女の背中に刻まれた大きな『陣』。その陣はある術式の陣に似ていて……。

（——そうか）

そして。ユアンの頭の中で全てが繋がった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1720w/>

アルス×マグス

2011年12月25日18時57分発行